
白菊横丁

黒檀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白菊横丁

【コード】

N6011N

【作者名】

黒檀

【あらすじ】

社会不適合型人間・仙石虎蔵せんごくこぞう二十二歳は、なんやかんやと転がって「白菊横丁」という妖しげな界隈の《どろぼう猫》たる掃除屋の見習いとなる。謎のボス猫・銀次郎、猫神を祀る白菊神社、……人と人外のものが入り乱れる白菊横丁で謎めいたものたちと関わることとなる。一方で展開するのは、隣町・雨谷町も《谷相高校》に通う、とある女子学生の奇妙な事情。

前口上（前書き）

全年齢向けを意識していますが、問題があれば警告タグをつける等の処置をしたいと思いません。また、実在の地名とは一切関係はありません。

前口上

白菊横丁。

まともはこの街で生きている人間は、決して近寄らない界限だ。歴史の古い「白菊通りしやくきくどおり」という参道は、今や淫靡な遊びどころと化している。何故まともな者が訪れないのかと問われれば、横丁の入りを少しでいいから覗いてみると答える。

横丁というからには、表通りがあつてこそ。表通りから見える横丁の始点は、著しく街の景観を損なつてゐる。塗料がはがれ、鉄さびが浮かんでいる浅葱色あさぎいろのアーケード。みずみずしい色彩の中に錆色がのぞくのはやるせない。塗りは雑だったと見えて、そこかしこに泡がうかんでいる。天辺にはまる縦縞模様の看板には、昭和をほうふつとさせる古臭いフォントで「白菊横丁」とある。全体的に、終戦直後風のけばけばしい配色だ。

たいていの場合、アーケードの足元には猫がたむろつてゐる。通りすがりの人間にも恐れをなさないふてぶてしい猫たちだ。猫というものは怯えてこそ愛らしいというのに。まん丸のはずの目を底意地悪そうに細めてこちらを見てくる。昼日中ならまだしも、夕闇にまぎれてあの妖しい眼光を見ようものなら、心やすく眠ることはできない。

不気味な猫たち、という関門を突破して横丁の内に一步踏み入れてみる。とたん、生暖かい風が丘から吹きおり白菊通りをぬめぬめとかけぬける。撫でられた肌には鳥肌を残すだろう。この不快な風を、「猫又の尾振れ」と老人たちは呼ぶ。

このへん一帯は、小規模な山や谷がくりかえす。この「白菊横丁」も南北に傾く坂を利用している。(蛇足だが、『白菊』とは、この通りの名を冠しただけであつて、航空機の『白菊』とは関係がない。)白菊通りの北端は坂の頂点であり、横丁の終点だ。それを示すもうひとつのアーケードをくぐつた先には鳥居と石階段がある。

神社があるのだ。苔むしたみすばらしい社だが。名を白菊神社という。いつ興ったかなど私を知るよしもないが、今や氏子はいないにひとしいとは伝え聞いている。すると、神社ともよべぬ跡地と言すべきか。

なんでも、その本尊は猫の神らしい。現代というご時勢、犬は賢くて忠実と可愛がられても気ままでさっぱり読めない猫はうとまれがちだ。“さわらぬ猫に祟りなし”。猫は恨み深いというもので、すがるにも裏切るにも恐ろしくて、表の人々はこの社やしろによりつかない。そんな印象も手伝って白菊横丁には、華やいだ「外界」に對しておどろおどろしいそねみを抱いているような雰囲気の悪さがある。「猫又の尾振れ」というのも、「猫」つながりで安直に名付けたのだろう。猫神を祀る神社のお膝元で妖怪の「猫又」だなんて、戯れがすぎると思うのだが。さりとして、「猫又の尾振れ」をあびると近々身内に不幸がおきるといふ不吉な迷信があるので、「猫神のかわりに化け猫が祀られている」などという事態もありえそうだ。迷信の真偽はさておいて。いや、偽でなくては困る。

もう数歩進んでみよう。左手に飲み屋。右手に飲み屋。

更にもう数歩。公衆浴場がある。この湯殿は混浴で、白菊横丁を恐れぬ者はその構造の恩恵にあずかることができる。しかし、欲にまみれた時期の男子でも、あの木戸のむこうのめくるめく酒池肉林と、横丁の胡散臭さを天秤にかければ、後者がゴチンと地につくだろう。彼らのまともな情欲をもつてしても、横丁の薄気味悪さにはかなわず、蠱惑的な湯煙の奥に身を投じることが不可能だ。もうひとつの恐れをつけ足そう。艶美な「遊女」に、「筆おろしが済んでから出直しな、坊や」とあしらわれるかもしれないことだ。いや、決して、自身を回想しているわけではない。

今しばらく進むと、うつそうと生い茂った木々の奥に旅館めいた木造建築物が見える。それも、通りをはさんで左右対称に。表から見えるのは導入路だけだ。それらは雅やかな旅館などではない。「遊女屋」だ。なぜ向き合って二軒もあるのか、それは、人間の性別

が二つあるからだ。つまり、もう一方は男ばかりが放り込まれている。余談だが私は、あわやこの「男娼館」で飼われるところであった。それに比べれば、今の立場は甘んじて受け入れるべき範囲のものだ。このふたつの「秘宝館」、両者とも殿方向けであることにはかわりない。だいたい、遊びどころというのはいつの時代も殿御のために存在するのだ。

こうして歩いてみると、とある奇妙に気づく。どの店も暖簾はおろか、この闇夜に軒行灯のきあんどんすらもしていないのだ。しかし、それにも納得するしかない。なにしろ店であることを宣告せずとも事足りるのだから。そこが何の店かを承知している者しかやってこない。逆を言えば、それだけの客で回転しているという恐ろしい商売形態だ。白菊神社が作られたのは戦前だろう。店が並びだした時期はいつまでさかのぼるのか。定かではないが、平成のこの世まで長きにわたり、美的感覚のイノベーションがないまま（恐らくは道德や法律からも逃れつつ）横丁の店は続いているのだ。

ひどく内向的で閉鎖的と思つたらう。事實は逆だ。来るものは拒まず、去るものは追わない。主人は、客がまともであるか常ならぬ者であるか、あるいは、常連か新規かどうかなど、どうでもいい。飄々としたものだ。

ちなみに、私はまともな人間だ。人並程度の仕事も満足にこなせないという点と、掃除ができない点と、ときおり、なにかの調子でこの世ならぬものを見るといふ点をのぞけば。「それは異常だ」？世間はそう言うが、世間とは広いから、これはまだ「まとも」の守備範囲だ。

そのような私が、不気味な宵の口に白菊通りに踏み入っている現状。

私は、この一帯の土地と、その中のある店舗を「家督相続」してしまった。元々の権利者であった私の祖父は、妻をつれて今や悠々自適の隠居生活にはいった。彼らの転居先は竹林の山荘どころか、

外国人の街・ドバイだ。「どうにかしろ」と追う気も失せた。両親は夭折ようせつしている。今の私には逃げ場がないのだ。

私が相続した店は、白菊通りも終点に近いところに位置する。その店、《どろぼう猫》は掃除屋だ。こんな妖しい界限で「掃除屋」などと言われたら、想像するのはただひとつ。「殺し屋」のほかはない。

ところが、ほんとうに掃除をする商売だというのだから驚く。今から従業員に顔を合わせなければならぬ。

神社に続く暗い坂道をのそのそと登る気分は「通りゃんせ」の真逆だ。行きはこわい、帰りはよい、よい。

「なんだ、あれは、」

数メートル先で、頼りない光がゆれている。鬼火おにびは見なれている。そういう種類のものか、そうでないかの判別はつく。目前のものは人がもっている種類の光だ。胸をなでおろし、しかと歩を進める。

近づくと、明かりの持ち手の姿が明瞭さをおびてくる。小さな童わらわだ。墓参りの子供が手にする、持ち手の長いささやかな桃色提灯を手にしている。提灯を持つ童、背後の寂れたアーケードと白菊神社の鳥居、ひび割れた石階段。その組み合わせは、寺山修司監督のフィルムの一場面でもおかしくはない。

彼女は、（彼、かもしれないが、）目が隠れるほどの長い前髪で、断髪だ。そのうえ、忌みの感がするほどの真紅、それも無地の浴衣を左前ひだりまえに着る。下駄にのった白足袋は提灯の桃色の光を受けても暗闇にとける。いよいよ人間だと判定するのは早計だと思いはじめた。そう観察していると、ペこり、福島土産の赤べこ人形のようなお辞儀をする。襟が黒で長着ながぎが紅なので、その印象がわきおこったのだ。

「仙石、虎蔵さまですね？」

「ああ」

こちららも、首を曲げるだけの軽い会釈をかえす。

「《どろぼう猫》の者です。おむかえにありがとうございました」

少年だとしたら声変わりまえだ。そんな、高くて細い声だ。

「どうもありがとう。白菊通りは街灯がないから、まいった。店からもれる灯りを頼りに歩いてきたよ。あと、きみの提灯も」

「入り口までお迎えにいければよろしかったのですが。あの辺は、猫どもがたむろっているでしょう。銀次郎さまは、わっちが店を離れるのを禁じられます」

「銀次郎、」

当然知っているかのように名を口にする。銀次郎とは、この限界の猫の頭領だそうだ。《どろぼう猫》の飼い猫でもある。

「それに、ご存知でしょうが白菊の店同士は仲が悪い。敷地を越えたところをうろつくと、余計をおこしかねません。手前手前が慣習を守ってこそこの商売だと、鶴兄もおっしゃいます」

「つるにい、」と、また、阿呆みたいに童のことばをなぞってしまふ。

白菊通りの店舗は、いがみ合っている。初耳であった。これだけ親密そうにたち並んでおいて、不和だという。どうにも面倒そうな界限だ。

「商いの世界は、よくわからない。私はただの地主だから、」

なにを、と赤衣姿の童は失笑する。

「そうも言うてはいられませんよ、旦那さま」

空いたほうの手を口元にあて、くすくすと笑い声をもらす。肘まですりさがった袖口から伸びる細腕は、厭に白い。どろりとした蠟燭の明かりの中でも、まるで日章旗のように鮮やかな対比を成す。童の体が笑って揺れるので、提灯の火も揺れる。

それにしても、含みがある笑いには年長者への畏怖がない。ぞつとしない口元だ。童の一挙一動には舞台演技臭さがあり、子どもらしいとは思えなかった。可愛らしくないのだ。

そう眉根をよせていると、童は灯をななめ奥へつきだした。

「さあ、中にお入りなすってください。入り口はすぐそこです」

童の立っていた場所から五メートルと離れていない地点に古風な店舗がたつ。

長年の風雨にさらされ日焼けをし、表の木目は百塩茶だ。内に在るものの粋を感じる色でもある。軒下には鬼灯ほおずきがぶらさがっているが、よく見るとランプになっていた。アールヌーボー調の曲線的で装飾的な造形だ。

この店には、ほかと違い、暖簾がたれている。木の色に調和した濃紺の地に大きく鶴の紋が白で染めつけられている。《どろぼう猫》は総じて古めかしいが、不潔な感は無く清しい。さすがは掃除屋といったところだ。

「……ようこそお越しくださいました、《どろぼう猫》へ」
「……かろん、と下駄の音を響かせた赤衣の童が前に出、しずしずと木の引き戸を開く。」

一、仙石家前

仙石虎蔵せんごくたけぞうの両親は若くして亡くなった。それは物心つく前の出来事で、彼はあたりまえのように両親のいない世界にいた。自分は祖母から生まれてきたのだと信じていたほどだ。淋しいかと聞かれることはなかったが、もし問われればどう答えただろうか。彼にもわからない。

彼は祖父母に育てられた。

実質的な養育係は祖母である仙石素せんごくもとで、祖父の竜蔵りゅうぞうはほとんど彼の成長にかかわっていない。というのも、竜蔵は仕事でやむをえず家をあけていたので、虎蔵と素のふたり暮らしに近かった。素は孫に優しく、それ以上に甘かった。甘さゆえに、彼の欠点も可愛らしさとして勘定してしまうのである。乳母おんはひがな日傘で育てられたこととの因果関係は調べようもないが、虎蔵は頭良くもなかったし、馬鹿にもなった。彼の場合、社会に出て学問が必要でなくなると「馬鹿」の要素だけが残ってしまった。

彼らが住んでいたのは、ふたり暮らしには少々淋しすぎる広い屋敷だった。ぴかぴかと鼈甲飴べっこうあめのように光る廊下に、香ばしい香りのする薄緑の畳。縁側からは綺麗に整備された庭が広がる。どちらかといえばさびれた趣味の祖父は、緑よりかは石や苔を好んだ。幼い頃の虎蔵は、雨が石の隙間に吸い込まれるさまを見ては、「洪水にならないか」と不安になったものだった。

室内の造作にも神経がいきとどいている。いつも気持ちよく開閉する襖の棧は新品のように輝いている。また、骨董蒐集家であった祖父や父親が揃えた古美術たちが部屋に華をそえていた。ところで、そういった骨董たちから気配が発している気がするのだが、無視を心がけている。

凜とした清潔さは祖母が屋敷から消えてもかわらない。仙石の屋敷には家政婦は通つてこないし、虎蔵は掃除をしない。今は祖母に変わつて「付き人」が掃除をしている。そんな綺麗な仙石の屋敷だが、虎蔵の部屋の散らかりようだけは地獄絵図の有様だ。契約の関係上、付き人は虎蔵の部屋には入れないらしい。

海外に骨を埋めると宣言している祖父母を思えば、いつそのこと屋敷を売り払つてしまおうかとも思った。独りで住むには、閑散としすぎている。（正しくは独りではなく、付き人がいるが。）

しかし。そのほかにも、相当の照れ屋であると思えて虎蔵の前にはなかなか姿を現さないが、住みついている「気配」がいる。彼らを思えば、屋敷を手放すことはためらわれた。このような調子では買い手はつかないだろうし、なにより彼らの行く末が案じられた。家屋が取り壊されることはあつてはならない。行き場をなくした彼らに恨まれるのは自分だとわかつている。

祖父の竜蔵は「気前がいい物好き」と世間では噂された。遠方から古物商を呼びよせ、珍妙奇天烈なものを集めているせいだ。それは表の顔で、虎蔵に対するときには常に険しい表情のうえ、厳格さを失わない。仕立てのよい和服を身につけて髪にも髭にも一切の乱れがない、威風堂々とした老人だった。そのようなわけで、虎蔵は祖父を恐れてすらいた。

仕事の忙しさに見合つて、竜蔵は有力な名士だった。あらゆる方面に根を生やし、多くの物事を思い通りに運んだ。人並みの能力も持たない虎蔵がなんとか就職までこぎつけたのも、彼の手回しがあつてこそだ。学生の就職において、人柄や技術・学歴・経験云々よりも手蔓が最も強い力を発揮するよい例だ。

しかし、虎蔵の使えなさときたら、目もあてられなかった。竜蔵の故知の息子が経営する法律事務所に就職させてもらったはいいが、彼はことごとく竜蔵と雇用者の期待を裏切つた。重要書類の出入力

のまちがえは日常茶飯事、使いに出せば忘れ物しては出直すこと幾
数回、電話をとらせればメモもしない。コンピューターの扱いに関
しては明治・大正生まれの人間なみた。

髪が伸びる（費用を食う）ので、人形として置いておくわけにも
いかない。彼が事務所が存在し続け、問題が起こり続ければ、事務
所経営の肝心要ともいえる信用にかかわる。「孫を雇ってくれ」と
頼みこんだ竜蔵に、今度は雇用者が「お引き取りください」と土下
座する番だった。かくあつて、ついに虎蔵は職無しの二十二歳にな
つてしまった。

竜蔵の落胆も想像に難くない。孫を極楽とんぼにする気はさらさ
らない彼は、強気の手段にでた。扇をつきつけ、竜蔵は低い声で審
判をくだす。

「虎蔵。おまえ、男娼になれ」

白菊横丁の娼家しよつかで働けと命じた。幸いにも彼の孫は会話を苦手と
はせず、枕芸者なら与太者でも可能だと見込んだことだ。竜蔵い
わく「愛されるのに得手不得手もないだろう」。唯一、見目の良さ
だけがとりえの虎蔵が、若いうちに生涯の金を得るにはその手段し
か残されていないというのだ。

水商売をなめきつた提案だ。無論だが、虎蔵の返事は間髪いれず
にきつぱりと「厭です」だ。彼には酷な仕事であろう。声を落とす
て言うが、彼はいまだ初枕しよまくを交わしていない。

それよりも、虎蔵は目論んでいた。

仙石家の跡取りは虎蔵しかいない。しきたりに倣うなら、竜蔵が
亡くなればおおよその財産は素ではなく虎蔵に流れる。けしからん
思想だが、彼は太平楽のまま「棚ぼたもちから牡丹餅」をまちわびていた。
財産を食いつぶしながら生きるぞと鼻息を荒くする。齡二十二にし
てすでに人生諦めの境地にはいつている。

ただし、妻はもてないだろう。そこそこに財産があるうとも、自
分のような不出来な男を旦那として必要とする奇特な女など存在し
ないのだと身の程はわきまえてはいる。そんな彼に対し、かつて祖

母は「割れ鍋に綴じ蓋ですよ」と笑顔で言ったが、はげましの嫌味なのか。

牡丹餅は、竜蔵が存命のうちに落ちてきた。

切要な話はいつも、屋敷の最奥で弁護士を控えさせて行われた。

桂離宮も松琴亭しょうきんていを模倣した市松模様の襖、山紫水明をあらわした掛幅が目に飛び込む。しかし、最奥なので採光のための書院はなかつた。かたかく暗い部屋なので、虎蔵はその部屋が好きではなかつた。おまけに、照明器具は和風ランプだけだ。床に近いところから発する光は、祖父の顔を下から照らしだして、一層の厳格さをあたえている。その間が好きではないのは、暗さからだけではなかつた。知らぬふりをしていたが、そこにはいつも「気配」があるのだ。彼はだいたい、むこうから干渉してこない気配には我関せずをつらぬいてはいる。

その日は様子が違った。

その気配がない上に、控えている弁護士はいつもの者（彼の以前の勤め先の上司にあたる）ではなく、新顔だった。自分とそう年端も変わらぬ若輩者だ。「ひよつとしたら、自分よりも若いのでは？」そう疑わせるほど彼の肌には穢れがない。スーツに違和感があるのは彼が少年じみているからだろう。祖父に呼びだされている緊張よりも、この優秀そうな若者に注意をひかれていた。

竜蔵が脇息を強く打ったことよって、ようやく視線を祖父に戻す。彼は集中力が散漫でもあつた。（その性質が全ての失態の元凶でもあるが、改めるには時が経ち過ぎた。）

竜蔵の合図を契機に口を開いたのは若き弁護士の方だった。

「お初にお目にかかります、虎蔵さま」

彼は虎蔵に向かって頭を下げた。白皙はくせきに見合つて、真冬の霜柱の

ようにきりと締まった声だ。

「大河内録助と申します。よろしくお願いいたします」

ずいぶん古風な名前だと感心してまじまじと見る。「虎蔵」という名もたいがいだが。

彼の声と並ぶと、自分のものはひどく芯がないように思えた。大河内録助と名乗った男は苦笑した。

「名づけ親の道楽でしょう」

名に着目されるとは思っていなかったらしく、あたりさわりのない返答をする。

「左様ですか。……さぞかし優秀なのでしょう、そのような若さで弁護士とは」

すると録助は、ちろりと竜蔵を見やるのだ。その微妙な間を奇妙に思う。

「録助は、おまえの先輩だ」

祖父が説明する。なんと、彼は虎蔵よりも年配らしい。さらに、祖父は言いにくそうに咳払いをした。

「ああ、それと……彼は、丘向こうの谷相高校に通っている。切迫した用事があれば、まずはそこへ連絡するように。携帯電話は持たせられない」

携帯電話のことはいい。この家にかかわる限り、その小型の文明の利器は持つべきではない。

それよりも。録助は高校教師でもあるというのか。あの学校は私立校だから副職が可能なのか？ 教師でも携帯電話をもってはいけない校則なのか？

「つまり、僕は今、高校生です」

きっぱりと言ったのけた。その言葉は虎蔵を更なる混乱につきおとしたが、そう白状されてみると合点がいく。違和感を抱いたスーツは、よく見ればその高校の制服であったし、彼の幼さにも説明がつく。ただ、虎蔵よりも年を食っているということと、弁護士の資格をもっていることに説明がつかない。

「察しろ、虎蔵。これは、そういう範疇の存在だ」

たったそれだけの言葉でもピンとくるものがあった。録助は形を成した「気配」なのだ。常識が通用するわけがない。

祖父がかたち無きものについてはつきりと口にしたのは初めてだった。自分だけの第六感だと思っていたものは、遺伝だったのかも
しれない。

「録助にお前を任せるのは、わけがある」

それは、わけがなければ困る。

竜蔵はことさら重々しく告げた。

「お前に、『仙石』を譲るからだ」

二、仙石家 後

祖父の意図は単純だった。

社会に出てまともに働くことができないう虎蔵に失望し、竜蔵は自分の仕事をゆずってしまったのだ。(すると、竜蔵の仕事は社会的でないということになる。)「そこまでしてやったのだ、きつちりこなせ」という強迫が、言外にある。

竜蔵の本音としては、自分がさっさと引退したかっただけなのだが。息子の若死にによって、仕事からは一旦引退した身から再び戻らざるをえなかった立場を鑑みれば、許されるわがままだろう。

虎蔵は今や家主だ。

虎蔵のからだにあわせて仕立てられた家紋入りの着物が届くこと、「旦那さま」と呼ばれることなどによってじわじわとその実感を得る。はじめの数日間は「有卦うけに入った」と鼻歌まじりだったが、それは夢想どおりの甘いことではないと知る。むしろ無卦なのかもしれない。だんだんと、正体不明であった祖父のすがたもつかめてきた。

すべてを伝えるのは高校生の録助だった。弁護士という肩書きで紹介されたが、ようは虎蔵の身のまわりのことをなんでもこなす「付き人」に相違なかった。さすがに「どうせなら娘がよかった」との文句は言えなかった。

「仙石家の務めは、あと数年で終わるのです」

録助は、仕事を「務め」と言った。それは仕事でなく義務だそう
だ。

「ほんとうなら、竜蔵さまがすべておしまいになって、虎蔵さまは何も知らずに、ふつうの生活ができたのですが、」

虎蔵は、ふつうの生活、換言すれば「何もない生活」を求めている。録助の言うようなふつうとは、「社会に出て働くこと」だ。若干の意識の違いには言及せずにおいた。

「世の人々の労働に比べたら、貴方の務めはさぞかし楽でしょう」
嫌味ではない。事実だ。

「竜蔵さまは、白菊横丁の土地を有する地主でいらっしやいました。あの辺は、代々仙石家の所有地なのです」

「なんだって！？ あのキ ガイじみた飲み屋街が、」

録助は生真面目な顔で、差別用語を発した虎蔵の口をふさいだ。

子どもを宥めるときのように人差し指をふると、険しい瞳を見せる。「滅多なことをおっしゃらないでくださいませ。旦那さまは、あすここでお勤めをなさるのでありますから」

虎蔵は動揺した。

「どうして……、私は土地の所有者でただけだろう」

録助が首を横にふると、艶々とした白茶の髪も一緒にヤマトシなつてふれる。彼は見事な明るい髪をもつ。

「竜蔵さまはなあんにも、虎蔵さまにはお話にならなかったのですね。……いえ、いえ、承知しております。虎蔵さまは知らずに生きるはずだったのですから、」

彼は白の上着のポケットを探る。《谷相高校》の、厭にモダンな制服だ。山間にありながら海のような色合いの制服は、強烈すぎて息がつまる。

ポケットの搜索の結果、でてきたのはチューインガムのくずだけだ。彼は「あれ、どこへやったかな、」と独りつぶやいて、表のポケットや紺のスラックスのポケットに手をいれる。

紺と群青でできた縞のタイが蛇の舌のようにたれさがる。畳を舐めているようだ。二色の間に細く走る白が妙に毒々しいせいだ。

彼が何かを探すのに夢中なので、虎蔵は録助をまじまじと観察する機会を得た。録助は素直そうできて、油断ならない不思議さがあった。しかし、笑顔は純真そうだし、真面目そうな声や姿勢は教師

からも受けがいいだろう。不良めいた同級生にも「ちょっと意地悪してやるう」という気をおこさせないだろう。そのくせ、平気であくどいこともやってのけそうでもあった。使命にまつすぐなあまり、性格の整合性にはあまり気を払わないのかもしれない。「気配」らしいといえ、らしい。人間ならば、自分の性格の芯を維持するために大なり小なりの努力をするものだ。

と、そこまで勘ぐって「いやいや、深読みしすぎだ」と打ち消した。

「ありました」

彼はにこりと微笑んで、四つ折りにされた紙片を差し出した。羊皮紙のようにざらざらとした地で、開くとまさに広告とわかる。店の宣伝のようだ。

《お掃除はどろぼう猫マデ》

紙の頭に、大々的にそうある。はらいをダリの髭のように、止めを団子のようにしたポップな字体。昨今見ない古臭さがある。歌川国芳の描くような猫がホウキとハタキを持っている図が中央に配置され、そのななめ下で主婦と思しき女性の驚き顔が、あおりの角度で描かれている。女性に関しては、デフォルメがなく、写実的だ。末尾には、《タダシ、遺体処理は請け負いません》と悪趣味な冗談がすえられている。

大正・昭和の映画雑誌を思い起こさせるような色使いとデザインだ。レトロ風だと言ってやれば確かにデザインかもしれない。しかしこれは、ウン十年を風化せずに通過してここにあるかのような貫禄を見せている。紙は厚くてしっかりしているし、表面をなぞるとざらつきやでこぼこがある。彩色も、印刷用インキかどうか疑わしいほどの濃さで、手書きのようにように質感がある。製法からして今とは違うのかもしれない。

「……これは、一体なんだ？」

はいと小気味よく返事をするや、膝をすすめて広告を見おろす。「これが、仙石家の当主が代々務めをなさるお店です。もちろん、

旦那さま……虎蔵さまもです」

掃除は、虎蔵のもつとも苦手とする分野のものごとだった。働いていた時分、彼の整理整頓のできなさは万人の注目をひき、先輩をして「机上のスラム街だ」と言わしめたほどでもある。からかわれるだけならまだよいが、自身が構築した迷宮に文書を迷わせた日には、笑いごとではない。片付けのできないことは、直接、仕事の出来不出来にかかわってくる。失敗の思い出がよみがえり、気分は重い。

「早速ですが今宵、『どろぼう猫』で顔合わせがごさいます。店長の鶴屋さまがお待ちです」

虎蔵の苦悩を知らぬ録助は、淡々とつげる。

「夜道は心細いでしょう、旦那さまにお付きしたいと存じますが……、僕は銀次郎さまに嫌われておりますゆえ、横丁に踏み入ることは出来ません」

ペしよりと頭をたれる。

「ええ、誰だつて？」

「銀次郎、白菊横丁の猫の親玉です」

ぶつきらぼうに短く説明した録助に、ほんのわずかばかりだが、嫌悪感が走つたのを虎蔵は見逃さなかつた。

「銀次郎とは、お前の仇かたきなのか」

はじめに聞くことではないのだが、そう思えたので口にしてしまった。禄助は恥じ入るように言葉をにこらせる。

「……まずは、銀次郎さまにご挨拶なさらないことには、横丁で働けません。……と言いましても、銀次郎さまは『どろぼう猫』の飼猫でいらっしやいますから、とくべつ別所に出向せねばならない、ということはありません」

質問の回答は得られなかつた。今は時機でないのだろう。

ところで今の話は、猫の親玉と店長への挨拶のために『どろぼう猫』へ行け、ということらしい。ものを喋らない猫に挨拶など馬鹿げているが、頭をさげればいだけならどうということもない。そ

れよりも、店の所有者が何故わざわざ従業員の元へ顔を見せに行かねばならないのか、さっぱりだった。逆に、彼らの方こそが屋敷に訪れてしかるべきではないか、と。

虎蔵のぶすぶすとした混乱のうちに、録助はつとたちあがった。

「ご夕食は、召し上がってから行かれますか？」

気付けば夕闇が迫っていた。堅牢な塀のむこう、海のように広がる紫苑色^{しおん}。毒々しい紫の雲がたなびき、むしろ朝方にも見えた。梅雨がまもなくやってくることを、湿った風が教えている。

「……いない」

虎蔵は、空を見上げたまま、うつつとは思えぬ声でことわった。

「承知しました」

「あともう一つ、」

録助はちよいと首をかしげた。

「『旦那さま』ってのは、厭だな。名前で呼んでくれ」

かしこまりました、と「かしこまった」返事が返ってくる。

「銀次郎さまの手前、穢れを落とさねばなりませんのでお湯をお浴びくださいませ」

録助は一礼をすると、ほこりもたてないほどの軽やかさで座敷を去る。

掃除。

その言葉を耳にするにつけ、虎蔵のころにはひどく重い塊がどすんと陣取る。

片付けられていない自室のことである。法律事務所に首を切られてからというもの、一度も足を踏み入れていない。足の踏み場もないのだから「襖を一度も開けていない」と言うのが正しい。自室以外ならどんなに散らかそうとも、録助が翌日の朝にはきれいに片付けているのだが。

何かが片付いていない、というのは、ここに^{おじ}澱を抱くこととひとしい。自室に帰れないでいることは、自分の屋敷の中に居ながら

漂流している気分になるのだ。

そうした何かが滞っていながら、すうすうと穴もあいている。ずっとなんとなく、生来彼が見ぬふりを続けている穴が。

こうして、物語はもとの時間軸に進む。

仙石虎蔵が、《どろぼう猫》の暖簾をくぐる瞬間へと。

三、 ぼろぼろ猫 一

目の前で揺れる濃紺の暖簾を手でよけ、頭を低くする。

「旦那様、足もと一段高くなっておりますので、よくお確かめください」

背後で注意をつながす童の声がある。ああ、と返事をしながら視線をおとすと、ふわりと暖簾が背中にかかる。敷居を踏まないようにしてこえ、ようやく屋内をおがむことができた。

「お邪魔申す」

後続するはずの童は入場してこない。裏口にでもまわったのだろう。

人の目がないのをいいことに、後ろ手に戸をしめた。というのも、背をむけるのをためらうほどに美しい木目が目前に広がっていたのだ。何年も何年も耐えてきた強さの感じられるかまち板の板。

正確な種は判然としないが、香のわずかな香りがする。あまりにもかすかなので、数秒後には鼻に馴染んで気付かなくなるほど。そのひかえめさが好ましかった。

会席料理でもフランス料理でも、食前酒や先付けの印象がその先にあるものを象徴する。人のある建築物でいうならば、入り口がそれにあたるだろう。これは果実を絞った鮮烈な食前酒をぐいと呑んだ気分、歓迎されているようで心地いい。文目もあやめ分かぬ暗夜のなか出向いてやって良かったとの感想を抱いた。

長年踏まれ続けてきたのだろう、たたきにはでこぼこくぼみがあり、その一つ一つが清潔だ。寝転んでも平気かもしれない。と、妙な関心がわきおこる。

「そこで寝るなよ」

男の声がする。

顔をあげると、自分とそう変わらないほどの若い男がいつの間にか姿を現していた。音もない登場に、虎蔵はいたく驚いた。

彼は柱に寄りかかってこちらを見おろしている。土間は床よりもなかなか低いので、彼の立ち位置は必要以上に高く感じた。それだけでなく、平均程度の虎蔵を超えるほどには上背があるう。

「こんばんは、」

反射的に頭をさげた。しかし、その男は微動だにせず、惘然と虎蔵の挨拶をはねかえした。心もとない「こんばんは」がころころと転がり落ち、足元まで戻ってきたような気さえする。

適度に崩した和服が様になるのだが、帯も長着も漆黒であることが喪をほうふつとさせ、眉をひそめなくなる。

それはまだ許容範囲であろう。頬や腕っ節に傷をおい、刺青がシヤツの裾からはみでるような容貌でなくてはなりよりだ。そういった、恐ろしい分野の人間でなかったので安堵のため息をつく。この男はどちらかというど頭脳派だろう。だからといって油断はできない。近頃の流行としては、デスクワーク専門のような顔をして、裡には強靱な筋肉をひそませるのがオツなのだ。いや、油断していても、べつに殴られはしないからかまわないだろうが。

「早くあがれ、のろま」

「涼しい」を通り越して「冷ややかな」目を細くして、虎蔵を急かす。

どうにも乱雑な口調だ。容姿からして「おあがりください」とは言っても、「あがれ」とは言いそうにないのだが。この男はしつけないのなっていない丁稚だろうか？

清潔そうな髪は黒くまっすぐに、片側を耳にかけている。会社勤めの人間のように短くはない。そのせいか、学生だといわれても納得するかもしれない。顕しだになってる耳朶みみで、ごく小さい耳飾りがちらと輝く。ラピスラズリのように高尚な青。壁画を思わせる色。

「……今、なんて？」

「早くあがれと言ってるんだよ。靴箱はそこ、腕を組んだまま靴箱を顎で示す。」

「いや、そうじゃなくて、そのまえ、」

男は空気のように腰を浮かせると、式台におりてきた。裸足だった。

「たたきで寝たいと思っただろう。だから、寝るなと言った」

「どうして、私がそう思ったとわかるんです」

男は面倒くさそうに頭をかいた。自分でも、面倒くさいことを聞いてしまったと反省したところであった。

「そういう話はあとだ。……ついてこい」

顎ばかり使ううえに、命令口調ときた。

「顎を使っただけか、いや、としゃくられると母上に教わらなかったのか」「聞いたことない。そんな戒め」

唇をとがせたい思いで土間の縁による。録助の用意した仙石流の礼装なので、足元は雪駄せうただった。燕尾服は仙石家の辞書……もとい衣装箱にはない。(と聞く。)

虎蔵がこれ見よがしに履物を脱いでも、男は傲岸不遜じつがんぷそんな態度で見下ろしているだけなので、丁稚ではないらしい。小間使いにしては態度が大きすぎる。自分で履物を下駄箱にしまった。

男は声も掛けずに背を向け、ぺたぺたと歩き始めた。偉そうな顔して、たいそう間抜けな足音だ。

男を追うべくして急くと、体がよろけた。平時から和服なのだが、慣れない礼装用の袴は鬱陶しい。身近の柱を支えにすると、その縁をやモリがかけるのが見えた。何故か、虎蔵の視界のうちでピタリと一度動きを止めた。黒々とした瞳は、乾燥した鱗の肌に似合わぬほどの潤いを見せる。ささいな不釣合いが、厭な寒気となって身をおそつ。

店は凸の字のように玄関だけが狭い。中心には坪庭があり、床面積は思ったよりも広くはなさそうだ。

彼らは縁側を歩く。雨戸がしめてあるうえに電気が点いていないので、ほぼ闇だ。目の前を行く男の背が辺りの黒にとける。頭上の電気はおそらく白熱灯で、透かし文様の入った杉らしき木製の傘だ。明かりがとれば暖かな光がおちるだろう。にもかかわらず、灯さない。玄関を一步抜ければ歓迎の雰囲気は霧散してしまった。あの空間の好印象との落差に、どうにも胡散臭いものを感じる。

ここが白菊横丁であるということ、虎蔵はウツカリ失念していたようだ。

不安にかられ、男を追う足をはやめる。

横に並んだところで、男は口をひらいた。

「あんたが、新しい仙石のだな？」

態度が悪いのに加えて、初対面で「あんた」呼ばわりだ。会って数分としないのに明確な上下関係をつきつけられた気分だ。しかも今ごろそれを聞くのか、と呆れる。

「そうだが」

だとするならば、自分が丁寧語を使い続けなければいけない謂れはない。

縁側はつきあたりを左に折れ、先の正面の戸を指して「便所だ」と告げる。そこを素通りすると、奥に階段がある。

「あんたは？」

「いったい誰だ？」を省略して、先に階段を登る男のかかとに問う。

「鶴屋」

暖簾に染め付けられた鶴の紋が思いおこされる。

「ああ、じゃあ、あんたが店長か」

録助は、「店長の鶴屋さま」と言っていた。「階段」で「鶴屋」の名を聞くことの洒落を思いながら、下の名は、と質問を繋げる。

「ない」

「ない？」

階段を登り終えると、きしきしと音を立てる廊下を最奥まで進んだ。運動不足の虎蔵は、たった十数段の階段でもおっくうだった。

「まさか、『南北』とでも名乗ると思っただか？」

突き当たりの襖のまえで、男は真顔でふりむいた。考えていたことを読み取ったかのようなことを言う。

きまりが悪くて黙っていると、「名前が無くて不満か」と聞いてくる。不満かどうかと問われても、他人の名にかんしてどうこう言うつもりもない。鶴屋なら鶴屋でかまわない。勝手に心うちを読む男に反抗の意もこめて、だんまりを継続した。

気にするふうでもない青年は、懐から携帯用の糸くず取りを抜き出し虎蔵の着物をなぞり始めた。繊細な人間かと思いきやずいぶん大雑把なほうらしく、人を廃棄物のように荒々しくあつかう。背中に糸くず取りを走らせるその一撃が、叩いているように痛い。あえて痛くしているのかもしれないが。

「一旦、ここで穢れをおとす。そうしないと、銀次郎がうるさいんでね」

銀次郎。この男の場合、呼び捨てにしているところを見ると銀次郎と立場が対等なのかもしれない。

「ほんとうなら、湧き水を頭からぶちまけてやりたいけどな。そして塩を一袋浴びせかけてやりたいね」

腰をかがめたまま、上目遣いに嫌味らしいことを言う。

「清めの風呂には入ったのだが、まだ汚れてるのか……。見えない汚れなんだろうな」

参道を歩く間に、何かにさわってしまったか。

男は羽織の袖を掴んで鼻をつける。丸みのあたりだ。

「……白檀、」

小さく呟いた。

鶴屋は正面に回り、羽織の紐をなぞって点検する。そういった形式的なところは録助に任せただので、手直しは必要なかった。襟に手を入れぱんとひくと、よし、と満足げに頷いた。

鶴屋と間近で対峙し、気圧されるほどの上等の見目だと気付く。いや、気圧される原因は器量のよさだけではない。タンチョウの朱あけよりも数段暗い、蘇芳の瞳による。暗がりになつてなお、不気味な赤みを見せている。その赤みも、神経質にならなければ茶色の範囲として通じるかもしれないが。日本人にしては不思議な色の瞳、それを不躰に見る間も与えず彼は虎蔵から離れた。

襖に手をかけたところで、彼はふと振り返った。

「そうだ、携帯電話はもつてないな？」

「もつてないけど。必要ないだろう？」

もともと祖父や祖母は携帯電話を持たない人間なのでいいが、年頃の虎蔵は携帯電話のないことで不便な思いをした。携帯電話の発する何かを「気配」たちがひどく嫌がるので、仕方ないとは思っているが。

ああそう。彼はおざなりに返事をするにふいと顔を戻した。

自分から尋ねておいて返事をろくすっぽ聞きもしない。先からうすうす感じていたが、今や確固たる証拠をもって「これは厭な奴だ」と判ずる。

「……厭な奴で結構。あんたはとんまそうだから、仲良くする気はないぜ」

彼は冷めた横顔で静かに口を動かしている。

虎蔵が驚きをかたちにする前に、鶴屋は室内へと話しかける。

「銀次郎、仙石の到着だ。いれるぞ」

猫の声ではなく人間の声で、参れ。と返ってきた。猫は返事をしてないのであたりまえなのだが。

鶴屋は乱暴に襖を開け放った。襖の絵柄は、鶴と松だ。

四、どろぼう猫 二

《どろぼう猫》には離れがある。建物の脇の獣道にも似た路地に踏みいり、背の高い草と背の低い木をよけつつ進むと、ぽっかりとひらいた空間に出る。家屋に囲まれた坪庭があり、そこから飛び石が奥の離れまで打たれている。

「……この草を抜けと言うのか……」

仙石屋敷の壮大な庭に慣れきっている虎蔵は、ごくふつうで控えめなこの庭と寂れた家屋には歯牙にもかけない。自分が抜けてきた“獣道”をただふり返る。その作業のために、安っぽい化繊のジャージにわざわざ着替えたのだ。軍手に包まれた手でぼんやりと腹をかいた。

それはつい数分前のこと。

今日は勤務初日であった。虎蔵は一応の心構えでスーツを着て、指定された時刻の午前六時には顔を出した。眠気のかけらも見せない鶴屋は、虎蔵が姿を現すと開口一番「これに着替える」とジャージを放り投げた。

紺や臙脂ならまだ我慢ができたが、翡翠色と表すのはためらうほど軽薄な明るい緑のものだ。しかも、裾に向かうにしたがい幅はせばまり、最終的にはゴムではつりと足首にはりつく代物だ。ファスナーも付属している、ずいぶん懐かしいデザインときた。「ああ、白菊横丁の趣味の悪いアーケードの色とソックリじゃないか」と渋い気持ちになる。

「今から草刈りをしてもらっ」

鶴屋は早々と事務室を出てしまった。

虎蔵は慌てて着替える。格好がつかない色ではあっても、からだ

に馴染む生地の気軽さを感じてしまつ自分に舌打ちを禁じえない。胸元にぬいつけてある白い綿、「武智たけち」の名札。油性ペンで記されたのであろう、文字は藍鼠色に滲み、幾度となく洗濯されたことを物語る。

鶴屋は一階で待ちかまえていた。彼はまた、気軽そうな浴衣姿だ。彼によく似合う黒。どことなく薄い色素の混じる虎蔵にしてみれば、烏ほどに相応しく黒を纏う鶴屋が、羨望すべき凜々しさをもつものとして目に映る。黒が孕むのは忌みだけではないのだ。

彼は店を出て左、草木の生育域をつと指した。

骨ばつた腕が綿の袖口から伸びる。思い起こされたのは、昨夜見た赤衣の童の白い細腕だ。やはりあの童は小僧でなく娘だったのだらうと決着がつく。

「この導入路を綺麗にしろ」

虎蔵は失笑した。どう好意的に見ても草が噴出しているだけの空間だ。

「それが、今朝のトラの仕事だ」

トラ？ 聞き返す虎蔵は胡乱うごんな目を鶴屋に向ける。

「というか、待て待て待て。話が見えない。……私は、オーナーだらう？ どうしてあんたが私に指示をする？」

べつに仕事が厭なわけじゃないが、と断りを入れる。それでも妙な沈黙が二人の間を流れる。

「……誰がそんなことを言ったんだよ」

録助、

どうせわからんだらうと踏んで無責任にいう。しかし鶴屋は事情に通じている様子を見せた。

「録助の言葉を真つ向から信用するなよな。あいつはここに慣れてない、まだ」

「あんた、録助を知っているのか」

「いいか、録助の言葉は忘れる。あんたは、今日から《どろぼう猫》の見習いだ」

質問の答えとしておおよそ相応しくない。

「聞いてないぞ」

「今知ったなら、聞いていなくて当たり前だろ。それともなんだ、お前は今から『どろぼう猫』の新たな経営方針でも打ち立ててくれるのか？」

う、と言葉につまる。実際のところ、見習いが相当だ。とすると、鶴屋が上司になるのだ。

鶴屋は呆れた表情で作業道具をおしつけてきた。いささか頼りない小型の鎌だ。掃除屋稼業であるからにはいまま少し効率的な器具があるはずなのだが。詳しい説明を請うと、彼の眉間には縦皺がきざまれる。

「雑草を刈れ。木を切るな。以上。昼には回収が来るから、それまでには終わらせておけよ」

ひとまずここは彼にしたがうこととして、昼までなら楽勝だと心安くなる。なにしろまだ午前六時を回った程度だ。

「言葉通りにとるなよ、間抜け。『昼間までたらたら時間を掛けるな』という意味だからな」

だったら初めからそう言え、という文句は飲み込んだ。言わずとも鶴屋に「聞こえて」しまったはずだ。忌々しそくに蘇芳の目を細めたのがわかる。

「……問題があったら報告しろ。俺は事務室にいる」

生いしげる草木によって、虎蔵の冒険心が喚起されたのは仕方がない。ひとまず終着点を目指したすえ、今に至る。

表へと引き返すところで、鎌のないことが惜しまれた。無駄な往復を挟まずに内から外に向けて掃き出しながら作業すればよかった

のだ。裏の林に投棄するのだから、刈った草は道路側で回収するに決まっている。このような、ささいなところで明らかにされるおのれの要領の悪さにうんざりする。しかし、再び往復するのも面白くない。意地をはって外から内へと作業をすすめることとした。妙なところで意固地になるのも彼の悪いくせである。

建物によりそう左端には敷石が続く。そこにおおいかぶさるようにして、背の高い草は身を倒している。どうやら隣家の雑草がここまでせまってきたらしい。土地の境界である垣根からおぞましくのびてくる。そのせいで《どろぼう猫》の敷地内でも新芽が育っていた。こうなるまで放置していたことが驚きだ。

初夏の陽は力強さを増してきた。作業は終わりが見えてきて、額に浮かんだ汗を拭う。ジャージの上着はとうに脱いで表に放っている。時計を檢めるとまだ七時半だ。

「なるほど……。あの性悪、ふつうの勤務開始時刻までにこの雑務を終わらせようって魂胆なんだな。時間外手当は当然あるんだろうな……」

虎蔵がぶつくさを言っていると、くすくすとカンにさわる笑い声が降ってきた。「降ってきた」と表現するのはまさに正しく、竹の塀の上から聞こえてくるのだ。

そこに、足をぶらぶらと揺らした着物姿の童がいる。

「聞きましたよ、聞きましたよ。いまの愚痴、」

昨夜の赤衣の童だ。昨晚と変わらぬ赤衣に、異様な髪形なのだから間違えようがない。

「……仙石の旦那。鶴兄つるにいは性悪・傲慢、……厭な奴でしょう」

瞳の見えない人間と向き合うのは気味が悪い。厚くて長い前髪のせいで、こちらは彼女の確かな表情が判らないが、あちらは虎蔵を隈なく觀察することができるのだらう。覗き穴から盗み見られているようで、首筋がむずがゆい。

「厭な奴だよ。寒気がするほど。……たぶん」

答えてやると、童は嬉しそうに薄くて細い口の端を上げた。子どもなりに、ひびわれて潤いのない肌だ。

「そうでしょう、そうでしょう。わっちも鶴兄が嫌いです」

「嫌いだとは言っていない。大人は、軽々しく好悪を顕さないものなのだぞ」

虎蔵は、この忌みの感がする娘とは余計を話すべきではないと直感した。

そんな虎蔵の疑念を承知しつつ楽しむように、彼女は嬉々として話を続ける。

「ねえ、鶴兄は厭な奴ですよ、旦那さま。さあさあ、わっちと一緒に鶴兄に嫌がらせをしましょう、」

悪戯でなくて、嫌がらせ。雲行きが怪しい。

「お前は鶴屋のなんだ。兄と呼ぶからには、妹か、」

「違いますよ。わっちは屋守ですから、」

「やもり？」

左様です、と齒をのぞかせる。

虎蔵は慎重に腰を起こした。

「……私にどうしろと言うのだ」

いくら彼が能無しだろうと、職場の上司らしき人物ともめ事を起こそうという気はない。その一方で、童の言い分も気になる。従う・従わないはさておき、彼女の話の続きを促した。

童は昨晚の動きをなぞるように、すつと白い腕を上げた。からだと垂直になるほど。指の先は、離れ。

「あの茶室が……どうした」

茶室ではないが。いぶかしみながら、首を伸ばして童の指す先を眺めた。何のかわりもない粗末な小屋なのだが。

「あれは、鶴兄のお家です。鶴兄があすこに住んでいるということですよ」

へえ、と特に感慨もなく新たな知識を受け取った。

「わっちは、あすこに忍び込んでやりたいのです。あすこに入って、」

良くないことをしたいのです」

やはり子どもが悪戯だと、安堵のため息をつく。

「……そんなことか。行けばいいだろう、勝手に。足がないわけじゃないし、」

彼女の粗末な下駄を見る。鼻緒は古く黒ずみ不潔そうだ。それに付けて、明るみで彼女を見たせいだろう、着物も帯も薄汚れ、糸のほつれが見つかる。締まって美しい装いの鶴屋と同じ敷地にいるものとは思えない。

彼女は虐待に近い扱いを受けているのではないか、という疑いがちらと通りすぎた。通りすぎただけだ。

「それが、行けないからわっちは困っています。……あいつのせいです、」

童は憎憎しげに離れの屋根の奥からのぞくものを睨んだ。裏手の林と一体化して見える一本の木だ。小ぢんまりとした敷地には似合わぬほど高い。街路樹ほどは背があるう。建物の背後に生えているだけまだいいのかもしれないが。

「仙石の旦那さまはご存知ですか。あれはナナカマドというのですよ」

「ああ、あの赤い実をつけるやつ、」

その木が彼女にどんな障害をもたらすのか皆目見当がつかない。

先刻から、童の話は先の見えない迷路のようで置いてけぼりをくらう。

童は手をおろし、けたけたと肩を揺らす。彼女は何かをはばかるように、声を殺して嗤うのだ。

「モチロン、ナナカマドは日本名でしょ。『七回、竈の火にくべても燃えない』て話から名づけられたとか、どうか。でもですね、旦那、あすこにあるのは東洋の種じゃないのですよ。ローワンと呼ぶのが正しいでしょうねえ。西洋のもの……魔除けの木なのです」

魔除けとは虎蔵にも近い話題だ。彼自身信心深いところはないが、気配を退けるために岩塩を持ち歩くのが彼の常だ。信心に關係

なく在るものは在るのだから、対処の必要を迫られる。

「rowan、この語の語源はいろいろと言われとりますが、その中に古代スカンジナビア語のrunaだとする説がありますがね。この木は寒いところにしか生えませんが、説得力がありませんでしよう。白菊町も欧州の同緯度の地域に比べれば寒いものですから、育てられるのです。……忌々しいことに。そいでもってruna、これ、その言葉で『お守り』という意味なのですよ」

彼女は一旦、言葉を切った。虎蔵がついてきているか、確認したように思えた。こんな童に気をつかわれるとは。

「……確かに、ナナカマドは魔女が使う守護の木なのです」

長々とうちくを垂れた娘に、ようやく反応を返せるのは一箇所だけだ。

「魔女？」

「そう、魔女です。白菊横丁には、ずうと前から西洋の魔女がいるのですよ。そいつが、ここに植えたのです。裏庭をご覧になりましたか、」

虎蔵は首を横にふる。そもそも、裏庭の存在をはじめて知った。裏手は丘につながる林しかないものと思っていた。

「変な植物がいっぱい植わってますよ。クマツヅラやオトギリソウ、それからローズマリーやセージみたいな薬草。……ぜんぶ、魔術の道具ですよ」

胡散臭そうに見上げる虎蔵を、どうにかして活動の域に動かそうと童は画策する。

「気味が悪くなってきましたでしょう。わっちも気味が悪いのですよ。だから、仙石の旦那さまにお頼み申します。あの庵の玄関の上に、ナナカマドのお守りがあるでしょう。あれをちよいと外して欲しいのですよ、」

童の提案は、荒野の悪魔の囁きに似ていた。まさしくその通りであるなら、受け入れるのはあまりに恐ろしすぎる。この童の言葉には耳を貸すべきでないと結論した。第一、不気味を語る娘がふつう

の存在であるはずがないのだ。

「邪悪に対する守護くらい、ふつうだ。現代の一般家庭でも施しているだろう。それよりも、気味が悪いのはお前の方だ」

はからずも、《どろぼう猫》の異常性への賛同だともとれる意見を述べることとなった。

童は厚い前髪の奥で虎蔵をながめている。とぐろを巻いた蛇を目前にしている気分だ。

緊張した空気を切り裂くように童の唇はひらかれ、口元に薄ら笑いが浮かぶ。

「おい、トラ」

突然、店舗の二階から怒声が落とされた。童に釘付けになっていた虎蔵は、体が揺れるほど驚いた。金縛りがとけるのと似ていた。

鶴屋が窓から上半身を乗り出している。

「いつまでちんたらやってるんだよ。休んでいいと誰が言った。終わったならさっさと集めて表に出しておけ」

この間抜け、と最後に罵倒の言葉を付け足された。

彼に被虐嗜好はないが、これだけさっぱり言われるのは逆に天晴れだった。天晴れなので、はいはい、とまさに二つ返事で熊手を握る。日陰に置かれたままのそれは、ひどく冷たい。

再び塀を見やると、童は姿を消していた。童のことを“上司”に報告してやるうかとも思ったが、いかんせん子どもとは気まぐれなもの。たかだか十ほどの子どもに悪事の協賛を求められたことなど、気にすることはない。虎蔵は時を経ずしてこの一件を忘れるはずだ。

ちやり、と小さく砂を踏む音がした。

虎蔵は離れの方を振り返る。そこにいたのは銀次郎だ。

「銀次郎、」

彼女は虎蔵の呼びかけに対して一寸も反応しない。実に気ままに

尻を振って裏手の庭へと去っていく。

彼女はとても美しい。時よ止まれと願うほどに。

五、どろぼう猫 三

《どろぼう猫》の見習いとして働きはじめ、数日が経ったある日。虎蔵にとって初めての客が訪れた。

鶴屋は客に対しても横柄さを崩さなかった。呆れる反面、頑固な芯を天晴れとも思う。柔和さのない薄い笑みで「いらっしやいませ」を口にする。胡散臭い世界に転がり込んでしまい、動転している人間を安心させる素振りもなく、歩み寄りもない態度だ。

客は不審そうな表情を消さぬまま、上目遣いにはあとうなずく。客の視線が鶴屋に向いているのをいいことに、虎蔵は彼女の手前に置かれている名刺を盗み見る。赤地に黒文字とは、死神が差し出す名刺のようにも思われて滑稽だ。

それにしても、と虎蔵は憤る。（今更《どろぼう猫》の悪趣味を嘆いても仕方がない。）

名刺を検めるに、鶴屋にはたしかに「千歳ちとせ」という名がある。虎蔵に対しては、なぜ「ない」などとあしらったのか。この男のことだ、新人をからかっただけかもしれないが。彼の一挙手一投足について深く考えることは、無益に時を過ごすことと同義だ。おそらく大した意味がない。

鶴屋は虎蔵の腰を突いて挨拶を急かす。

「ああ よろしく。見習いの仙石虎蔵です」

虎蔵の言葉にも、イヨイヨ客はウンでもスンでもなかった。無理もない。

この応接室の異常さときたら。虎蔵も、はじめて入った時は眩暈を起こしかけた。ここに座っているだけで、《どろぼう猫》の名物客である「化物両親」でさえ己がために喚かんとする氣勢をそがれることうけあいだ。

客間は真紅。砂壁も、天井も。襖は赤と黒の市松模様。赤は人を落ち着かなくさせる。客の手前我慢してはいるが、虎蔵自身、息苦しくてかなわない。涼しげな横顔を見せている鶴屋が憎らしい。脈が速くなり、汗が吹き出し、首もとのネクタイが蛇のようにまとわりつく感覚がある。当然それらは錯覚なのだが、この錯覚こそが赤のひきおこす仕事である。

まともなのは畳や家具、そして、三つボタンのスーツを着た二人の青年。彼らの見目による（張りぼての）ふつうさをもってしても、胡散臭さは払拭できない。

客には逃げ去るといふ選択肢もあるが、彼らは決まってさつさと依頼をすませようという思考回路になるらしかった。そうせざるをえないのだ。世間にありふれている清掃業者を利用せずに、白菊横丁も最奥の《どろぼう猫》に駆け込むくらいなので、彼らの依頼内容もなかなかまともでない。鶴屋の説明するところによると、新規の客にかんしては正しい意味での掃除の依頼は少ないそうだ。

疑り深い猫のように目を光らせていた客は、ようやく口をひらいた。その唇はかさかさ乾き、皮がべろりとむけている。この部屋の冷房による乾燥のせいかもしれない。

「……遺品整理は取り扱い事業の範囲ですか、」

「ああ。それが主流だな。値段は応相談」

「あ、いえ。今回の依頼は遺品整理じゃないんです。掃除の際に出た不用品は、買い取ってもらったり、捨ててもらったり出来るのかなと思っただんです」

「当然。ふつうの業者と違って何でも引き取るぜ、……何でも。特別にかかる費用は負担してもらっけどな」

客は安堵の息をつく。

「足をくずしてもいいですか」

「足をくずすのにいちいち許可があるもんか。あんたの足だ、好きにしるよ」

ここにきて、鶴屋の口調に柔らかさがあらわれた。言葉は突き放しているようであっても。

「……悪いな。ウチには洋間がない」

嘘をつけ、と虎蔵は内心毒づいた。

「平気です。正座は慣れているんですけど、今はすこし緊張してるだけなんです、」

彼女ははにかんでぼりぼりと後頭部をかいた。ひょうきんそうな様子が垣間見える。依頼が可能だと見通しがついて、緊張が和らいできたのだろう。

「ウチの店に連絡できただけでも上等だよ。あんな時代錯誤な広告を信用できたんだからな」

一応、鶴屋もあのチラシの今日性の無さは承知しているらしい。そのくせ、デザインを刷新しようとしないのでから不思議だ。

「なかなか胆のすわったお嬢さんだとお見受けするぜ。……茶と茶菓子でも」

三者の前には、藍が目には鮮やかな染付けの湯のみがある。とくべつ、客には和菓子つきだ。

「では、ご遠慮なく」

許可得たりとまっさきに碗に飛びついたのは虎蔵だった。

自分の高姿勢はさておき、客（や自分）より先に茶にありつく見習いの無作法を鶴屋は許しはしない。

「あん、と彼の太ももを打つ。あまりに鋭いので、虎蔵は危うく茶を客に吹きかけるところであった。」

「見苦しい奴だな」

虎蔵のふくらはぎをつねったまま、にらみつける。

「気にしないでくれ、ええと……」

名前は、と聞く。

「小島です。小島渚（こじまなほみ）」

「ああ、小島さん。申し訳ないね。こいつは出来が悪いんだ」

「いいですよ。なんか可愛いですし」

顔をしかめるどころか、逆に愉快そうに笑う。彼女の緊張を、意図せずほぐす結果となった。虎蔵は、照れと恥に今更顔を赤くする。彼女は自身の発言によって引き起こされた虎蔵の反応を気にもとめずに、用意された和菓子に目をおとした。

鶴屋はその目線に鋭く気付く。

「あんたくらいの年頃だったら、洋菓子の方が口にあうだろう。ケーキにするか、」

たしかに、依頼人の容貌はどうおまけしても高校生程度と見える。録助と同じほどの。依頼人がこれほど若いとはゆめ思わず、事務員は和菓子の方を用意したのだ。

その少女から遺品整理などという言葉がポンと出るのだから、やはり、白菊横丁を訪れる人間はわからない。さすが熟達の鶴屋は、浅ましい詮索心を見せなかったが。

彼が膝をつかせると、彼女は慌ててひきとめる。すると鶴屋は、善良そうな笑みを見せた。

「ああ。わかってるよ。あんたは和菓子のほうが好きだ
彼女はぎくりと固まる。

はじめは誰でも驚くだろう。この男に内心を言いあてられるのは。しかし、気のせいだと再びからだの力を緩和させるのだ。

「若あゆ、可愛いから好きです」

可愛い、の大安売りだ。この程の娘なら、二言目には「可愛い」
がくる。虎蔵の照れもすうと引く。

「遠慮なくいただきます」

「食ってもらうために買ったんだ」

しかし。彼女は一度和菓子切りを手にしたものの、力無くおろす。
「……やっぱり、その前に、依頼内容を聞いていただけますか」

彼女は切迫した様子で、抱える混乱を鶴屋に伝えた。

「わたしの学校の『開かずの第二宿直室』を、掃除してください」。

その言葉のあとに続いた荒唐無稽な「怪談話」に失笑した虎蔵の大腿は、厳しい攻撃を再び受けることになる。

彼女の依頼は、様子を見て取りかかるという決着になった。早めにどうにかして欲しいとのことだったが、鶴屋いわく、おいそれと手をつけられないケースだと言う。

「積極的に掃除をする者がいるということは、積極的に汚す者がいるということ」、だそうだ。積極的に汚すつもりでなくとも部屋を混沌と化す虎蔵にしてみれば、鶴屋のこの格言は謎かけでしかない。くわえて。「開かずの間と掃除」、それらの連関はある程度想像がつくが、怪談という与太話をはさまると意味不明で用心の要る話になる。空蝉うつせみの人でないものを見る虎蔵は、予防はしても、彼らの排除が必要な事態に遭遇したことなどない。ゆえに、世にはびこる幽霊話は眉唾ものだとして、信じてはいない。

すぐさま動こうとしない《どろぼう猫》に満足していない小島渚は、しぶしぶ店を去ることになる。

「早めに助けにきてください」

その言葉が、虎蔵の耳に残った。

依頼人の見送りを担当するのは、事務員の武智鉄子たけちてつこ。名前にふさわしく、鉄のように硬質な印象をもたらす人間だ。

そこはかたなく心配になる。彼女は戦慄するほどの涼風美人だが、いかんせん笑顔がない。義務並みに笑顔が必要な場面でも微笑ましい神経は恐ろしい。器量のよさによって来たるべき幸運の何割かを、その無表情さで損なっているはずだ。かかる別嬪べっぴんが、このような気味の悪い店に在ることの不条理にもいくらか納得できた。あの調子では、世間一般の機関、あるいは水稼業でも生きてはいかれまい。

彼女は仕事中でも滅多に口をきかなかった。

他方、もう一人の従業員は饒舌がすぎる。この二人を足して二で割つたらよかろうと鶴屋に提案すると、彼は大真面目で言う。「全長二メートルのミキサート、鋳型を三つつもってこい。お前も一緒くたになつて、仕事の能力を分けてもらえ」と。

「……おい、聞いてンのか」

鶴屋は虎蔵の耳をぐいとひっぱる。

「悪い。聞いてなかった」

悪かったと反省しているかどうかは甚だ疑わしい。

「ああ、知ってる。だから聞け」

床柱（しじゆう)に寄りかかって腕を組む彼の姿には不機嫌が漂う。先ほどまで生真面目になでつけられていた黒髪は、今は平時のようにおろされてる。この男の変身の早さには舌を巻く。

「今のお嬢さんの話はわかったか」

「全然。ふざけた怪談話だつてことくらいだ」

「……だろうな」

深々とため息をついて落胆をあらわにする。

「この際、詳しいところを言っておくべきだな。《どろぼう猫》が掃除するのは、部屋や物というくりだけじゃない。もちろん、ただの不要物引取人でもない。ときどきは、こうして忌みのもたらす澱を掃除するんだ」

おり？ と首をひねる。

「忌みがもたらした汚れ。呪い、怨念とでもいうのか？」

「逆に聞かれても困る。つまり、除霊師ということか」

「除霊師なら除霊師と名乗るだろ。ちなみに、霊媒師でも修験者でも陰陽師とも違う」

と、先回りして虎蔵の質問を封じる。

「『あえて言うなら』とあらわせないから、包括的に『掃除屋』なんだよ。表向きには……つまり、顧客向けには掃除もする」

「私のジジイもそんな真似を？」

ネクタイの鞭が飛ぶ。器用なものだ。

「あんたと竜蔵の旦那と一緒にするな。あの人の孫だというのが怪しいぐらいあんたは木偶だ。ここ数日の、事務仕事での失敗も寒気がするほどだ」

忌々しげに目を細め背広を脱いだ。初夏には贅沢な冷房を止めたせいか、部屋の中は暑くなってきた。精神にせまるような部屋の赤がそれを加速する。

「あんたが出来なせいで、旦那は『定年退職』の前に『自主退職』したんだろ。おかげで、俺はあんたをおしつけられた。旦那もやってくれたね」

録助は言っていた。仙石家は《どろぼう猫》の務めをもう少しで終えると。その最後の最後になって、選手交代したもので彼は気にくわないのだ。

いずれ店を去る人間に仕事を伝授する手間や時間は、《どろぼう猫》の損にはなっても益にはならない。それでも、《どろぼう猫》は契約の限りは仙石家の者を店に置いておく必要があるらしい。

「私がオーナーなのに、何でこのあつかいなんだ」

「まだ言ってるのか。そんなの表だけに決まってるだろう、間抜け」
しまいにはタイを投げつけてきた。実に、上品な顔に似つかわしくないことをする男である。

「こつちの方の契約までも、あんたが主人だとは一ツ言も言っていないからな」

虎蔵はたじろぐ。

「……なに、こつちの方って、」

上司は不敵な笑みを浮かべ、虎蔵の前へと進む。避ける間も無く前髪をむんずとつかみ、脅すように耳元で囁く。

「ここをそこらの商店街なんかと一緒にするなよ、仙石の若旦那。

……白菊横丁の君主が誰か言ってみろ」

虎蔵は、ふむ、と短い鼻息をもらした。「君主」の例えを使うま

でもなく、この界隈の事情は単純すぎた。しかし、そこを指摘すれば耳が千切れ、前髪の一部が禿げあがることをさけられそうになるので、虎蔵は素直に答える。

「銀次郎だろう、」

満足したように、鶴屋は虎蔵を解放した。質のいい髪は、さらりと額におちてくる。

「さっきの案件は、テツに書類におこさせるから、必ず読めよ。意味がわからないところは、『そういうものだ』と無理にでも飲み込んでおけ」

テツ、とは武智鉄子の愛称だ。トラ、が虎蔵の愛称であるように。暴君・鶴屋は豪快に襖を開け放ち、悠々と客間を出て行く。

《どろぼう猫》の実質的な頭は鶴屋だ。オーナーであるはずだった虎蔵は、祖父の権威すら継げずに鶴屋の小姓的な地位に甘んじている。いや、出世の気配は毛ほどもないので、小姓ではよく言いすぎだろう。

鶴屋と入れ違いに、漆の盆を持った鉄子が姿をあらわした。茶の用意も片付けも彼女の仕事だ。

「お疲れさま、」

虎蔵は、反射的に学生言葉を発してしまった。

武智鉄子はちらと彼を目にいった。感情の殺された瞳。煤竹^{すすたけ}色の髪を、額が見えるように半分に分けている。そこからのぞく白い肌は、録助よりも透明だ。

彼女は無言で、虎蔵のだらしない襟元を正した。

六、谷相高校 一

小島渚の通う高校は谷相高校、通称「丘向こう」だ。通称だけを聞けば、それと高校とを結びつけて考える人間は少ないだろう。この呼び名を使うのは、周囲の町に住む人間たちだ。特に、白菊町の者。白菊神社を頂点とし、扇状に広がった界隈が白菊町。町の頂点、白菊神社を擁する丘の向こう側にあるから、人々はその学校を「丘向こう」と呼ぶ。

丘の向こうは雨谷町あめやと言った。

今では誰も口にしないが、「雨」の字がつく土地は、忌みがある。あたりの土地の老人はかつて囁いたものだった。その忌みに根拠などない。ただ、雨は高いところから低いところへ流れるがゆえに、谷底ともいえる雨谷町は潤った。天然水が有名で、焼酎の名産地でもある。それをひがんでの流言だろう。とうに噂としての旨味も消えてしまった。なんやかんやと外野が喚こうとも、雨谷町は何の変哲も無い町だ。

話を谷相高校に戻そう。

これは戦後成立した高校で、もともとは女子高校であった。良妻賢母を世に出すことを第一とし、家政科に力を入れていた学校だ。いまだに、普通科と家政科は七対三の割合で存在し、男女比率は二対八で圧倒的に女子が多い。

創立当初の制服は非常に地味で、戦中をほうふつとさせた。その反動だろうか、制服デザイン変更の際には稀代のデザイナーを起用し、よく言えば爽やか・虎威に言わせれば暑苦しい、そんなデザインとなったのである。

濃紺の縁取りが鮮やかな白の上衣に、同じく濃紺のボトム。女子

のスラックス着用もいち早く認められた。豪華なエンブレムは英国風であり、ネクタイやリボンのストライプも当然ながら精密に織り込んだもの。ネクタイ・リボンの選択は個人の自由である。作りこまれすぎて着崩しようなのだが、その代わりに、組み合わせの自由さが売りだった。山間にありながら、白と青という海辺を思わせる配色は人々をぎよつとさせた。デザイナーいわく、「雨谷町の雨、あるいは潤いをイメージした」とのことだが。その制服は女子中学生たちに人気があった。憧れの制服　それを着たいがために受験する生徒も少なくないそうだ。

小島渚は、そんな学校の高校一年生だった。

彼女もまた、その制服が着たいがために勉強を重ねて合格を勝ち取った一人だ。おおよそ高校受験において、雰囲気や進学率・就職率などが選択理由として語られるが、女子に限っては、制服の可愛さが重要視されていることは言うまでもない。

彼女は雨谷町の生まれではない。雨谷町からはそれなりに離れた学区を出身とする。（谷相高校は私立高校なので、学区制度とは関係がないが。）今は、雨谷町に住む祖母の家から高校に通っている。彼女の祖母は旧式の日本家屋に住んでおり、一人で住むには大きすぎた。孫娘が同居人になって、ひどく喜んでのことだろう。

小島渚は毎朝六時には起きる。祖母はそれよりも早い五時には起きる。祖母は神棚への仕事を朝一番にする。次いで朝食の準備で立ち回り、その間、小島渚は屋敷全体をホウキで掃く朝の掃除をする。全てが整えばそろって朝食の席につく。彼女の登校時間は、だいたい八時だ。規則正しい生活なので、高校が始まってこの数ヶ月、彼女は一度も遅刻をしていない。

祖母の家からは自転車で登校することも可能だが、彼女は歩くことを好んでいる。来たばかりの雨谷町に自分をなじませる意味もこめて、景色を楽しみながら登校するのだ。

彼女が歩く理由が、つい先日ひとつ増えた。

それは、隣町、白菊町から走ってくる路線バスと鉢合わせるためであった。そのバスは、毎朝彼女の気になる人物を乗せてくる。バスから降りて歩く彼の姿をとらえ、じいと観察するのが日課となった。「谷相高校前」というバス停から学校の門までのたった数百メートルだが、彼女にとっては好奇心が最大に高まる道のりだ。自転車であつたら、一瞬で通り過ぎてしまふ距離だつたらう。彼女はその数百メートルのために、毎朝せつせと歩く。

彼女はその男子生徒と言葉を交わすことなど期待してはいなかった。なにしろ、ただ気になるだけなのだ。陳腐な言い方をすれば、「マイ・ブーム」か。どうして気になるか、それは彼がひとえに不思議な人間だからだろう。

彼はいつでも本を読んでいた。登校中、歩きながらも読んでいた。おそらくバスの中でも読んでいる。何の本を読んでいるのか確認するのも彼女の楽しみの一つだ。今まで確認したところでは、内田百々子？ときどき幸田露伴。さてはて、この観察を長期戦にするならば、もっとワケがわからないことになりそうであつた。

また、厳然とした決まりごとのように、彼はいつでも一人であつた。友達ができるようすがいつこうにない。彼のそばには、男だろつと女だろつと誰一人としていなかった。そのくせ、少しも淋しそつにはみえなかつた。人一倍明るい白茶の髪は人目を引き、柴犬のような目元は（彼女に言わせれば）凛々しく・麗しく、白い肌は彼を可憐に見せた。彼女にとつて彼は、怪異であるとともに神聖にもなつていた。

雨の降る日は特に好きだつた。この国の人間である以上、雨が降ればさすがに傘はさす。傘で手がふさがれば本を読むどころではない。本を読まないから、彼の視線はまっすぐだ。時々、顔の脇の髪を耳にかける。その仕草を目にするたび、髪を切れば良いのにとつう微妙な感想と、涼やかだなあとの感動をもつ。

雨といえば、傘。

彼のおかしさは、時代錯誤な和傘をさすことにある。それを目に

した多くの学生ははじめ、懐古趣味なのかそれとも時の旅人なのか判然としない奇妙な転入生をものめずらしそうに観察した。小島渚の場合、「はじめ」といわず「いまだに」だ。

教室のベランダで番傘を乾かすので、彼の所属クラスはすぐに知れた。彼女の教室の向かいがわだった。

しつこい五月雨が降る今日。ベランダにつるされた彼の番傘は、乾くことなく細い雨に濡らされていた。

「渚、」

窓の外を眺めてぼつとしていた彼女は、親友の一声で現実に戻ってくる。親友の尾上松子が向かいの席に後ろ向きに座り、呆れた顔で頬杖をついていた。長い髪をラフに流している友人は、自分よりも幾分か大人っぽく見えた。ラフなのは髪だけではない、手足のあつかいもラフであった。今も足を大きく広げて椅子にまたがっている。だらしない、と太ももを打ってやると、彼女は足をそろえて横向きに座りなおした。

彼女の顔の向きは、窓の外へ。

「なるほど。また、例の『大河内』を見てたつてわけ。あんたも飽きないわね、」

小島渚は鼻の前で手を組むと、まあねとうなずいた。

カタカナの「エ」の字型の校舎、坪庭をはさんで向かいがわに、小島渚の気になる人物「大河内録助」の教室が位置していた。

一年生は四階、二年生は三階、三年生は二階、というふうに、学年によって階が分けられている。階段やトイレはそこらにあるので普段歩いていて「大河内録助」に会うことは滅多にない。だからこそ、教室にいる時が最大の観察の好機なのだ。小島渚が幸いにして窓際の席でありつつ、大河内録助もこれまた（彼女にとって幸いなことに）窓際の席だ。彼はいつでも席で本を読んでいる。用を足しているかどうか怪しいほど、彼は動きを見せなかった。

今日は雨が降っている。窓を走る雨だれが、向こうがわの風景をゆがませてしまう。彼の姿は確認できず、ただ、彼の番傘が風雨にゆらされる。彼を観察するうえで、登校の時は雨が味方になって、教室に着いてからは鬱陶しいばかりだ。

「変わりもの好きのアンタが興味をそえられるのはわかるわよ。たしかに彼、ちよっと変わってるものね」

ちよつとどころでない、と渚は強気だ。浮いている、と言った方がいい。

「あつそう。まあ、五月なんていう時期に転校してきただなんて、なんか怪しいわよね」

大河内録助は、家庭の事情とやらで五月も半ば過ぎにこの高校の普通科へ転入してきた。

目立って明るい白茶の髪、その色は、転校早々全校生徒の注目を引いた。教師陣が何も言わないので生徒らも無言の内にその雰囲気を読み取り、地毛なのだと了解した。しかも、わけありなんだと憶測しつつ。それでも、一部の野次馬根性の強い生徒らは「ふうん」と彼のことを忘れるわけにはいかなかった。

彼はあるべき高校生の常識を裏切っている。あのトレードマークとも言える番傘がお洒落でないとするならば、生きるべき時代を間違えているとしか言いようがない。

「話しかけて友達になっちゃいなさいよ。そんなに恥らう奴だったっけ、渚って」

「恥らってるんじゃないよ。ただ、面白いから観察してるだけ。見た目だけじゃなくて、変な行動もしないかなあ、と思ってさ」

「番傘をさしてるってことを『変な行動』に勘定しなさいよ」

尾上松子の指摘したとおり、小島渚は引っ込み思案なわけでも内気なわけでもない。ただ、「大河内録助」つまり、仙石虎蔵の付き人の録助だ。の方が圧倒的に異常なので、彼女の平常を奪っているのだ。

「で、松子。私に何か用だった？」

そつだ、と松子は膝を打つ。彼女も世間の例にもれずミニスカ―トにして制服を着こなす。

もったいぶって胸元から一枚の紙を取り出した。勝訴！ のように紙を掲げる。

「『洋裁愛好会』、成立！」

小島渚は、声にならない歓喜の叫び声を上げて友人の手をとつた。彼女たちのささやかな喜びは、雨によって憂鬱気味な教室の一角を明るくする。

元女子高だからか、茶道部や華道部、たおやかな部活動の種類は豊富だ。そのくせ、(家政科があるせいか)家庭科系の倶楽部はなかった。

文化部の場合、部員を六名集めれば新設できるというのが生徒会執行部の掲げる規則だ。どうにかこうにか、六人の名を連ね、企画書にも似た書類をそろえて提出した結果、このように認められたのだ。「愛好会」というのも、家政科で専門的に技術を会得する学生へ「我々は愛好家程度ですよ」という目に見える白旗宣言だ。隠した志は高くあるとしても、表向きはひかえめであるべきだった。

「で、部室はどこ？」

松子の表情がさつと暗くなった。

「それがね。家庭科室は家政科のテリトリーだし、使えないでしょう？ おまけに、新設の倶楽部が他にもあつたらしくて、ここをあてがわれちゃつたのよ」

「部室、もらったの？ 部室なんてなくてもいいと思つたのに」

あるにこしたことはないが。ミシンやトルソー、作りかけの作品裁縫道具を保管できれば便利だろう。

「自分たちで掃除してから使うのが条件だ、とも言われた」

「当然。だって、私たちが使うんだもの」

いっぺんの曇りなく喜ぶ渚の前に、気まずそうに手悪さをする松子。やがて、わびるような上目使いで渚を見る。

「あのね。……第二宿直室……なのよ」

青天の霹靂。そんな表情で固まった小島渚だった。

第二宿直室。

機械警備が整うこの時代、宿直の制度はとうに姿を消した。谷相高校も民間の警備会社のセキュリティに任せている。そのせいだろう、宿直室が二つも必要だという事態はまずありえない。第一宿直室の方は、正しい用途ではないにしてもそこそこに使われてはいる。しかし、第二宿直室は、今やただの物置だった。いや、「ただの」ではないから困りものなのだ。

渚と松子は職員室にかけこんだ。

部活動を取り仕切る担当教諭は三船という。(生徒会役員に訴えるよりは、教師に向かうほうが近道だ。)

まずは、愛好会の設立を認めていただきありがとうございます、と頭を下げた。一年の学年主任でもあるその教師は、気をよくして微笑んだ。

「尾上、小島。愛好会会長に副会長だな？ 勉強もおろそかにするなよ」

二人はそろって「はい」と返事する。素直な様子に、あたりの教諭は微笑ましく見守る。二人としては、ただこの場を和ませにきたのではないのだが。

「あの、活動場所についてお聞きして良いですか。第二宿直室とありますか、」

その切り出しで、さっそく空気は凍る。

「掃除は自分たちで、とありますが、あの部屋には多くの荷物があつたと思います」

「要・不要の分類や、荷物の移動先など、指示していただけますか？」と松子がひきつぐ。

遠まわしな部室変更希望だった。ところが、三船は渋い顔でうなずくだけときた。

「あそこはな……。ま、確かに、物置なんだよな」

憎らしいことに、あははと笑う。

「その件で校長や理事に確認したら、私に任せるって言うもんで」「理事にまで確認したのか、と文句が言いづらくなる。そうこうするうちに、第二宿直室の鍵は彼女らの手に渡った。

「うーん。君らには大仕事になるとは思うけど、私の判断で君たちに全権委譲にしたんだよ。確か、たいしたものは置いてはないはずだから、基本的に捨てればいい。お値打ちものがあつたら、売り飛ばして部費にしてもいいぞ」

また、能天気になう。渚は思わず、傍らの湯飲みの茶を頭からかぶせてやりたい衝動にかられた。松子の方でもそれは同じらしい。スカートの裾をぎゅっと握りしめている。

知らんふりをしやがって……。

二人は結局「馬鹿馬鹿しい」核心にはふれずに、作り笑いで礼をのべて職員室を後にする。戸をしめたところで、二人は抱き合つて盛大なため息をつく。

七、谷相高校 二

<……谷相高校には学園七不思議が存在する。その一つが「第二宿直室の幽霊」だ。この話は全く根も葉もない噂ではなくて、うつつらと背景がある。今回は、開かずの第二宿直室について語り部が知る二、三の事柄をお話しよう。人外のものが闊歩するお話が嫌いなひとは、回避した方が賢明だ。秩序や理論、整合性を重んじる方も右に同じ。時は昭和 x 年にさかのぼる。この悲劇のヒロインは、可憐な乙女であった。……>

綴じ紐で結われた汚れが目立つレポート用紙を、静かにめくっていく。古い紙は黄ばみ、文字は消えかかっている。鉛筆で走り書きされた文章は、時を超えて小島渚に読まれている。若干崩れた落書き風の文字にしては、物語が出来上がっている。

彼女の手元のそのメモをのぞきこんでいた尾上松子は、強張った嘆息をもらす。

「怖い話は苦手なのよね、」

雨降りの中、なにゆえ屋外で怪談を読まねばならんのだという不満もそこには含まれている。朝から止むことのない雨は容赦なく紙面を濡らしていくが、誰もその点に気を払うものはいなかった。そこにいるのは、渚と松子と、二つ上の女生徒しかいなかった。彼女らを見下ろす濡れた緑の葉は、生物らしく潤いに満ちている。中庭の紅葉の木だ。一旦葉に溜まった雨粒はビニール傘に落ち、パツリとわびしい音をたてる。

一方、真剣な面持ちの小島渚は、松子が音をあげた地点のその先まで読み進める。

「どう、あの部屋のこと少しは分かった」

二人に問うのは、映画部部長の大和田真樹といった。二人を呼び出した張本人でもある。学校非公認の部活動である映画部に部室がないとはいえ、雨天なのに屋外に呼び出すとは考えものだ。

そんな文句を飲み込ませるような気の強さを、この上級生は明らかに有していた。男子生徒のようにも見えなくもない真つ黒のベリ・シヨートだが、それは逆に、女性性を強調すること気づかされる。小顔ではつきりとした目鼻立ちの彼女にはよく似合いだ。

渚は文字の列を指でなぞり、うなずいた。

「少女は第二宿直室に監禁され、殺害された。彼女の遺体ははまだ、見つかっていない。恨みは消えず、あの廊下に化けて出る。まとめると、こうですね」

だから何だ？ と続けたい戸惑いはおそらく見抜かれているだろう。それを承知のはずの大和田は、じらすように大きくうなずき、その通りだと笑う。

この“怖い話”は、大和田が製作する映画に用いられる原作だという。原作とよべるほど確かなものではなく、たんなる覚書と言ったほうが近かった。どのような経路を経たのかは知るよしもないが、何年前前の「谷相高校七不思議」のメモを見つけたのだと彼女は伝えた。それが渚と松子にどのような関係があるのか、それまた知るよしもなかった。あやふやな用件でも後輩を呼びつけることができるのは、上級生の特権だ。

「これを映画化するって、まずくないですか。ほんとうにあった事件なんじゃないですか」

「事件、ねえ」

彼女はおかしそうに口の端をあげる。そこには純粹な好奇心しかないようだ。

「この怪談だけどね、二つの話がごっちゃになった創作だよ。一つは北側廊下に現れるセーラー服の女の霊のウワサ。もう一方は、男子生徒失踪事件。それを、使用されない第二宿直室を舞台に混ぜちゃったってだけ」

「男子生徒？　じゃあ、共学化してからの話ですね。最近じゃないですか、」

「ただ単に退学しただけだったかもしれない。その時代、ヤンキー全盛期時代だったもの。そっちの世界に踏み出した人間がいてもおかしくない。所詮ウワサなんだから」

松子は身震いして、寒さをほぐすかのように二の腕をさすった。
「どっちにしる幽霊とか失踪とか。できれば、そういう話に関わりたくなかった」

大和田は松子の怯えきつた返答をまったく聞かずに、意気揚々と彼女の肩に手をかける。

「で。本題なんだけど。私からあなたたち洋裁愛好会へ、お願いがあるの。映画撮影のためにセーラー服と第二宿直室を用意してもらいたいってこと」

はあ、と松子と渚は呆けた返事をする。

「三船先生に聞いたら、第二宿直室の件はあなたたちが管理してるらしいじゃない。セーラー服の保管場所もそこらしい。だから、協力してくれる？」

ご自分で行かれては？　とは、とても言い出せそうにない。

「セーラー服なんかウチの学校にあるんですか」

渚は松子が着ている白のブレザーを横目に見て首をかしげた。衣替えの時期は、長袖半袖、ブレザーやセーター、夏服冬服が混在する。梅雨の時期は、依然上着を羽織る者も多かった。それでもセーラー服を着ている生徒は見たことがない。

「知らなかったの？　この学校、女子校時代の制服はセーラーだったのよ」

だから、ウワサの幽霊は昭和時代の人かもね。と彼女は楽しそうに笑った。慎みがない人だ。どうあっても、大和田と一緒に笑うことはできそうになかった。

大和田の申し出のために、ひとまずセーラー服を調達することに
した。掃除はそのあとだ。

勢いのない雨は午後五時をまわってもやむ気配がない。まだ明る
い灰色の空から絶えることなく落ちてくる水は、雨粒というよりは
霧のように正体なさげだ。

そのせいだろうか。

渚と松子が歩く北校舎一回の廊下は薄暗く、湿り気とともに寒さ
が沈殿している。完全な夏になるには、まだ時間がかかることを物
語っている。気楽に歩を進める渚の後ろで松子はふと足を止めた。

「このへんはあまり来ないから気にしてなかったけど、暗いし寒い
し、なんだか不気味ね」

「そう？ 気にしすぎでしょ」

さりげなさそうな声色で答えひらひらと右手を振るが、それは平
常心を装ってか。それとも、本心から気にしていないのか。

松子は肩をすくめた。いわくつきの部屋の戸をこつんと手の甲で
打つ。

「渚、どこまでいくのよ。第二宿直室はここでしょ」

「……そうだっけ？」

落ち着いたふりをしているのであって、渚の内面はひどく動揺し
ていると知れる。厭なものを見るようにしかめっ面をして振り返っ
た。彼女の手の中で跳ねる第二宿直室の鍵には、その部屋のものだ
と示す特徴が何一つ無い。ちやちな銀色のリングに通されているだ
けだ。

「ったく、三船のオッサンってばいい加減だなあ。ぜんぶ私たちに
任せるってさあ。……あの人、あれでも毎年進路指導係だったんだ
って」

「難しいところを受験するような人はウチなんかに来ないわよ」

「でも、なんで今年に限って一年の学年主任なのかなあ。……運が悪いよ」

「気にすることないわよ。普段は学年主任なんて関係ないもの」
そう言い終わると同時に、鍵は違和無く受け入れられた。

「でも、これだけは言いたいわ。やる気に満ちあふれてる私たちにこんなところを押し付けるくらいなら、『春画を愛でる会』にすり替わってる『浮世絵愛好会』の部室を寄越しなさい、って」

渚は、アハハと乾いた苦笑をこぼしてその話題を打ち切った。松子もわかつているはずだ。洋裁愛好会は、他の倶楽部を押しつけられるほど真つ白な成立事情ではない。実のところ正しくやる気に満ちているのは渚と松子だけで、あとの四名は適当に名を貸してくれただけなのだ。槍玉にあがった「浮世絵愛好会」は、今や現代の春画、つつみ隠さずに言うなればポルノグラフィを愛でるしか脳がないが、部員全員が一丸となつて参加している活況を思えば対抗は難しかった。その前に、成立させてもらったことは言うまでもなく、部室をあたえられた点に至っては、素直にありがたいと思わなければならぬに違いなかった。

ドアノブに手をかけた松子は、あら、と動きを止め髪を耳にかけ

る。
「ノブが回らないのだけど」

渚がかわつてノブを回したが、はたして動かなかった。とたんに、一気に馬鹿馬鹿しい気分がおこってくる。

「まさか開かずの第二宿直室の真相って、これなの。壊れて開きませんよってこと？ くだらないなあ。ビビッて損した」

「あ。やっぱりビビッてたのね」

む。とお互いに顔を見合わせた。それは朗らかな表情だった。穴には問題は無いようであった。古いドアはちよつとした工夫をしなければ開かないことも多い。押し開くように力を入れると、ギツと、砂と金属がするような音が響き、戸はわずかにずれこんだ。その隙間から、淀んだ空気がしみ出てくる。うめきそうになるのを、

我慢する。

「開いたよ。でも、厭に固いドアだなあ。松子、『せーの』で一緒に押して」

二人が肩をぶつけるように戸に当たると、拍子抜けするほどあっさり戸は動いた。勢いあまった二人は折り重なるようにして床へと倒れることになった。深く積もった埃が暗い室内でもうもうと煙をあげる。

「ひどい埃。きたない部屋……」

松子は咳き込みながら目をこすり、下敷きにした渚の体から退く物置と化していると言われるわりには、荷物は少なく、部屋は広く感じられた。段ボール箱が数箱あるだけだ。

ドアの開閉部分は廊下と同じ素材だが、そこから数センチ高いところから畳が敷かれている。天井には蛍光灯が一式。北側の窓に面して一畳ほどのフローリングと小さな流し台。東側の壁に沿うように、天井からカーテンがぶら下がる。窓ではなくて、壁を隠すように。

「何、この匂い、」

すえたにおいが漂い、空気の上よどみを感じられる。幾年も閉じ込められ腐った空気と、日差しすら入りこまなかったであろう暗闇の哀しみ。鼠の糞の鼻をつくにおい、虫の死骸、そして恐らく、長い長い時間、この空間に鎮座していた何ものかの重たい気配。

松子は蛍光灯のスイッチを幾度か動かしたが、光は点らなかつた。寿命がきて、そのまま放置されていたのだらう。彼女が歩くそのたびに、床はもうもうとけむをはきだした。

「早く起きなさいよ、渚。とんでもなく汚いわよ、ここの床」
わかつてるよ。

そう答えたかったのだが、声は出なかつた。代わりに、喉の奥で音が鳴った。

黄ばんだカーテンの奥。異質な存在感。

数千の虫が体を這いあがってくるような寒気に襲われる。

「ここかな、」

松子ははずかずかと踏み込みカーテンを開け放った。あつと叫ぶ間も、静止する間もなかった。当然だが、何者もそこにはいない。カーテンの奥は押入れを改造したクーロゼットだった。銀色のポールにぶらさがるのは、かつての谷相高校の制服だ。時代に取り残された亡霊のように、水兵服がずらり何着も並んでいる。不謹慎だとは分かっているが、それは、限りなく不吉な景色の暗喩に思えて仕様なかった。

「あつた。セーラー服って、これのことね」

松子は任務を全うし、満足そうに微笑んだが、渚は笑うことも声を出すことも、警告を発することもできなかった。警告、何を？ 何かだ。このカーテンを開けた瞬間、酷く恐ろしい責任を負ってしまったような気がしたのだ。何かおぞましいものを開放してしまったかのような、責任が。

廊下に戻っても、妙な気分は消えない。それどころか、ますます不安の気配は大きくなっていく。松子は何も感じないのだろうか。セーラー服を抱えて気軽に先を進む松子に、足が追いつかない。とうとう、彼女は立ち止まる。親友は気づかない、ふり返らない。角を曲がる。渚の視界から消える。北の廊下に残るのは、さあさあと疎ましい水の音だけとなる。

第二宿直室の並ぶこの廊下は、校内でも温度の変化が少ない場所であり常に涼しく暗い。ゆえに、理科室やコンピューター・ルームなど、温度の変化を嫌うものが連なっている。「E」の字型のつくりのせいか、向き合った校舎が遮光し陽の光が届かない。西日以外は。そう考え、異常なほどの暗さに今頃気がついた。霧雨を降らす雲がそれを手伝う。

雨の音を長く聞いていると、ささやき声に似た形をもちはじめ。ひそひそ、さわさわと、自分の背後で大勢の声がする。誰もいないはずの廊下で、大勢の瞳にさらされている。

ぺた、

背後で小さな音がして、人の気配を感じた。振り返っても廊下の奥は暗く、ほんとうに音がしたかどうか疑わしくなった。見据えてた視界に、白いものが現れた。

「……セーラー服？」

正しく焦点を絞り始めたとき、カチリと音がして廊下の電気が灯る。天井に目を向けると、ぱた・ぱた、と気だるげな瞬きを繰り返す蛍光灯がある。しばらく不安定に揺れたあと、じい、と確かに光を宿した。億劫そうな灯り方だ。それでも、蛍光灯の清潔で強い白は彼女に安心を与えた。

光が暴いた廊下の奥にいたのは、セーラー服の幽霊などではなかった。男子学生だった。白いブレザーが白い水兵服を思い起こさせて恐れを呼んだらしい。とはいえ、その登場は十分に亡霊じみてはいたが。

踵を返した彼女の背に、（意外にも）彼から声が飛ぶ。

「暗くなったら、明かりをつけないと」

「すみません。私一人だと思ったから、」

とつさに謝ったものの、彼が例の同級生であることに気づいて口が止まった。左手には閉じた番傘。美しい白茶の髪。その男、大河内録助は狼狽をあらわにして首を横に振った。

「ここには、あなた一人じゃあ、ありませんよ」

もちろん、僕とあなただけでもない。

「厄介なものを、出してしまいましたね」

八、宿借 甲

《どろぼう猫》のアルバイト、青沼影佐あおぬまかげさとの待ち合わせ時間から、とうに三十分は経過していた。待ち合わせ場所を間違えたのではないかと疑ったが、渡されたメモを確認すれば、やはりここで正しいのである。それに、迷いようがない。ここは虎蔵の母校でもある《国立雨谷大学》あまやも雨谷地区キャンパスの、見慣れた正門だ。

掃除の業務にしか現れないアルバイトの青沼影佐は、大学の後輩にあたると知れた。しかし、虎蔵は法学部・青沼は理学部であるので顔を会わせるはずもなかった。同じ地区内ではあるが、理系と文系とでは平生使用する区域も校舎も異なっている。

無駄に広い構内は相も変わらず閑散としている。そのなかを、弁当やコンビニ袋を手にして友人と連れたつて歩く学生たちが時折通る。もう昼時であるのだと気付く。ひよっとすると、青沼は約束を忘れて昼飯に出かけているのかもしれない。連絡を取ろうにも虎蔵は携帯電話を持っていない。

用が用なので、青沼には忘れられては困る。それなりの額の現金が入った茶封筒を青沼に渡すよう頼んだのは、鶴屋だ。何の金かは聞かなかつたが、恐らくはアルバイト代だろう。じつとりとした封筒の厚みは不穏だった。一学生が大層な儲けようである。それをいうなら、それだけの金を払って何食わぬ顔をしている鶴屋こそが常軌を逸しているのか。

わざわざ現金を持ち歩かずとも振り込めば済むだろうと反論したのだが、青沼は口座を持っていないというのだから仕様がなない。「私の間抜けぶりはあんたも承知しているだろう」と脅しをかければ、眉間に皺を寄せ、以降文句を受け付けなかった。人のことは言えないうが、どこかずれている連中ばかりである。

苛々が募りつつ腕時計を検めていると、くいと服のすそをつかむ者がある。

「あの。仙石虎蔵さんですか」

声をかけてきたのは、もちろん青沼ではなかった。青沼であれば、鬱陶しいほどの大音量で挨拶を発し、背後から飛び掛ってくるぐらいの勢いを見せる。

そこに現れたのは、くしゃくしゃと野暮ったい黒髪の、薄汚れた白衣を着た娘であった。上品さの無い装いに対して、顔だけは恐ろしいほど高貴に整っている。まさか女学生が現れるとは思わなかった虎蔵は、目を丸くした。記憶が確かならば、「青沼影佐」は男である。軽薄そうな装いで、足りない口調のいまどきの学生だ。ゆえに、研究室に詰めているようなナリの女が、青沼の友人だとも思えない。

逆に聞き返すと、黙っている。白衣のポケットに手を差込み煙草を抜き出した。虎蔵にも突き出してきたが、嗜まない虎蔵は首を横に振った。彼女は意外そうに肩をすくめる。そのまま、ことわりも無く吸い始める。ゆっくりと上下する胸は、少年のように凹凸が無い。くたびれたTシャツは明らかに男物で、開いた襟首からは貧相な乳房が覗きそうだ。恥らってしかるべき箇所には全く頓着しない様子には驚かされる。

「青沼の代理です。それ、私のです」

煙草を口に含みなおし、骨ばった人差し指で虎蔵の懐をさす。彼女の目は、裡に仕舞った「それ」、茶封筒を見抜いているのか。妙なほどに事情通だ。とはいえ、二つ返事で現金を明け渡すわけにはいかないのだろうな、と鈍い頭で考える。代理が介在するなどは聞いていない。確認が取れないのであれば、断るのが正しいのだろう。虎蔵は彼女の申し出を断った。

しかし、彼女は食い下がる。

「確認するたって、その本人が来られないんじゃないじゃ確認のしようがない」

口調が急に馴れ馴れしくなった。今度は、反対側のポケットからくしゃくしゃの紙を取り出した。

「ほら。青沼からの伝言だよ。これで信用してくれる。あんだ、青沼の字くらい知ってるんでしょ」

乱雑に丸まったままのそれを虎蔵のポケットに強引に入れてくる。そのままの手で、スーツの懐から例の茶封筒を引っ張り出してしまふ。スリと遜色ない早業だ。

「ちょっと待ってくれ。それは困る。上司から青沼に渡すよう頼まれてる、君じゃなくて。返してくれないか。大事なものなんだ、私の信用に関わる」

既に背を向けている女学生を小走りで追うのは妙に情けない。スーツ姿の男が女学生を追いかけるという構図は、どうにも不穏な絵に見えるのも確かだ。

「……しつこいな。昼休みはあんだにとっても貴重でしょう。さっさと帰ったら」

振り向いた彼女の口からはき出された煙草の煙を、まともに浴びてしまった。突然立ち止まれたので、避ける機会を失っていた。思わず咳き込み、目からは涙が出てくる。

「そういうわけにはいかないんだって言ってるだろう。直接青沼に渡しに行くから案内してくれ。君も同じ物理科なんだろう」

虎蔵がそのように申し出ると、女の口はぽかんと開いた。ポロリとタバコが口から落ちる。それを拾おうともしない態度は、さすがにぞつとしない。当たり前のように、靴底で火を消した。雨谷大学の構内は禁煙だったはずだが。

「あんだ、知らないの。青沼はこの地区にはいないよ」
「は？」

女はちつと短い舌打ちを放つ。

「だから、ここ雨谷町のキャンパスじゃなくて、天丘町のキャンパスにいるの」

虎蔵にとつても、そういえば、である。雨谷大学のカリキュラムとして、一年次と二年次前半は天丘町の学舎に通う。青沼はまだ二年次であり、雨谷町のキャンパスには滅多に顔を出さないのだろう。

天丘町はここから車で片道一時間はかかる。往復計二時間もかけている場合ではない。午後の仕事に遅れれば、鶴屋がなんと言うか。すでに時間はおしているというのに。

虎蔵はにわかには混乱し始めた。すると、彼女は気の毒そうな表情になつて虎蔵の肩を叩いた。

「まあ、青沼はこの地区の学生寮に入つてるから、どのみち夜には帰ってくる。私を信用できないってなら、夜尋ねて確かめれば」

彼女は口頭で青沼の住所を伝えた。虎蔵もその寮は知っていたので、部屋番号を覚えるだけでよかった。

彼女が去つてから、どうにも奇妙な話だと思いはじめた。この場合、鶴屋と女学生、どちらの立場を尊重すべきであつたか。答えは明白。圧倒的に鶴屋のはずなのだが、虎蔵はあまりにもこの上司を疎みすぎている。第一、彼の話と実際に起きたこととの間では、かみ合わない点が多すぎた。女が鶴屋以上に事情に通じていたのも、謎であつた。

往々にして、鶴屋は説明が少ない。行き当たりばつたりなのか、面白主義なのか。世間でよくあるように、「推して知るべし」なのか。

それとも、単なる嫌がらせか。さもありません。鶴屋を厭な男だとは思っていたが、かくも意味が無く幼稚な嫌がらせをするとは。昼休みを無駄にした憤りもあいまつて、空の腹に響いた。

怒りが鎮まらぬままに、虎蔵は白菊横町へ戻ってきた。

白菊通りの坂の途中で、見慣れた人影が降りてくる。事務員の武智鉄子だ。彼女が昼時に外に出てくるのは珍しい。自分がなかなか戻らないために、代わりに使いに出されるのだろうか。虎蔵は彼女に駆け寄つた。

「武智さん。どうしたんですか」

無視されるかとも思ったが、彼女は足を止めて顔を向けた。

「午後は無い。店長が入用で外出だ。トラも帰るといい」

それだけを機械的に告げると、すたすたと坂を下りていく。彼女も彼女で、余計な情報を与えない人種だ。

それにしても、あんまりである。半ドンであるならば、元から連絡しておけばいいものを。そうであったなら、あの妙な女に任せずに自分が青沼に届けられた。いや、これも嫌がらせの一環なのか。

あの女といえは、女から青沼のメモを預かっていたはずだ。スーツのポケットに確かに入っていた。

それを確認すると、鶴屋の嫌がらせ疑惑は一瞬で消えた。あの金は確かに青沼に届けるべきものであったようだ。疑うべきは女のほうだった。自分のうかつさと間抜けさを呪うしかない。

その紙片は、青沼の走り書きなどではなかった。

「……騙された」

学生食堂の伝票だった。

どうやらとんでもない失態をやらかしたらしい。どうにかして鶴屋と連絡を取らねばならないが、鶴屋も鶴屋で連絡手段を持っているはずがない。その前に、連絡先を聞いていない。

《どろぼう猫》に戻ってみたが、当然店舗には鍵がかかっていた。離れも確認したが、誰もいなかった。

途方に暮れて、縁側に腰を下ろした。あるいは寮で青沼を待つのもいいだろう。億に一つだが、何事もなく金を受け取っている可能性もある。

「愚かな犬のように待っていても、鶴兄つるにいは今日は戻りませんよ」

顔を上げれば、前触れなく屋守が虎蔵の前に立っていた。何度見ても彼女の不気味さには慣れない。久々の初夏らしい暑さにも、汗一つかかない白い肌。蛇のような薄い笑みを貼り付けた口元。赤の

死装束。突然現れて突然消える。この手の存在は無視に限るが、幼子の姿のものを乱雑に扱うのも気が引ける。

「そう言うお前も締め出されてるんじゃないか。お前は銀次郎と一緒に庭で寝るのか」

気が引けるのだが、半ば八つ当たりのような言い方になった。ところが、彼女は心底可笑しそうにくすくすと笑っただけだ。

「銀次郎様は、白菊神社におはします」

では、お前は。

「敷地すべてがわつちの寢床ですよ」

「いくら夏に近いといって、外で寝れば体を壊す。鶴屋が戻らないなら、今晚は仙石の屋敷に来るといい」

「ご冗談を。まだ犬の餌にはなりたかないです」

笑みが大きくなった。口が裂けそうだ。

「馬鹿を言うな。誰がお前みたいな薄気味悪い童に手を出すというんだ」

「旦那様こそ、何をおっしゃいますやら。今の『犬』ってえのは旦那様のことを指したのじゃあ、ありません」

「比喻じゃないのか。でも、屋敷に犬はいない」

「いるじゃあ、ありませんか」

屋守は断定的な口調で言い切った。

「仙石家は、昔っからあの犬を飼ってるじゃあ、ありませんか。銀次郎様でさえ恐れる犬を。怖いから、銀次郎様はあの犬を白菊横丁に入れないのですよ。怖いから、銀次郎様は仙石の当主を飼うのですよ」

童はわけのわからないことをいう。それが彼女の専売特許なのだろう。虎蔵は彼女の言葉を半分以上聞き流している。

とはいえ、犬など仙石家にいただろうか。生まれてこの方、動物を飼った覚えなどない。屋守は何かと混同して話してるのではなからうか。

「……しかし、どちらでも構わないのです、犬がいようがいまいが

わっちは横丁からは出られませんからねエ」

童は、帯の解れに鋭い爪を引つ掛けて遊んでいる。そのせいで、魚のわたのように無様に糸が飛び出ている。かつては潤むような墨色であったと思えるその色彩も、今やドブネズミに近い。童が気の毒に思えてくる。汚らしい装いのままで、卑屈に支配された姿が。

同情が顔に表れていたのか。屋守は、虎蔵の顔を見て皮肉の笑みを再び浮かべた。

「旦那様は優しさが過ぎますねえ……。君主たるもの、慕われるよりも恐れられていたほうがはるかに安全である、と言いますでしょう」

一旦言葉を切り、意味が判りますか。ともつたいぶる。

「恐ろしい相手よりも、慕わしい相手のほうが、危害を加えやすい、ということですよ。ヒトも気配も、邪な存在であるのに変わりはありませんからねエ、」

虎蔵は深くため息をつく。君主の理論など、赤衣の童は説教をたれる相手を間違えている。少なくとも、ここ《どろぼう猫》では見習い以外の何者でもない。その何が悪いのだろうか、最近はその考える。そう思うにつけ、苦い表情になる。確かに仙石の家の君主ではあるのだろうが、その外ではこのざまだ。これでどうして誇り高くいられよう。

ところで、いつまでもこの童と無駄話をしている場合でない。あの女を捕まえて金を回収しなければならぬ。伝票でごまかしたくらいだ、諮りがすぐに見破られることくらい見越しているだろう。とするならば、一刻も早く追わねばならない。手を拱いている間に女が金を消費してしまうかもしれない。

「お前の話面白いんだがな、火急の用事がある。青沼の金をすっかり失くしてしまったんだ」

縁側から腰を上げ、屋守の脇をすり抜ける。彼女は着物を口元に当て、厭に嬉しそうな声で「オヤア」と白々しく感嘆する。

「それはそれは、一大事。『人間というものは、殺された父親のこ

とは忘れても、奪われた財産のほうはいつまでも忘れない』、です
よ」

踏み出した足を引つ込めた。

棒立ちになる虎蔵に、童は容赦なく追い討ちをかける。例の癩に
障る笑い声が無防備な背中に刺さる。喉に詰まる小骨にも似た、不
快感。

「どうです。頭にきましたか。……ほら、ほらア。言わんこつちや
ない。優しいお心は、下僕わっちにふさわしからぬ態度を許すのですよ。
おわかりになりませんか。慈悲とは怠惰ですよ、旦那様」

虎蔵は駆け出していた。これ以上、屋守と言葉を交わしてたく
などなかった。

白菊神社を囲む森は、参道を駆け下りる彼の背後で大きくざわめ
いた。

九、宿借 乙

青沼の住む学生寮は、《雨谷第一男子寮》といった。

いやに陰気な名であり、実際、建物はしみつたれている。「第一」と冠するだけに、雨谷大学の有する寮の中でも最も古い。雨の浸入を容易に許すであろう、脆弱な要塞だ。木の表札に記されたその名も、雨露にされされてすっかり劣化している。しかし、近々改装が決まっているらしいので、このノスタルジックな外装も見られなくなることだろう。

庭にはバーベキューの設備が揃い、家庭菜園の真似事の跡地がある。こうした賑々しさを目に入れば、若者の住処だと納得するものである。

「兄ちゃん、何の用だ」

管理人は年老いた男で、鼻をつく臭気を発する作業服を着ていた。虎蔵が訪問者名簿に名を記しているのを、濁った瞳で見ている。深いしわと口が見分けがつかない。なんとなく決まり悪くて、桃色電話に視線を流していたりした。ずんぐりむっくりとした形状と、ぼやけた色が妙に愛らしい。

「……ああ、それ、壊れてんだ」

なら何故置いたままにしておくのか。

「うちの店のアルバイトの子に用があります。六号室の青沼影佐、あおぬまかげさ管理人は古ぼけた大時計を見上げる。時刻はまだ午後二時を過ぎたほどだ。振り子は気だるげに左右に揺れて時を刻んでいる。それを覆うガラス窓には、「白菊工務店寄贈」と読める金色の文字がある。が、半分は剥げ落ちている。

彼の背後　管理人室の内部に差し込む光は、ガラス窓のほんのりとした汚れを透過して黄色い。室内の埃がキラリ・キラリと反射

して、鼻の奥がむず痒くなる。

「……まだ帰ってこねえよ。青沼君は、暇さえありやそこかしこで働いてツからな、」

虎蔵は、へえと驚きを口にした。（実際に見たわけではないが）あれだけの大金を《どろぼう猫》で稼いでおきながら、まだ働くというのか。

男は目を妖しく光らせた。

「いまどきの若いのにしちや、根性がある。あんたも雇用主の端くれなら、今から目つけておくといい。いい働き手になるぞ」

「いや、私は、」

ただのつかいッ走りだと否定しようとするが、管理人は全く聞かない。身を乗り出して、耳を貸せと言っている。

「実を言つとな、青沼くんの部屋は“出る”んだよ……」

何が、と聞くほど間抜けではない。

「まア、俺ア見たことねえけどな。そりやさすがに噂にしても、妙なことが起こるのには違いねえ。気にしてねえのは当人ぐらいのもんでさ。根性がある上に、肝っ玉も据わつてるときた」

彼の口からは甘つたるい缶珈琲の匂いがした。午後の気だるさと屋敷の埃つばさがあいまって、厭に覇気を無くす。

「……奴を買いかぶりすぎですよ」

それからたつぷり数分間は、管理人の世間話に付き合わされた。

どうにか切り抜けて青沼の部屋へ向かう時には、腕時計の針は二時半を指していた。

玄関から一步奥に踏み出すと、さすが男の館、独特の匂いが木にしみ込んでいる。階段は色を失ってほぼ黒であり、足を乗せれば板はギイギイと鳴く。角という角には細かなゴミが溜まり、掃除の適当さが見て取れる。踊り場の窓ガラスには、拭き掃除をした際の筋が白く残っている。掃除も入寮者たち自身で済ませているのだろう。《雨谷第一男子寮》は、容量も他の寮に比べ少ないと聞いていた。

二階建ての木造で、部屋も計六つ。それでも一部屋には二人程度が収められているのだろう。それらは中央の階段を挟んで左右、すべて南側に並んでいる。どの部屋も平等に同じ大きさだ。一階には食堂や風呂場、炊事場などがある。

青沼の使用している六号室は東端にあった。名札を見る限り、青沼一人で使用しているようだ。南東の角部屋を独り占めできるとはありがたいことに決まっている。しかし、姿は隠しているが、気配はある。

青沼が帰ってきたことを考え、とりあえず伝言を戸の隙間に挟み込むことにした。紙片を差し込むや否や、それはひよいと内側に吸い込まれた。まるで裡に居る誰かが、引っこ抜くように。

「青沼、居るのか」

ドアに鍵はかかっていたいなかった。一瞬は躊躇したが、戸を開け放っていた。

ところが、またしても顔を合わせたのは青沼ではなかった。

好機なのか、例の金を奪い取った女学生だ。驚きのあまり口を開けたままにしている虎蔵であったが、女は一切の罪悪感も見せずに頭などを掻いている。しまいには「さつさと入れ」と導き入れ、家人さながらの振る舞いもして見せた。

「やっぱり来たんだね、あんた」

女は妙に楽しそうだ。騙したことへの意識はあるのか。

青沼の部屋は意外にも清潔だった。畳の隙間には塵も無い。廊下との差異が大きすぎてうるたえる。布団と学習机、本棚など、必要最低限の物しかない。普段のちゃらちゃらした格好からは予想もつかない。

「青沼ならまだだよ。今日の午後はラーメン屋でバイトだ」

部屋に見とれている場合ではなかった。

「お前、どうしてここにいるんだ」

「ここは私の家だから」

「……いつから」

「一ヶ月前」

話がかみ合っていない。女はふてぶてしい態度で胡坐を掻き、仁王立ちの虎蔵を見上げている。

「お前は自分でここが青沼の部屋だといっただろう。第一、ここは男子寮だ」

「じゃあ、言い方を変えよう。青沼が、私の家だ」

余計にややこしくなった。恋人の類、そういう意味だろうか。そう考えておきながら、否、と打ち消す。この女が青沼の好みとは思えない。青沼は、顔という細部に拘らず、体という全体を見る男だ。

とはいえ、青沼との関係を考慮している場合ではない。金を取り戻すだけだ。余計なことを考えるから、いつも仕事をしくじるのだ。「百歩譲って、お前がここに進入しているのはいい。兎にも角にも、さつき渡した茶封筒を返してくれないか」

「どうして」

「あれは、青沼のものだから。中を見ていないからはっきりしたこととは言えないけど、たぶん、給料なんだ」

そう切り出したとたん、女の瞳は猛々しい獅子のものへと変わる。気圧され、前言撤回したくなるほどの。盗人猛々しいとはこのことか。

「あれは私のものだよ」

「おまえは伝票で私を騙そうとした。信用できない人間に渡せるわけがないだろう」

「約束を反故にする気、」

青沼とこの女との間にどんな約束があるうとも、関係がない。むしろ、そのもつれに巻き込まれたことが呪わしい。

「たとえあなたが青沼に渡しても、青沼は私に渡すよ。だってこれは、青沼が私にくれるはずの駄賃だから」

「おまえ、ヒモか」

それなら尚更渡しておくわけにもいくまい。二進も三進もいかず、二人はにらみ合う。お互いに眉間が疲れてくると、女は含みのある

笑みを浮かべた。

「妥協案が、あるんだけど」

急にたおやかな表情になって見上げてくる。厭な予感がする。

「……金を返せば、代わりにあんたが私を養ってくれる。私はあんなでも構わない」

視線はまっすぐこちらに向けられたままだ。冗談ではないらしい。

「青沼は、おまえが居なくなって寂しがらないのか」

「あいつは、私のことを見えないふりするんだ」

切ないことを、なんでもないような顔で言っただけ。ますます二人の関係がわからなくなる。とにかく、彼らにさしたる絆は無いと見えた。

しかし、である。いけしゃあしゃあと言うことか。と、ため息を禁じえない。

「……それで解決するなら、それでいい。仙石の屋敷は、部屋も蓄えも腐るほどあるんだ、」

女はにやり、と厭な笑みを浮かべ立ち上がったかと思うと、突然白衣を脱ぎ捨てた。そこに金を仕舞っていたのだろう、地に着くときに重みのある音がした。なにごとか、と思うまもなくTシャツも下も脱ぎ、十秒と経たぬうちに一糸纏わぬ姿と成り果ててしまった。衝撃のあまり、虎蔵が腰を抜かしそうになったのも無理からぬ話だ。

「なんのつもりだ。住まわせるとは言ったが、他意はない、本当だ」
これではまるで、体で対価を払えと受け取られてしまったかのようだ。そんな雄雄しい要求を掲げられるほどの剛毅が、虎蔵にあるはずもない。

「どんくさいな。早く脱いで」

なるべく女を目に入れないように顔を背けたのに、彼女は虎蔵の襟首をつかんでゆすり始めた。はじめに思ったとおり、彼女は裸に羞恥心がない。

「なに恥らってるんだよ。ばかだね。あんたの古服を寄越せって言ってるの」

「え？ ……あ、わかった」

虎蔵はスーツの上着を脱いで羽織らせたが、彼女は一度袖を通したあと、不満げに脱ぎ捨てた。

「これじゃ駄目。新しすぎて馴染めない。家になら古服があるでしょう。あんたの家に連れて行ってよ」

「どういう理屈だ、と突っかかるのはやめた。どうやらまでもでない。」

「そのままの格好では外に出られないに決まってるだろう」

「ばかだねえ、誰も見ないよ。と笑う。じりじりと背を向けた虎蔵の耳元で女はささやく。

「……ねえ、気付いてた。私と話せる人間って、そんなに居ないんだ」

女は、虎蔵の肩に手を回した。負ぶって運べということらしい。

仰天だ。女には体重というものが存在しなかった。

ようやく理解できた。青沼は、この女に憑かれていたのだ。

十、宿借 丙

深夜十二時を回った頃、虎蔵は再び《雨谷第一男子寮》あまやに向かう。女曰く、今晚の青沼の帰宅時間は十二時とのこと。

禄助ろくすけは同行すると申し出たが、正体不明の女を屋敷に一人残しておくほうが危険に思えた。留守を命じれば、彼は素直に従った。

白菊町の夜は相変わらずだ。白菊横丁を抱えるくらいなので、あけつぴろげな歓楽街も存在している。ゲームセンターには学生たちが集い、如何わしい不夜城では、老若男女が一時の愛を語らう。

「白菊町は誘惑の街たれ」。

それらの経済活動の一端を担っていたのは仙石家だ。街がこのように形成される年月を、仙石の当主は見守ってきたのだと祖父は言った。「拳句、出来上がったのがこのざまか」とはさすがにまだ言えていない。いつかは言う。

緩やかな高みを車で数分も下れば、その先は学問関係の建物が並ぶ雨谷町だ。《国立雨谷大学》に《私立谷相高校》たにあい。焼酎を製造している工場も近い。酒の名産地でありつつ若者の集う町である雨谷町と、歓楽街を抱く白菊町とは、水魚の交わりである。

……というのは観光戦略的な建前で、その裏、両者が両者とも相方に舌を出しているということは言を俟たない。せつかく酒が売れても、利の多くは白菊町の酒場に落ちる。なにより、学生たちがよからぬ事をたくらむ場を与えているという理由で、あちらは白菊町を疎んじている。他方、白菊町も白菊町で無粋な妬みがある。学問と名酒を誇りに、まっとうらしさを貫く“丘向こう”が気に食わないのだ。

この件は、雨谷町との関係だけでないところが悩ましい。接している町はまだあるのだ。白菊町は地区の癌だと罵られもする。

このような多方面との調整を長きにわたって担っていたのが祖父

の竜蔵だという。自明のことだが、虎蔵は、祖父の後継者としてふさわしい器ではない。政治的な期待を丁重に退け、仙石の繁栄（ひいては白菊の繁栄）を彼の代で終息させようと目論んでいるからだ。彼が出しゃばらずとも、祖父の後釜に座りたがる物好きな人間は数多くいた。そもそも、若輩が座るにはその席は豪勢すぎた。彼は座りもせずに快く席を明け渡し、今の場所であくせくしている。

面倒な代償と負担を背負いつつ取り返した金を、後生大事に抱えて夜の街を行くわけだ。

夜の警備は手薄とみえて、管理人室の中の人間は眠りこけていた。一応、訪問録に名を記して青沼の部屋に向かった。深夜だというのに、一階にはまだ人が居た。廊下や談話室で話している学生もいる。部外者の、しかも和服姿の虎蔵を不審がる者は居なかった。むしろ、丁寧に挨拶をされてしまう。

青沼の部屋だけは、とても静かだった。働き疲れて既に寝てしまっているのかもしれない。控えめに戸を打ったが返事が無い。そのわりに、鍵は開きっぱなしだ。無用心この上ない。

そつと音を立てぬよう開けると、揺れる蠟燭の火が目に入る。

「トラか、」

奥まった暗がりから、聞き慣れた厭な声が発された。案の定、蘇芳の瞳が猫のように光る。

僅かに開いた窓から闇夜の風が忍び込み、茜色の炎を揺らす。すると、その男の姿も、幻のように浮き上がったたり消えたりする。

「……ああ、青沼の部屋は本当に怪奇部屋だな。わけのわからない奴ばかり出てくる、」

虎蔵は呻きながら頭を振った。

例のごとく、夜闇に溶けるような墨色の着物。鶴屋が窓を背にして座っていたのだ。

「仙石の旦那あ！ こんばんわッス」

戸口に背を向け、鶴屋と向き合っているのが、この部屋の本当の主である青沼影佐だ。伽羅色（と表すと上品そうだが、そうでもない）の髪が蝋燭の火を受け、橙の色味を強めている。連絡もなしに現れたというのに、青沼も鶴屋も、戸惑いなく虎蔵を招き入れた。ということとは、どうやら自分は予定調和的に動いたらしい。

「鶴屋さんの言ったとおり、マジで旦那も来ましたね」

青沼ははしゃいだ様子で顔をほころばせている。どことなく油の匂いがするのは、ラーメン屋帰りだからか。店の名が印刷されたTシャツに、ジーンズを履いている。体つきがいいので、それだけの格好でも貧相にならない男だった。青沼の能天気も気に障るが、問題は鶴屋だ。

「おい、鶴屋。説明しろ」

一回転して、虎蔵を面倒に巻き込んだ張本人は彼に相違ない。いきり立って詰め寄ると、鶴屋は笑い声になった。彼の珍しい上機嫌が、虎蔵の勢いを削ぐ。

「その封筒は渡るべくして女の手に渡し、戻るべくして俺の手に戻るんだよ」

包括的で、それでいて何も説明していない。

昼間のこと　金を騙し取られたことや、女を引き受けたこと。

ぜんぶ承知なのか。すべての行き違いは鶴屋の足りない説明から生じたものだというのに、この飄々とした答え。だからだと汗が出てくる。

「……どこからどこまでがあんたの脚本なんだ」

寒気のあるほど端麗な鶴屋には、備わるべくして、伶俐さが備わっている。明朗でない彼の腹の中を思えば、敵うはずもないと情けなくなる。

「大層なことじゃないだろう。お前が阿呆で愚直であることと、女という存在が持つ計算高さを信じてただけだ」

「ごまかすなよ。はじめっから、全部私になすりつけようとしたんだらう」

「おまえに、じゃない」

彼さえ正しく事情を話してくれていれば、すべてまともに進んだのではないかとも思ったが、考え違いだ。計画を詳細に聞かされてそれを自分が承知するはずもない。「気配」を引き受けるなど真っ平ごめんだった。

「もし、私が女に金を渡したまま、取り返さなかったらどうするつもりだったんだ」

「心配ない。トラ、封筒を開けてみる」

封筒の中身は札束ではなく、護符の束だった。時間稼ぎの細工だ、と鶴屋は言う。彼は着物の懐から、同じような封筒を抜き出して青沼に手渡した。

「これが本物だ。うまく騙せたみたいだな」

「ばかな。それがバレたらどうするつもりだったんだ」

「それも心配ない」

鶴屋は虎蔵をじつと見ている。この目が厭なのだ。何もかも見越していた、と言わんばかりの瞳が。虎蔵は知らぬ振りをした。そこまで自惚れたつもりはない。屋守の言うような、慈悲という怠惰につけ込まれただけだ。

「純情ぶるなよな。少しは自覚があるくせに」

鶴屋は、脱ぎ捨てられた白衣やTシャツを床から拾った。あの女が着ていた衣類だ。もともとは青沼が着古した衣類だろう。“抜け殻”が落ちていることの意味を承知して、鶴屋は含みのある笑みを浮かべた。疚しいことなどしていないのに、まるで同一の恋人を共有しているかのように気まぎれになった。虎蔵のうるたえる様子を面白がり、ばかだなと揶揄する。しかめっ面が多いものと思っていたが、この男はよく笑った。ひよっとすれば、単なる面白主義者なのだ。

虎蔵が答えに窮しているのを、青沼はきよとんとした顔で見ている。

「え、今の何すか。……ひよっとして、俺だけ蚊帳の外的な？ 当

事者なのに」

「化けものの事情なんかにかかすらうよ、特にお前は。消えたんだからそれでいいだろう。一匹一匹気にしてたら身が持たない、」

「はあ。と納得しかねる顔で頷く。青沼はいつだって鶴屋にいいようにあしらわれている。青沼は、虎蔵よりも遥かに世間に通じている男なのだが。」

それとは別に、鶴屋の言うことは尤もだと虎蔵は思った。「一匹一匹」の事情を追求する場合にはないほど多くの気配が、まだここに居座っているからだ。

「鶴屋さん、あいつがどんな化けものなのか知ってたんすか」

「おまえ自身にも心当りがあるだろう。惚れた男の家に勝手に転がり込むやつ、」

「アハハ。押しかけ女房ツすか。でも彼女は家事はしねーし、慰めもしてくれないツスよ。器量もよくないし。ありやただの寄生虫とどうか寄居虫というか……、」

「だとよ、トラ」

鶴屋は不意に虎蔵に話をふる。

「何の話だ」

「あの女がろくでもない化けものだって話ですよ」

「ん。ああ、その通りだ」

青沼を肯定すると、鶴屋は意外そうに背を伸ばして壁に寄りかかった。

「なんだ、俺はてつきり、虎蔵もあの女を気に入ったのかと思った」

「ばかを言うなよ」

「……ならいいけどな。今頃、あの女は犬の餌だろうから」

今度は真面目な顔で、屋守みたいなことを言う。

「あ。そういうことっすか」

青沼はぼん、と手を打った。鶴屋の言葉の意味がわからないのは、虎蔵だけらしい。

鶴屋は着物の裾を払うと、ゆっくりと立ち上がる。

「さて、始めるか。トラ、邪魔だから帰れ」

虎蔵が首をかしげると、いつもの不機嫌面になる。（彼の主観による）面白くない場面で「何」を問われるのが嫌いなのだろう。汲み取って欲しいわけでもないことも明白だ。ただ従えと。彼と、彼に命令される者との間には超えがたき境界がある。

「どついうわけか、影佐は気配に愛されるんだよ。しかも、たちの悪いのばかり」

「鶴屋さんの手で定期的に掃除してもらわないと、俺、“こいつら”に連れていかれます」

「俺よりも師匠に任せた方が確実だけどな」

「それ言ったらおしまいッスよ。《どろぼう猫》の存在意義がなくなる。それに俺はマリさんがニガテって言ってるじゃないスか。妖婦ですよ、あの人は」

虎蔵は、あんな露もやがどうやってお前を連れて行くんだと一笑に付したかったが、青沼の表情を見てやめた。口元は会話のために笑っているが、瞳はただならぬ怒気をはらんでいる。この若者は、化けもの一般に対して並々ならぬ感情があると見える。

「……誰も彼もが、お前みたいにふてぶてしい人間だと思っなよ」

訳知り顔の鶴屋は厭味を放ち、野良猫を追い出すかのように虎蔵を排した。

なるほど。「六号室が出る」のではなくて、「青沼が居るから出る」、が真実だ。

翌朝、目を覚ますといつものように禄助が障子を開けにくる。

「女はちゃんと寝たか？」

虎蔵の起き抜けの質問に、彼は怪訝な顔をする。遣り戸に掛けている手が止まる。畳に落ちた禄助の影もびたりと静まった。

「ああ、あの方ですか。彼女は、旦那様をご不在のときにお帰りになされました」

青沼のところか、と聞くと、いいえと首を振る。

「黄泉ですよ」

廁ですよ、と答えるのと変わらない気軽さで告げる。

最後に、虎蔵の枕元に置かれた切子硝子の水差しから、つがいの器に水を注ぐ。それを虎蔵に手渡しながら、禄助はつと外を眺めた。

「……今日も雨ですか、」

出勤前に屋敷中を見て回ったが、あの女の姿はなかった。

その代わり、彼女に与えたはずの古い浴衣が、仏間にぼつねんと落ちていた。それこそが、彼女がこの仮宿を辞したという証。わざわざ長持から引っ張り出した着物だった。

僅かに落胆する。思っていたよりも、虎蔵は女の「仮泊」を快く思っていたらしい。（本人に確かめてはいないが）彼女が仙石の屋敷に移った理由が理由だけに、なんとなく腑におちない。

そこでふと、鶴屋の言葉が頭を過ぎる。雨がおもての岩を打つ音は、獣が肉を咀嚼する音か。

「……犬の餌、」

食べかすは、どこにも落ちていない。

対話篇、あるいは夢一夜

真面目な夢を見た。

ガラン、ガランと本坪鈴が鳴っている。しつこく何時までも鳴っている。どれほど切実な願いがあるというのか。多く鈴を鳴らして呼ぼうとも、神がその重い腰をあげるとは限らぬ。五月蠅いと耳をふさぐやも知れぬ。居留守は神の専売特許だ。霊験のあらわれるところなど、今までどこに在ったというのか。

ちりん、ちりんと小銭が賽銭箱に放り込まれる。この人間は、参拝の正式に従う気などさらさらないようだった。ただ、必死なのだ。このようなことにすがるうとも、何の意味もないことだと思わないのか。

ぶつり、ぶつりとうわごとのような祈りが繰り返される。いや、祈りと言うべきではないのかもしれない。モット、おぞましい何かだ。痙攣するように、女の口の端はピクリピクリと動いた。その厭な隙間から唾があふれて泡になっている。

ただ、やかましかった。穏やかな眠りを邪魔されたのが、疎ましかった。ハッキリと目が覚めてしまった。着物の埃を払いながら私は立ちあがった。

女が去ったあと、境内には血がおちている。道標のように、血がおちている。鈴緒にも、べったりと血がはりついている。まだ乾いていない。女は狂気にあつた。……いや、あれは女だったか？ 男であったような気もした。それとも、童だったか。一寸前のことだというのに、そこに居た者の姿かたちをすっかり忘れ去ってしまった。

鳥居の足元に立ち、参道を見おろす。石階段の脇は森で、視界を深い緑が多くをしめる。参道に連なる店の屋根の連なりはよく見

えた。陽の光をすいこむ、沈うつな色の瓦屋根。

突然、ごうと風が吹く。思わず目元を腕で護った。そのとき、妙な既視感を覚えた。このあと自分が、どのほうを向いて、何を喋るのがすうと知れた。

先ず、後ろをふり向く。狛犬ならぬ、招き猫を目にするはずだ。続いて、上方からの「にゃあ」という猫の声。鳥居の上。一体全体、どうしてそのような場所に登ることができたのか。頭上の太陽の眩しさに顔をしかめながら、ほとんど光に透けている銀色の猫を認めた。野良猫闊歩する界限で、彼女は際立って・神聖に美しい。

「降りられなくなったのか」

彼女はぶるぶる震えながら、にゃあにゃあと喚いている。心細からう。何とかしてやりたい。

「待っている、今、梯子をもつてこよう」

石階段をおり、参道を南へとくだる。

若い娘とすれちがった。彼女は脛を伏せがちにして私にお辞儀をした。参拝客かと思えば、そうでもない。女は道沿いの茶店の中に消えた。

それからしばらく下った。藍の暖簾が出た店の戸をあけた。かんからかんと竹の管の音が響く。土間に下駄を脱ぎ捨ててあがる。

「まあ、坊ちゃんったら、はしたない」

顔をあげると、上がり框に盛りの女がいた。上品な柳色の長着に千歳緑の帯をしめている。私の下品を叱る表情だ。済まなかったと履物を直す。女はにこりと微笑んだ。

「あら、珍しく素直でいらっしやいますね」

「梯子を出してくれ」

女は目を丸くし、そのあとで眉根をよせた。

「猫が、鳥居の上で震えている」

「……千歳さんと呼んできましょう」

彼女はしまいまで聞いてから、慌てて走り去る。小またで走るの

で、ぱたぱたとせわしない足音が響く。また直ぐ外へ出るだろう、私は再び履物に足を通した。

一分と待たず、二つのあわただしい足音が戻ってくる。先ほどの女に従って、詰襟の青年が姿を現した。きりとして上品な顔立ちだ。「どうしました、坊ちゃん」

物腰も目つきも、穏やかな人間だった。烏のように黒い髪のかせに、虹彩の色だけが厭に薄い。色素の偏りが奇妙であった。

「猫が鳥居に登って降りられないと喚いている。梯子をつかって、おろしてやりたい」

男は困惑の息をつく。

「またですか、あのきかん坊は」

靴箱からブーツを引っ張り出すと、式台に腰をおろして足をそこへつつこむ。その姿勢のまま、こちらを見あげた。

「私の我儘で、何時も迷惑をおかけして済みません」

詰襟の青年は走り出す。そのあとを追うと、彼はふりかえってにこりと微笑んむ。「心強いです」と頭をなでる。馬鹿なことを言う。私が彼についていったところで、何の助力になろう。

梯子を抱えれば、参道の北端の神社へと急ぐ。えっちらおっちらと坂を駆けあがり、石階段を登る。神社の鳥居が見えてきた。石階段の両脇に広がる森は、風でさわさわと鳴る。あいも変わらず、猫はいた。そのさまを見て、男は「よかった」などと呟く。ころりと落ちていなくてよかった、ということであろう。

「銀次郎、大人しくしている」

粗末な鳥居に梯子をかけながら、男は静かに言った。救援隊の到着に気付いた猫は、恐ろしさのなかでも僅かに甘えた声色で鳴きはじめた。

梯子をのぼり終えても、鳥居の頂上にはまだ届かない。ここで猫が動けるはずがない。男は、そろそろと手を伸ばした。何ごとか囁いている。するとどうだろう、猫はしゃんと立ったではないか。水のおえを歩くような静けさで鳥居の端、男の手元までいく。

さあ来いと手を伸ばす男に、なんと飛びかかった。

「あッ、」

猫は青年の腕のなかにおさまってしまった。男は、幸せそうに猫の薄鼠の毛に頬を摺り寄せる。猫はぐにやぐにやともがいている。

私は、阿呆のように見とれて口をあけていた。

また、ごうと風が吹いた。

「親ばかねえ」

という声がした。

反応するよりも早く、薬品臭い手がうなじをなでる。それは氷のように冷たく、私の体をびくりと痙攣させた。傍に現れたのは、外国の女だった。素手でふれられたような気がしたのだが、その細指は白手袋に包まれていた。実際的な効果を期待できないほど、笠の小さなパラソルを手に行している。ランプシェードほどの大きさしかない。

「猫や犬は、時として実子よりも愛しいんだわ」

女はどことなく、哀愁漂わせて呟いた。黙っていると、「ねえ、そう思わない」と尋ねてくる。「左様で」と返事をしてやると、その横顔はニツコリ、嬉しそうに頷いた。

「哀しいことよ」

女は白昼の神社には相応しくない。レースやフリルで装飾された小さなボンネットが、結われた髪にのる。ウエスト・ラインの高いドレスは女の色気を閉じ込め、また、シトシトと溢れさせてもいる。前触れなく、彼女はすつと腕を地面と平行になる位置まで持ち上げた。指はぴんと張って、何物かを指し示す。

「あすこ。《幻想写真館》が、あたしの店よ」

道理で手が薬品臭いわけだと納得する。

「この国じゃ、^{フォトグラフ}寫真ってね、マコトをウツスと書くでしょう。幻をウツスことだって、できるのに」

つまらなそうに言うのと、くるくると手元のパラソルを回転させた。

傘の縁のフリンジがゆれる。私には、それが空飛ぶ道具だと思われ
てしかたない。きつと、彼女は異国から飛んできたのだ。

彼女がくるくる回すパラソルを見ているうちに段々眠たくなつて
きて、ついに瞼をとじてしまった。

何が「哀しいこと」なのか、ついぞ聞きそびれた。

《どろぼう猫》には、たった一部屋だが洋間がある。それは二階の
書斎であつた。鶴の描かれた襖をひらくと、もう一つ、板チョコレ
ートに似た開き戸があらわれる。これら二つの境を越えねば、書斎
にはいれない。

今晚、《どろぼう猫》の書斎には、銀次郎と鶴屋と、女がいる。
実質的に、喋るのは鶴屋と女だけなので、二人だけといつていい。
女は銀次郎を腕にだいて、赤子をあやすように体をゆらしている。
聖母のような仕草には相応しからぬ、豪勢な体つきの女だつた。肥
えているのではない。婀娜っぽく、肉感的であつた。

「今度の仙石のは、可愛いのねえ」

「つまり、未熟つてことだよ」

鶴屋はいちいちいらぬ補足をする。

「厭だ、意地悪な言い方ね」

彼女は責めるように、ソファに座る鶴屋をにらむ。銀次郎を正面
の事務机におろし、自分は鶴屋の真向かいに腰をおろした。極端な
丈のリトル・ブラック・ドレスからは、妖艶な足が伸びている。円
熟した彼女には、適切でない短さかもしれない。幼く見えてしまふ。
それをさしひいても、その漂う色香はおさえられない。長く豊か

なカールをもった髪は、無造作に胸までたれている。その何束かは、
豊満な胸の谷間にはいりこんでいる。目や口は潤い、何かを語りた
そうな曲線を湛えている。

「……あのねエ、鶴屋。私も、挨拶回りなんて面倒だと思っわ」

「ならいいだろ。どうせこの横丁は不和なんだ」

「でもね、しきたりでしょう？ 仙石の代変わりを知らせるくらい
はしなさいな。挨拶をしないでいて悪く思われるのは、あんたでも
銀次郎でもなくて、仙石なのよ。駄目よ、投げやりなのは。私の母
国では、しきたりと伝統を重んじるの」

鶴屋はぴくりと神経質に瞼をうごかした。

「違っだろ。あんたの故郷は、そういう人間中心スタイル的な価値観を振り
かざす連中に蹂躪された土地だろう。一緒くたにして語るなよ」

「そんな昔のことなんて、知らないわ。語ってもいない」

鶴屋はスーツの懐からシガレット・ケースをとりだしては、一本
を彼女に差し出した。彼女は人差し指と中指で受け取ると、含み笑
いをする。おもむろにマッチの火をつける。手で覆いを作りながら
彼女にさしだす。彼女は腰をたおして煙草に火をつける。女を黙ら
せるのにとつた、苦肉の策だった。

「飲み屋連中はともかく、せめて《弁天》には挨拶しなさいな。青
猫ちゃんの手前、」

「青猫って呼ぶと、影佐は怒るぞ。ただでさえ、あいつはあんたが
嫌いなんだ」

女の言葉をさえぎって、鶴屋は口をはさんだ。女は顔をしかめて
身をそらせる。

「まあ、酷い。……『青猫』って、朔太郎からとつたのよ。素敵な
愛称じゃない」

「あいつにとつては、喜ばしくないんだよ」

「ア。話を変えないで頂戴。とにかく、《弁天》の旦那には挨拶な
さい」

鶴屋は、しばらく黙って手元を見ていた。

「……まったく、師匠は口うるさくてかなわない」

煙を吐き出したマリは、赤々とした唇を曲げた。

「独り立ちしたら、師匠と呼ぶのはおやめ。マダム・マリとおよびなさいな」

「独り立ちした弟子のそばにいつまでも留まっているのはどうかと思っぜ、マリ」

「あら。でも、私は言ったわよ？」

煙草の灰を、硝子の皿にたんたんと落とす。ゴミのはずの灰は、砂金のように光りだした。

「あなたの恋の決着がつくまでは、ずっと見守るわ、ってね」

鶴屋はもはやマリを見てなどいなかった。出窓に移り、毛並みを整えている銀次郎を見ているだけであった。その表情には、まれにみる優しさがあった。

月の光を受けると、銀次郎は青色に照った。ロシアン・ブルー。

十一、 弁天の妖女 上

そのような夜の打ち合わせがあったことなど、虎蔵はつゆ知らず。鶴屋に促されるまま古い宿屋へ向かった。宿の名は《弁天》といい、向かいの対になるそれは《弁天小僧》といった。情事のための宿だ。宿は《どろぼう猫》からしばらく南に下ったところにある。さすがは大人の遊び場だけあって、表から館までは数メートルの秘密めいた導入路が続く。うっそうと茂った木々が、敷地を進む個人の判別を難しくしている。こっそり忍び込む宿にはおあつらえ向きだ。飛び石のように置かれた氷を模した灯だけが、辛うじて足元を照らす。

つと首をあげれば、一反木綿がたなびくような湯気が、星の輝く闇にとけていくのが見えた。湯に入りたくなくなった。

先に、玄関と思しきぼんのりとした明かりが見えた。桃と橙の間の淡い色だ。

「おや、誰かいるぞ」

十ほどの少女が戸の前に立っていた。暗くともわかる、華やかな模様の着物を着ている。結った髪には、舞妓のような花簪をつけている。色の店で少女に出くわすとは、意外な気がした。店主の娘だろうか。少女は二人を認めると、ほっと安堵の息をついた。

「ああ、よかった。鶴屋さまも来てくださった」

彼女はぱたたと小またで駆け寄り、ぱつさりと潔く頭を下げお辞儀とした。

「ようこそおいでくださいました、仙石の旦那さま。それから、お久しぶりです、鶴屋の兄さま」

鶴屋は彼女が頭を上げるのにあわせ、腰を落として少女の前髪を撫でる。似つかわしくもない、柔らかな笑みを浮かべつつ。

「わざわざ出てくれたのか。悪かったな。元気にしてるか」

と聞いた直後に、いや、そうでもないな、と言いつつ鼻をく

んくんと鳴らして、しかめっ面をする。

「なんだ、調子が悪いのか」

虎蔵は思わず、は？ と口にした。別段変わった調子に見えなかつたからだ。

「左様です。お時間が許せば、鶴屋の兄さま、お父ちゃんの話聞いてやってくださいまし」

「俺が？ それじゃ、掃除が必要なのか」

少女は不安げな顔でひとつ頷いた。遠慮がちに、鶴屋のスーツの袖口をきゅうと握りしめた。

「厄介な姐さんが、来てしまったのです」

いつものことじゃないか。と鶴屋は怪訝な顔をした。それから彼はしゃがんだままこちらを振り返った。

「おい、トラ。ぼうつと突っ立ってないで、おまえも彼女に挨拶をしる。何しにここに来たと思ってるんだ。……挨拶回りだろ」

この宿を訪れた目的は、先ほど彼が言ったように「挨拶回り」だ。仙石の代替わりがあるたびに、（本来なら）横丁を構成する店に挨拶をしなければならぬという。ただし今回は鶴屋が「全店にする必要なし」と判断したため、限られた範囲に留めるとか。

二人は少女の先導に従って、裏口から店の中に入った。とたん、白檀の香りがただよってくる。この手の店に相応しからぬ香りだった。

この宿《弁天》、それから向かいの《弁天小僧》の店主は、伊藤大吉といった。貫禄のある老人だった。腰も芯も一切のゆがみなく肉体の衰えを感じさせぬ威圧感がある。表向きでない宿を続けてきたわりに、濁りなき眼をもった仙人にも見える。後ろめたい事情など微塵も感じさせないからわけがわからない。顔つきからみて、若い頃は相当の色男だったと思える。

虎蔵が正面に回ってよろしく伝えると、彼は豪快に笑った。

「ついにあの偏屈ジジイは隠居したのか。わしに挨拶の一つもなく、

「なんとも答えない虎蔵に、伊藤は茶目っ気のある口元で「竜蔵のことだ」と言う。

「ええ。祖父は今、ドライブです」

「そんなわけあるか。行つたとして、そりゃ旅行だ」

また、彼は大口をあけて笑い出した。老人の笑いの意味がさつぱりわからなくて、うろたえるしかない。背後に控える鶴屋を振り返れば、冷めた瞳で肩をすくめるだけだ。適当にあわせておけ、と。

その後しばらくは、若かりし頃の伊藤と竜蔵の冒険譚と火遊びの話が続き、懐古的な武勇伝に花が咲いた。厳格な祖父しか知らない虎蔵としては、なんとも気まずい話題だった。祖父の初恋話まで聞かされてしまったのは、彼も自分と同じように若さを享受した、一人の人間だったのだと認めるしかあるまい。

話の種はまだまだ尽きないのだろうが、ひとたび伊藤がくしゃみをするると広間の雰囲気は一気に様変わりした。そのせいだろうか、後方に控えていたはずの鶴屋が、ざりざりと前に進んで虎蔵に並んだ。

「さて、挨拶はこの辺でいい。わしのための挨拶でないからな、」

「ああ。もう外で済ませたんだ。だから、あんたが俺をここまで呼びつけたわけを聞きたいね」

若輩の鶴屋は、大先輩にも臆することがない。

「さつそくだが、実は、掃除して欲しい部屋がある」

「忌みごとか」

鶴屋の表情がさつと暗くなる。

「いいや。屋守から聞いたろう。この《弁天》に、おかしな女が出ているようだ」

「ばか言え。この店はおかしな女しかいないじゃないか」

「そうではない。屋守を欺くほどの女だ、何かある」

核心を突かない彼らの会話に飽き飽きし始めた虎蔵は、集中力が切れてきた。ぼんやりと、座敷をぐるりと見渡した。

彼らが座するは座敷も大広間で、大宴会にふさわしい。しかし今は、天井は暗いままで行灯の光のみだ。薄暗く、鶴屋、伊藤、虎蔵そして障子のそばの少女を照らしている。欄間の透かし彫りは、低いところからの弱い光受けて、化け物のようにうごめいているように見える。

《弁天》は不特定多数が出入りする宿であるのに、仙石の屋敷のように清潔だ。必要な掃除は、どうやら、一般的なほうの掃除ではないらしい。

「トラ、構わないな」

鶴屋は険しい顔で振り向いた。全く聞いていなかったたので、突然の名指しに大いに驚く。鶴屋は明らかな舌打ちをする。

「また話を聞いてなかったのか。……いい、旦那、好きにしてくれ」腕を組んで胡坐をかいたまま、伊藤に顎で示す。虎蔵を軽んじているのがありありと知れる。伊藤は心なしか、気の毒そうにしている。間髪いれずに、噛み付くように鶴屋が唸った。

「好きにしるといってるんだ。こいつは気配には耐性があるし、何より話を聞いてないほうが悪い」

悪い、などと言われると、さすがに無関心ではいられない。

「ああ、旦那。『好きにしる』、でなくて『こつちから好きに使わせてもらう』と言っておく。あんたは依頼をただだけだ。いいな？」この男はあれの孫だ。無下にはできまい。信心や主義に関わるなら止した方がいい」

伊藤は承服しかねている。すつきりしない様子でしわがくぼんでいる。

「この男に信心や主義があるなら、もうすこし生きた目をしていただろうな」

自身の散々な言われようにも、虎蔵はきよとんとしているのだから仕様がな。鶴屋も毒づき損だ。

「だいいち、おまえが嫌がったところで身代わりはないからな。普段役に立たないんだから、言われたとおりにしろ」

「なんだ、その前時代的な言い草は」

「悪いな、俺は前時代的な人間なんだよ。俺だけじゃない、伊藤のジジイも竜蔵のジジイもな」

おまえだけが、今の生き物だ。そういわれている気がした。

混乱している虎蔵をよそに、鶴屋は立ち上がり、ついぞといわんばかりに適当な所作で虎蔵の羽織をつかんで立たせる。額がぶつかると顔が近づけて、彼は低い声で囁く。

「いいか。せめてこれだけは頭ン中に入れる。『姐さんに可愛がつてきてもらえ』」

意味をとり損ねた。

「ころあいを見計らって、迎えに行く」

彼は乱暴に虎蔵を障子の方へ押しやった。どういふことなのか、もう一度改めて聞こうと思った頃には彼はさっさと携帯電話を抜き出し耳に当てていた。携帯電話？ と首を傾げたとき、着物が突っ張る。

「お湯にご案内します、仙石の旦那」

虎蔵の羽織の裾を、少女が握っていた。

わけもわからず少女に従って座敷を去る虎蔵を横目に、鶴屋は電話の保留音を聞いていた。それほど待たずして、相手は出た。通話の相手は、青沼影佐だ。受話器越しに電子的な音楽が響く。白菊の歓楽街にくり出してしていると知れる。上ずった男の歓声や、若い女の甲高い声もが飛び込んでくる。学生らしさを謳歌している彼を現場に引っ張り出すのは気が引けた。武智鉄子はただの事務職員なので、掃除の業務には呼び出さない。

「出られるか」

「モチロン」即答だ。

「場所は、《弁天》だ」

鶴屋が一瞬言い渋ったように、影佐もしばし沈黙した。ふっと、僅かだがもれるような笑い声が届き、それはすぐにあけっぴろげで

軽薄そうな笑い声に変わる。わかりました、と彼は言う。

「急がなくていい。どうせ白菊町にいるんだろつ。《どろぼう猫》に寄って、しつかり準備をしてこい」

そうは言っても、影佐は急いで出てくるのだろつ。影佐はいつだって一生懸命だ。

もともと期待はしていなかったが、罔にしか使えていない虎蔵を、この時ばかりは口惜しく思った。影佐はなるべく早く《どろぼう猫》を出なければならぬ。影佐は社会のただなかでまっとうに生きてしかるべき人間だからだ。ため息をつき、電話を切った。伊藤大吉がこちらを見ている。

「影佐だよ」

携帯電話を軽く振って示して見せると、伊藤は重々しく頷く。

「まだ、おまえのところにいるのか。こんな横丁などからは、とうに出て行ったものかと思っていた。あのバカ息子……なんのためにわしが拾ったと思つとるんだ」

「それは俺自身、常に反省していることだ。言ってくれるなよな」
伊藤らしくない口調だった。末尾に向かって声が段々小さくなっていく。彼はいつでも堂々と、気持ちのいい喋りをするものだ。

「それ以上に、あいつは期待してんだろ。俺のもとにいれば、いや、横丁にいれば帰る機会に出くわせると」

「そんな軟弱者に育てた覚えはない」

憤然としてみせる伊藤は、どこにでもいる父親のようであった。

鶴屋はそれに対し、老いたなと思いつつも、心安くも思った。

「でも忘れるなよ。あいつを十六まで育てたのはあんたでも俺でもない。唯一無二の、あいつ自身の親御さんだ」

他方、白菊町も「表通りの」歓楽街、多目的娯楽施設。

上司との通話を終えた青沼影佐は、カラオケ用の部屋の一つに身を滑り込ませる。途端に、耳に痛いほどの歌声が突き刺さる。その歌声に耳を傾けている者は少数だ。聞いている彼らも、退屈そうにジューズのストローに齧りついている。好き勝手に歌ったり、あるいは密談したり、身を寄せ合ったり。そんな姿が、ソファでできたような部屋の中で展開している。もう一部屋のカラオケ・ルームには酒につぶれた者や睡魔に負けた者などが放り込まれ、死体置き場のような有様だ。同じ一つの団体の構成員なのに、一貫性が無い。

人工的でやかましい演奏に僅かに眉を顰めながら、彼は歌詞の浮かぶ大画面の前を中腰で横切った。放り出していた自分の鞆に手を伸ばす。が、その手を横からつかむものがある。

「浦和、」

影佐と同級の友人だった。照明が落とされているので、カラオケのテレビ画面の青白い光だけが彼の顔の陰影をかたちづくる。ぱくぱくと口を動かしているが、耳が慣れていないのだろう、聞こえなかった。「帰るのか」、そう聞いているのだろうと察しをつけて、コクコクと二回頷く。すると彼は、片手で4を示す。

「よん？ 数字の？」

曖昧な笑顔で、同じサインを作り出す。ところが、浦和は手を引つ叩き、影佐の耳朶をつかみ自分の口元へと引き寄せた。

「四千円だよ、アホ」

今度は良く聞こえた。しぶしぶ財布から五千円札を枚引き抜き、浦和に差し出した。それでも彼は不満顔だ。

「新入生のお守りは上級生の役目だろ。先に帰るなんてありえねえ。抜け駆けすんなよ」

新入生、それを聞いて彼の不機嫌に納得した。新入生は「お客様」なのだ。梅雨も近づくこの季節、新入生たちはようやく上級生たちとも懇意になりつつある。サークルに引き込むために新入生を主賓として、「最後の一押し」といわんばかりにこの時期は夜遊びが続

く。その裏で、はしゃぎがちな新入生をお守りする上級生は苦勞をする。

「夜も遅いんだ、男は女を家まで送ってやる決まりだろ。ここをどこだと思ってるんだよ」

浦和は心配そうに、女同士で固まっている新入生を振り返った。

彼女らは仲間うちのお喋りで浦和の視線に気付いていない。

「白菊町、だけど」

「わかってんなら責任感持てよ。このまえもこのへんで銃の事件やら強姦やらがあつたらう」

浦和は影佐を睨みあげた。お釣りが渡されるのを待っていたら話が長くなりそうなので、千円は諦めた。

「ほんとうにごめん。でも、バイトなんだ。急なだけど」
それを言われては、浦和は何もいえなくなる。

青沼影佐という自分の友人の、この不定期なアルバイトについて浦和は無知である。(ラーメン屋などは知っているが。)彼の口からバイトという単語が出ると、授業中だろうが遊びの最中だろうが構わずふらつと出かける。そのようなとき、普段はへらへらとしている影佐が有無を言わせぬ使命感を帯びている。

一本の電話のあとに急いで飛び出すので、青沼は年上の女の情夫しよこでもやっているんだろうと決め込んでいた。何しろ影佐は、男同士腹を割って話す場でも自分の事情は一切話さない。たかだか一九の男がこの方面で寡黙であることに、そういう裏事情を想像する。カラオケ・ルームを出て行く彼の背が、いよいよ妖しく見えてしまう。伽羅色の髪やいまどきの服装は彼を軽々しく見せたが、それもどうだか分からない。

彼が去って、音楽も鳴り止んだ頃。新入生の女子は残念そうに顔を寄せ合った。

「青沼さん、帰っちゃったね」

それを見るにつけて猛烈なやるせなさを感じる浦和だった。どうしてあいつばかり……と。

十二、 弁天の妖女 中

スクーターにまたがった青沼影佐は、白菊横丁の坂をくだつていく。通り沿いの店からは、細く明かりがもれている。暖かだとはとうてい思えない。不気味であつた。橙の灯のもとにいる誰かが、悪意をもってささめくようにも思われた。言葉は足や手を、顔のない頭を生やして彼を追いかけてくる。そんな化物どもから逃げるように、彼はやや前かがみになつてハンドルにしがみつく。

坂も半ばまでおりたころ、連なる店がわずかに途切れる。侵食する森のような木々は、ここに集う欲望と金の気配を覆い隠している。それでも知る者は知っている。秘密めいた導入路の先には、手っ取り早く欲望の成就にありつける不夜城がそびえていることを。

彼は《弁天》の敷地に足を踏みいれながら、ふと《弁天小僧》をふり返つた。

「さっきの千円の釣りは、惜しかったな」

まったくの無関係に聞こえることを一人ごち、ヘルメットを乱暴にぬいだ。

勝手知つたる《弁天》の裏口にまわり挨拶を投げかけたが、返事がない。裏口は洗濯場が近い。ゴウン、ゴウンと機械がまわる音はしていても、人がいない。

影佐は大声で「屋守」を呼んだ。勤め先の屋守は気味が悪くて好きになれなかつたが、《弁天》の屋守はことのほか愛らしくて気に入っていた。（不思議なことに、どの店の屋守も共通して十ほどの女の童である。）はたして屋守も出てこない。三度目の正直と口をあけたところ、洗濯物を抱えた下女があらわれたので、彼は空を噛む。

女は疑り深い目を向けてくる。影佐は彼女に見覚えがなかつた。最近雇われたのだらうと察しをつける。

「屋守は、いないの」

「接客中です」何か用か、とそっけない口調で女は聞く。裏口から卒然現れた男には警戒して当たり前だろう。おまけに影佐は若い、年上の女にはなめられもする。

「じゃあ、オヤジは」

「アラ、」下女は目を丸くして口元に手を当てた。「お客様がお見えで、今は『天上の間』にいらっしやいます」

お客様、とは鶴屋たちのことだろう。板を打ち合わせただけの簡素な下駄箱には、鶴屋の革靴と虎蔵の草履があった。

「旦那様のお子さんでしたか。失礼致しました」下女は洗濯物を避けるようにして首を曲げ、謝意を示す。

「気にしないで。俺はもう巣立つたし」

微笑んだ影佐は「愛想が無いよ」と他意なく女をからかい、履物を履物いれに放りこんだ。

何を優先すべきか迷うらしく、女はまだ彼のかたわらにたたずむ。

「ご案内いたしましょうか」

「屋敷のことは知ってる。自分の仕事を続けなよ」

苦笑して答えると、女は恐縮して退く。

広間の手前では、一呼吸おき膝を折りたたんだ。目前の大座敷「天井の間」からは二人の男の話し声がもれ聞こえてくる。後輩の前では先輩風をふかせてはみたが、さすがにこの先は縮こまるしかない。この店の掃除をする以上、どのみち避けられることではなかったが、伊藤と顔を合わせるの気が重かった。ゆえに、彼はある覚悟をもって敷地に踏みいれていた。その覚悟も、彼の顔を情けなくはしても、凛々しくはしない。

恐る恐る襖を押し開いた。儂げな行灯の光が線から面になり、影佐の存在を明らかにする。前をむいたままの目は、座敷の奥、金無地の四曲一隻の前で胡坐をかく老人を真っ先にとらえた。とたん、

蛇に睨まれた蛙のように縮みあがる。それほど翁がむけてきた眼光は鋭かった。

屋敷が軋むほどの大声で伊藤は怒鳴った。

「この大馬鹿者が」

地の底から響くような低音と、正面からまともに衝突した。

「いつまで横丁にいる気だ」

影佐は負けじと、すんません、と声を張る。勢い込んで敷居を越えたが、それはでたらめな所作だった。しかし、作法よりも影佐の言葉遣いに老人は激昂した。

「なんだ、その軟派な発音は」

「おいおい。親子喧嘩はあとにしてくれよ」

伊藤と影佐の久方ぶりの再会の儀を中断させたのは、鶴屋だ。深いため息をついて、両者を交互に見る。

「まず此方が先だろう。『弁天の妖女』について、詳しいことを聞かせてもらおうか」

他方、虎蔵には天下分け目の大合戦が起ころうとしていた。彼は泡立つ風呂にゆでられつつ、同じようにぶくぶくと口からあぶくを発している。水面で割れた水泡から、水滴が飛び散る。隙あらば目に忍び込まんとするそれを、鬱陶しく思いながら呟く。

「なんなのだ、この状況は。上司の命令で男女の契りを結ぶなど、」
天井から暢気そうにぶらさがっている白熱灯と、それを覆う藍硝子の傘を見上げる。傘の縁からは戦時中のように遮光布が垂れさがり、ともすれば拡散する光を一極に集中させて落としている。落ちたあたりはでこぼこ浮き立つ水面で好き勝手に反射し、思った以上の明るさを見せた。湯気は天井に逃げ、その隙間から夜闇にとけているようだった。屋敷に入るまえに見たあの湯気は、あすこから出ていたのだろうか。

「《弁天》は宿屋ですからね。みなさん、お食事もお湯も楽しんでいかれます。今晚は事情が事情ですから、仙石の旦那様には醍醐味を味わってはいただけませんが」

屋守は脱衣場でこそごとと動きながら宿の説明をする。硝子と湯気のせい、うつつではない場所から聞こえてくるような声だった。「《弁天》には六つの部屋がございます。恵比寿の間、大黒天の間、毘沙門天の間、福祿寿の間、寿老人の間、布袋の間。紅一点の弁天さまが六つの男神へんちを抱いているのです。向かいの《弁天小僧》は、弁天に扮した男が男神を抱えます。ようするに、“女形”おやまが男を擁するということです。困われるのは、いつだって“女”のほうですからね」

合っているようでの外れなような気がして、彼は首をかしげた。こんな界限の店の話に頭をひねらせているとは、虎蔵も白菊横丁に馴染んできた証拠である。ここを彩る多くは、気まぐれの産物ていどに違いない。

「でも、お客様は女を選べません。女が男を選ぶのです」

「まさか。それで商売が成り立つのか」

「無粋なお店をおっしゃらないでくださいまし。白菊の街にも似たようなお店があるでしょうに」

全く同じでない、と答えようとしたのだが、気まぐらくなって口を閉じた。しかし、気になることがまだある。

「ところで、その女たちはどこにいるんだ？」一人も見かけないどころか、自分たち以外の気配さえ感じない。

「どこにもいませんし、どこにでもいます」要領を得ない答えだった。屋守の少女はうふふと笑う。「わからないでしょう。だから、姉様あねさまがお待ちになるお部屋に客様をご案内するまでが、わたしのお仕事なのです」

「それじゃ、どんな相手かは、むき合うまで分からないのか」

「モチロン、それが厭だと言われるお得意様もいらつしやいます。

そのような方は、ここを連れ込み宿としてお使いになりますよ。ど

うです、使い勝手がいいでしょう。仙石の旦那も、《弁天》を以後よしなに」

「ばかをいうなよ」

清々しくない冗談だ。

それどころか、彼としては、お膳立てされた場で羽化するの気分が良くなかった。据え膳食わぬのも、男がすたる。どうしたものかと気をもんでいると、磨り硝子の向こうで少女のかんざしが揺れた。

「……面倒な世になったものです。懐古話ですが、“丘向こう”の男衆は、十七にもなると白菊町まで出てきて般若心経を伝授されたものです」

なぜ今ここで般若心経などという宗教の話を、聖性を持ち出すのかと虎蔵はまごついた。さらに言えば、ガラス戸を隔てて自分と向き合っている女童めのわいわは、ほんとうに十ほどの娘なのか。老女に諭されているような気にもなってくる。

「御籠オヨモリの話です」とってつけたように明らかにし、カラリと廊下につながる戸をあける。「それじゃ、浴衣と下着は、籐の籠に入れておきますし」

「下着もあるの」

半ば呆れて問う。屋守は「はあ、」と抜けた返事を寄越す。当然だが何か、と言わんばかりだ。

「ごゆるりと。」

それから時を経ずして湯を終えた虎蔵は、女の童が待っているはずの廊下に出てみた。しかし、彼女はいない。おまけに廊下はまったくの暗闇だった。来た時はたしかにあまりが灯っていたはずなのだが。しんと静まり返っている。嬌声など聞こえてきそうにもない宿だ。

左右を見渡すと、廊下の奥にぼうつと青白い女が立っていた。あ

やうくぎよつとするとところであつた。着物を着て、髪を結い上げて
いる。虎蔵としばらく目を合わせると、すつと廊下の角を曲がつて
しまった。案内役の少女がいないので、ここで頼りにできるのはあ
の女だろつ。虎蔵は女を追いかけて廊下を進んだ。

また、廊下の突き当たりには女はいた。まるで虎蔵が追ってくるの
を待つていたかのようだ。はた、と気付く。アレが鶴屋の言つてい
た「姐さん」なのではないか。女は階段をのぼる。上階に姿を消し
てから、「すたん」と襖が閉まる音がした。いよいよ部屋に入った
らしい。虎蔵は生唾を飲み込んだ。どどどと血潮が流れ、ひどく喉
が渴く。下腹部がきゆうと縮んで痛くなるようであつた。

階段の先で見つけた部屋は、「大黒天の間」であつた。

鶴屋は腰を浮かせ、行灯の油の残りをたしかめた。とくに何の意
味もない行動であつたが、場の空気を動かしたに違ひなかつた。影
佐は、鶴屋のそのような妙な働きをよく目にする事があつた。事
実、伊藤大吉の表情は怒りから憂いに様変わりする。

「影佐、お前は《弁天小僧^{むかい}》に勤めていたのだから知っているだろ
う。この宿は生けるものと死したるものの、交わる場だ。あるとき
は客が気配であり、またあるときは抱かれるものが気配となる」

影佐はぐつと眉間に皺をよせ、不快をあらわにしてうなずいた。
「わしは両者に一夜の悦楽を提供しているに過ぎん。運^{おまえ}がよければ、
うつろつものは執着をなくしてうつしよを去る。影佐には不愉快で
も、これが最も俗であり、穏やかな送りの方だ。俗は時として聖に
先んじて救いとなる。なにせ、わしは仏門の僧でもなければ、キリ
スト者の悪魔被いでもなく、邪教の魔女でもない」

最後の言葉は鶴屋に向かつて言つたらしい。魔女とはマリのこと
か、と影佐は納得する。影佐から見れば、マリはまさしく「邪」の
字がふさわしい妖婦であつたが、鶴屋にとってはそうではあるまい。

己の師匠が無下にされているのだが、彼は臉を伏せて腕を組んだまま黙っている。

「そんな気配どもの慰めの場になればいいと思つとるが、時折、度が過ぎる馬鹿者や、悪意が訪れることもある」

風呂から客が消える。

伊藤はことさら重々しく告げた。

消えた客は、朝には「大黒天の間」で発見される。伊藤に言わせれば、大黒天の間は特別に豪華な部屋なので、ふつうの客には使わせない。ゆえに、屋守がそこへ客を案内するはずもない。また屋守に言わせれば、

「客の風呂の出を外で待つのだが、どれほどたとうとも出てこない。湯殿を検めると、すでに誰もいないのだと」

煙突から煙となつて抜け出すのでなければ、出口は屋守が見守るものただ一つしかないはずなのだ。どうやら、伊藤の把握していない悪しき者が、屋守の仕事を阻んでいる。

何より気がかりであるのは、大黒天の間で発見された客が、決まつて生気を失つたようであることだ。そのくせ、しまりのない腑抜けた幸せ面をしている。なにか聞こうともろくすっぽ答えてくれないので、真実はようとして知れない。ただ「また来る」と、うわごとのように繰り返す。ぼうとしたまま、熱に浮かされたように宿を辞するのだと彼は言う。しかし、その客はそれ以来ここへは来ない。よからぬ種をばら撒いているような気がしてならない、と翁は結んだ。

「被害にあつるのは決まつてうつつしおみ」

鶴屋は表情を曇らせた。

「まさかとは思つが、採戦の術か」

「かもしれん」

驚く様子もなく伊藤は請合つた。思案していた鶴屋は、いや、と打ち消す。

「似ているが、違つたろう。あれは曲がりなりにも房中術の一種、

生氣あつてのものだ。妖女は化けものだろう？ 生者でないんだ、おそらく我流のろくでもない技術を使うんだろう。形式だけ真似たような代物なら、なおさらまずい」

あのう、と影佐はおそろおそろ二人の先達の話の間に割って入った。

「ところで、仙石の旦那は」

あながち的外れな発言でもない確信しつつ。案の定、伊藤は口惜しそうに膝をたたいて「そこだ」と言った。

「ろくすっぽ話も聞かずに『好きにさせる』とわめき、今になって『まずい』とは何事だ、鶴屋。大黒天の間をこじ開けることはできないのか」

「冗談。開けたとして、そのあとはどうする。俺は拝み屋じゃない。せいぜいが部屋の後始末だ」

「謙遜するな」

長い息をついて、鶴屋は口だけの笑みになって影佐をふり返った。「つまり、虎蔵には人柱になってもらっている」

影佐は青ざめて瞬きをひとつ。

「……鶴屋さんつてば、最低。俺のことも、いつかそんな風に使捨てるんですね、」

彼は愕然と呟いた。

虎蔵が「大黒天の間」の襖を開けると、どつと黒いもやが吹き出てきた。眩暈の前触れかと思ひ、目を閉じて頭を振るとそのもやは消えた。ただ内の襖があるだけだった。

内の襖を開ければ、白檀の狂おしい香りが漂う。懐かしさとともに染みいる。祖父の虎蔵は、香木を愛する男だったからだ。質のよい香木は恐ろしいほどの高値で取引される。それに見合ってささやかで上品な香りであるべきそれが、ここでは身をつらぬくほど強烈

であつた。

「そんなところに突つ立つていないで、いらつしゃいよ」

奥から女の声が出た。行灯のわずかな明かりの中、女はすでに万事調いゆつたりと膝をくずしていた。後れ毛もなく見事に結い上げられた髪は飴細工が硝子細工のようで、一度ひびが入れば粉々に割れそうであつた。緻密な髪に対して衣紋の抜きは艶やかで、場慣れした感を漂わせている。

虎蔵は思ったよりも落ち着き払っている自分に驚いた。むしろ、なんだか眠たい。場違いな眠気だつた。先ほどまでの喉の渴きが嘘のように退いている。

女は膝をきゆうとこちらに向けた。さもなければ閉じそうになる臉をこじ開けて、無遠慮に女の容貌を検めた。肌の色は白いが、彫りの深い濃い面立ちだ。日本人離れしているが、美人には相違ない。

女は伏目がちに近寄る。白檀の香りが濃くなる。香りは女から発しているようだつた。彼女は猪口を差し出した。虎蔵はむつつりと黙つたまま受け取り、ぐいと一口に呑む。

すると、空になつた猪口を見下ろしわずかに驚く。

「旦那様は雨谷の町の焼酎が大嫌いでしょう。越後のお酒をご用意しましたよ」

この地域で気軽に飲む酒は隣町・雨谷町の焼酎であるし、虎蔵はそれが嫌いなわけではない。それで女の言葉に驚いたのではない。越後の酒といわれて、そうかと頷ける味ではなかつた。得体の知れぬものを飲んだ気がした。

「ね。わたし、旦那様のことは何でも知っておりますのよ」

顔の脇に徳利を持ち上げる女。徳利の腹に大きく虫食いのように穴が開いている。よく見るとポケット状で、そこに氷が入っている。「もう一口いかが」

「いらぬ、と言おうとしたがるれつが回らなかつた。わけのわからない音になつて、自分の耳にも入つてこなかつた。猪口をつき返した腕が、蛇のようにうねりだした。視界が回っている。」

二、と齒をむき出しにして笑った女の顔がぐにやりと歪む。目は一切笑っていない。

まさか。

酒を風呂上りに呑んだからといって。 たった一口で、 たった一瞬で酔うはずが無い。 何かを盛られたのだ。

まずい。

妙にハッキリした部分の意識はそう叫んでいるのだが、体がいうことをきかない。 そのまま仰向けに倒れこんでしまった。 麻痺した感覚の身体に、重みがかかるのがわかる。 同時に、先に見た黒い煙が視界を覆っていく。 おまけに眠気も強くなってきた。

「竜蔵さま。 わたしが誰だかわかって」

女はそんなことを言った気がする。

「会いに来てくださって、嬉しいわ。 でも、あなたはわたしを捨てた。 あの女ばかり可愛がって、赦せない」

彼女の冷たい手が彼の浴衣を剥いていく。 その一方、虎蔵は深い眠りの海に落ちていった。

鶴屋は不謹慎にも、ふきだして笑った。 とたんに影佐は、またいつものようにからかわれたのだと察して頬が熱くなる。

「心配するな。 あらかた見当はついてるんだ。 “ジジイども”の裏話も知っている。 伊藤の旦那はこの屋敷に引きこもっていてとうに麻痺してるだろうが、カゲ、お前は外から来たんだ。 屋敷にあがるときに、異様なまでのそれに気付かなかったか」

何を、とつろたえながら影佐はあたりを見渡した。 別段変わったものはいない。 あたりに気配もない。 鶴屋は蘇芳の瞳をすつと細めて微笑んだ。

「目に見えないものだ。 ……香りだよ」

十二、 弁天の妖女 中（後書き）

物語の演出上、正しい意味や形で用いていない語や、造語があります。ご了承ください。本編独自の解釈をしております。

十三、 弁天の妖女 下

からかわれるのはいいとしても、説明を果たしてくれないところが、この上司の最も困るところだ。

「その薄ら笑いで請合うのだから問題はないのだな、鶴屋よ。あと
のことはお前たちに任せる」

引受人は恭しくつむじを見せるが、流れた黒髪のすき間からは油断ならない蘇芳の瞳が光っている。

「お前たち、か。情けない話だ。影佐がここを出ると決めたおり、
確かに『息子を頼む』と言った。だが、任せたのは厄払いだけだ。

《どろぼう猫》で頼む、とは言つとらん」

何か言い返せばいいものを、鶴屋は黙って受け入れている。され
ばこそ影佐がかばうしがあるまい。

「オヤジ、鶴屋さんを責めるのは違うじゃないか。俺が、自分から
頼みこんだんだ」

伊藤は驚きに目をむいた。その反応にうるたえる。

「……知らなかつたんすか」

自分が《どろぼう猫》に転がり込んだことについて、いままで鶴屋はなんの弁解もしていなかったらしい。それでは、彼ひとり伊藤に悪く思われていたことになるではないか。あくまで気にしていないふうをよそおい、言われるがままの上司の態度にどうしようもなく腹が立った。それ以上に、好機である。この話題を逃してはならない。

「はつきり言つちまいます」影佐は畳に額を押し付ける。「鶴屋の
兄さんに、弟子入りしたいんです」

腹の底から出そうと用意してきた“宣誓”は、情けなくも震えた。広間は静まり返る。失笑さえおきなかった。行灯の火が、畳に張り付いた自分の影を淡くしたり濃くしたりする。そのあわいを見せつけられている間も、誰からの返事も貰えない。

「だめ、ですか」

いくら底意地の悪い上司とはいえ、ここで無関心を貫くほどの冷血漢ではあるまい。その期待で半分は気楽だった。むしろこの男に優しさがあることを信用しているのだが

「……鶴屋さん！ ちゃんと聞いてンすか」

おそろおそろ顔をあげれば、鶴屋は片手で耳飾を弄んでいた。さほど深刻に考えていないのだ。

「なんで今更、弟子入りなんて言うんだよ」

「“今更”じゃないです。ずっと考えていたんです」

「それなら、なおさらおかしい」

半ばうめくように言い、若輩をにらみつけた。自棄になって不貞腐れた態度の影佐が、しまった、という顔つきになる。

「茫然自失のお前を拾ったのは、他でもない伊藤の旦那だ。その恩人である旦那は、今すぐここを去れと言っている。まっとうに生きるってな。でも、残ると言うんだな」

じれったいほどゆっくりと問う。考える間もなく影佐は肯定していた。すると、鶴屋は「よし、わかった」と膝を打った。申し出を承知してくれたのかと顔を輝かせたが、どうやらそうではない。「言い分を聞いてやるに値する」と判断しただけのようだった。説明するよううながしてくるので、しどろもどろになりながら、「化物を退ける法を会得したい」だの、「ひとを救いたい」だのと胡散臭い話をつむぎだす。

しかし、鶴屋の第一の返事はすつとぼけたものだった。

「おまえ、身分はなんだ」

戸惑って眉根を寄せた。

「『なんだ』って……それは、学生でしょう」

「学生でも、大学生。俺のもとにつきたいのなら、学歴なんて必要なものでもないだろう。でも旦那はあえてお前を大学に進ませようとしたし、おまえ自身も旦那の意思を受け入れて努力した。そこに膨大なエネルギーが使われたってことくらい、わかるよな」

はい、と影佐は叫んだ。

「威勢の良い返事で誤魔化すな。本当のところが、“わからない”だろっ」

それにも叫んで返事をするのだから仕様がな。彼は瞼を閉じて額に手を当てた。

「……どうして今までその意思を旦那に隠してた。旦那は、お前の茶番につき合わされたのか？」

「いいえ」を唱えようと、青年は口を開いた。そこに電光石火の平手がとんだ。伊藤が驚いて身を乗り出した。

予想だにしなかつたろっ、なにしろ歯を食いしばる猶予さえ与えなかつた。舌をかんだらしい、しまりなく開いた口のすき間から、唾液と血が混じったものが手の甲にパタリとおちた。水に溶けたような、薄い赤だった。うっう、と形のない痛みを発している影佐の横っ面に、容赦のなく冷たい声色で「卑怯者」と言い捨てた。「旦那は騙せても、俺を騙せると思うなよ」

口の端にも垂れてきた血をぬぐった。口の中が鉄臭くてかなわな。傷口から溢れてくるものを、えずきそうになりながら我慢して飲み込んだ。ただ、恨めしい目つきを取り繕えるほど、簡単な程度でなかつた。おそらくこの男は容赦なく打った。いきなりだったとはいえ、自分の勘の鈍り具合にも呆れる。彼のほうでも手のひらが痛いに違いない。それなのに、涼しい顔をしているのにも腹が立つ。少しくらい痛みを分け合ったらどうだと思っ。

「大学に進んだのは時間稼ぎだろっ。この場合、社会に出ることすなわち参加の儀式だ。つまり、この世の人間になるということ。お前はそれを知っていたからこそ、あがいたんだろっよ。たいした執念だ。そこまでして稼ぐ時間はなんのためのものか、伊藤の旦那に釈明しろよ」

すでにして真実を手の内に持ちながら、影佐のうるたえる様を楽しんでるようだ。白々しい口調だった。

「……はじめっから正直に白状したとして、親父や兄さんは、俺の

弟子入りを許してくれたんスか。そして今、許してくれるんスか」

「問題は、弟子入りの如何じゃないだろう」

「なんだ、全部知ってるんじゃないスか。影佐は笑った。

「そうです。まともに歩く気なんか、はなからなかったんス」

伊藤の小さな嘆きが耳に入ってくるが、彼は上司から視線を離せないでいた。

何秒そうしていたかは知れない、ふと、本音が勝手に転がり出た。俺はただ、と言い、喉がこくりと上下する。

「帰りたいんです。家族に会いたいです。……こんなこと、言えるワケないじゃないスか。だって、帰れるはずなのに」

結晶が転がるように、目じりから涙がこぼれた。頬を伝い、豊の網目にそれはしみ込んで消えた。たた、たた、ともうしばらく涙は落ちた。

「帰れないからこそ、旦那はこの世で歩けるよう支えてくれた。それに、白菊横丁こんなくさにいたら、頭ん中が堂々巡りだと心配してくれてるのも分かるんです。でも、どうしたって堂々巡りは止みませんよ。

……赦してください。俺はこの先ずっと、旦那に恩は返せません。裏切っていて、ごめんなさい」

再び、頭を下げて恩人にひれ伏した。それでも、心情としては反抗を示しているのだ。

「あの化けものが憎いんです。だから俺は最初から鶴屋の兄さんを見ていた。もう一度あいつに会うために、俺は《どろぼう猫》に残るんです。ひよっとしたら、帰れるかもしれないじゃないですか。

帰れないとしても、仕返しくらいさせてくださいよ。……だから離れない。白菊横丁を離れません」

彼は顔を上げて、懇願するように二人を見上げる。

「赦してください。このままじゃ俺は、いつまで経っても人間どころか“青沼影佐”にもなれやしないんです」

言葉はふつつりと途切れる。それ以上言葉を紡がせることを、涙が赦さなかった。それでも時折、「赦してください」と嘆きが混じ

った。

夜の鳥が屋敷の外で鳴いている。それはまるで時刻を告げる鐘のようにも聞こえる。

長いこと口を閉じていた伊藤が初めに語りかけたのは影佐でなく、鶴屋のほうだ。声は酷くしわがれ、今にも事切れそうに頼りない。

「鶴屋、貴様は悪魔だ。老い先短い男に、息子の晴れ姿さえ、拝ませてはくれなんだ」

責められたのは、やはり鶴屋の方だった。しかし、再び彼をかばう言葉を出せるほど、青沼はまともではなかった。口を開けば、情けない嗚咽が漏れ、少年のように甲高い声が出てしまつたらう。

「ほら見る。だから先刻忠告したろう。『忘れるな』って、」

鶴屋は老人のさみしい視線を避けることなく受け止めたあと、冷え冷えとした表情で嗤った。いったいどこを見ているのか、寒々しい立ち姿だった。それを受けてはつきりと知れたのは、この男は影佐の腹の裡など全く興味がなく、彼の精神に至っては、実はひとつも波打つてなどいかなかったということだ。ひよつとすれば、影佐が卑怯だろつと誠実だろつと、目的がなんであるろつと全く気にしていなかった。なにしろ彼は“はじめからすべてお見通しだったから”。だから先の問答は、多くを語らなかつた伊藤の代弁だったに違いない。

それゆえなのか。どうやら自分は翁に赦され、一方の鶴屋は翁に恨まれたらしかつた。

朝の光で目を覚ました……のかと思えば、蛍光灯の白で意識が浮き上がったらしい。軽い平手を打たれた。「起きろ」という鶴屋の声がする。前髪をつかまれている様子なのだが、あまりの眠気に全

てが面倒だった。虎蔵は寝返りを打ち布団を転がる。身体は風邪のさなかのように気だるく、あらゆる気力が根こそぎ削がれているようだ。返事をするのも億劫だ。

今度は、頭突きされる。軽度の二日酔いのように痛みが響き、起きないわけにはいかなかった。無視すればまだ続きそうな気がしたからだ。これならば、まだ目覚まし時計の方が親切だ。ゆっくり瞼を開けると、すぐ前の鶴屋よりも、奥にいる影佐のほろが目に入った。影佐はかがんで動いている。床に近いところで。

「……どうして青沼がここに」

ここに、と言いながらここがどこであるかを失念していた。そういえば、起こしにきたのは禄助ではなく、鶴屋なのだ。

「大黒天の間だ。自分入り込んでおいて、忘れるなよ」
鶴屋が先手を打って答えた。

もやもやとした記憶の道筋がすつと一本になる。ようやく輪郭が見えてきた。「ここは《弁天》の「大黒天の間」で、自分は女に薬を盛られた。」虎蔵は、意識を失う直前に見た、女の不気味な笑いを思い出す。目は笑っていないのに口はカッと開かれ、歯をむき出しにした笑みを。身震いした。

しかし、である。傍らには女がいない。射すくめるような鶴屋の視線を忌々しく思いながら、コツソリと手を奥に這わせる。あの様子ならば、女と自分は寝たと考えるのが妥当だろう。ところが女の肉どころか、温度さえも感じない。今度は逆に、自分はひとり幻を見ていたのではないかと思えてきた。ひよつとすれば、風呂でのぼせて倒れたのではないかと、と。

「おい。ぼつとしてているが、平気か」
と、ちつとも心配そうでない顔で聞かれた。

「意識がなかった間のことを、なにも覚えていない」

およそ厭味の意味だけで答えた。厭味の応酬になると見込んでいたのだが、ならなかった。虎蔵の訴えに鶴屋はわずかに混乱の色を見せたのだ。並行して、影佐も動きを止めた。彼らは顔を見合わせ、

不可解そうだった。

「会話が成立するなら上等だ」

彼は膝をつき、スーツの懐を探った。取り出されたのは、妙に艶かしい姿勢の女の木像だ。腰は豊かに曲線を描く。上半身は全くの裸で、腰布一枚。そのくせ、結った髪にも首にも胸にも、派手な装飾品が巻きついていて。そして何より特徴的なのが、蛇のように植物がまとわりついていてるところだ。それを、虎蔵の鼻に押し当てる。「姐さん」の正体はこれだ」

白檀の香りがする。香木から彫られた女像なのか。贅沢な品だとすぐにわかる。

「見覚えは」

「いや、と虎蔵は首を振った。

「これは、もとは竜蔵のものだよ。屋敷を出るからといって、形見分けのつもりで伊藤の旦那に寄越した。でも、あの竜蔵のことだ。いわくつきの品で、ろくでもない妖女ニンゴがついてやがった。なまじ大切にしていたから、放っておくわけにもいなくて、次の男を紹介してやったってわけだ。捨てられたと思って竜蔵を恨むのも仕様無い。素つまさんが恨まれなかつただけかもしれませんがな」

鶴屋は一人、納得したように頷くが虎蔵にはとんだ災難だった。

「実を言えば、俺はすこしお前を心配していた」

「嘘をつけ、嘘を」

ほんとうだ、と肩をすくめせて見せたが信用ならない。

「この木像は、色欲の妖精だからな」

「知るか。どこかの成金趣味のみやげ物だろう」

「そんな気軽なものじゃないぜ。本物が憑いてるんだからな。おまけに房中術の使い手らしい。ただし、邪道の。たかが妖精が屋守を抑えるほどの力を持つとは、竜蔵の想定外だろうな。妖女の妖精としての性質と、場の力と、吸った精気が味方したわけだ」

虎蔵の表情がますます優れなくなったので、なんとか話は通じているらしい。房中術は本来、両性の充実と生の発展のためのものだ。

不道德なものでも、倫理に反した猥雑なものでもない。れつきとした道のひとつだ。道があれば、それを悪用・改悪する者があるのは世の常。その悪の側面は人を害することもある。

「めずらしく察しがいいな。さすがに、体調に影響があれば分かるか。並の男なら、だいたい一度で致命的だ。よくて獣になっているかな」

そういえば近頃、このあたりで銃の事件や強姦が多発していた気がする。まさかとは思っても、ばかばかしくてこれらに関連付ける気になれない。なにしろ場所柄、この手の事件はもともと多いのだ。「と、いうわけで、耐性のないお前を差し向けたことを少し反省していた。さすがにこん睡状態だったとは思えないが、慰みの間の記憶も感覚もないなら、いい」

いいのかわるいのか、判断しかねた。いろいろ言いたいことはあったが、まずおかしいのは、女が自分を竜蔵だと思い込んでいることだ。

「私は祖父じゃない」

「じゃあ聞くが、竜蔵とおまえとを分けるものは、手腕以外に何かある」

「すぐさま反論しようとしたところ、『見てくれた』なんて答えてくれるな。と封じられた。」

「どうして竜蔵の不在をお前で代えられるのか、考えたことはあるのか。どう見積もっても利益はマイナスなのに、だ」

鬱陶しそうに言い捨てながら、立ち上がる。ついでに、新しい浴衣と帯を放って寄越した。虎蔵は全くの裸だったので、ひとまず黙って新しい藍の浴衣の袖に腕を通した。つめたくてざらりとした感触だ。紬のよう。

「何のためにそんなことを」

「人外の連中に理論を求めるなよ。等号で結べるところなんてない」
身も蓋も無い回答を寄越して、伊藤に報告する、と言いながら彼は部屋を出て行った。ひとごとである鶴屋はいいが、虎蔵は体を張

ったのだ。もし飲まされたのがひどい毒であれば死んでいた。

「エライ災難でしたね」

のそのそと着替えを終えると、雑巾を絞りながらの気張った声で影佐は話しかけてきた。（そもそも彼は何を拭いているのか。汚れなど見当たらない。）

「まったくだ」

「体、辛いつスよね」彼は気の毒そうに苦笑する。「精気を抜き取られてますからね。精気はよーするに生命力ですし」

「で、あいつはもう化けてでないのか？」

「ここでは、無理でしょうね。掃除しますし」

「ひょっとして、鶴屋や青沼が助けてくれたのか」

渦中に放り込んでおいて、「助けた」というのはおかしな話だが。

「まさか」鶴屋の足音が聞こえないのを確認して、声を落とす。「

鶴屋の兄さんは、旦那が殺されないことを見越していたんですよ。

あの女のセンチメンタルを満たしてやれば大丈夫だって、」

それにつけて、「ばかな」と呆れるしかない。

「センチメンタル？ 呪詛の間違いだろ。あの女は祖父を恨んでいたんだぞ。青沼はあの憎悪を目の当たりにしていないからそんな夢見がちなこと……」

「俺だってそんなこと思ってないツスよ」

強い口調でかぶせてきた。ほとんど「死ななければおかしい」と言っているようなものだ。自分で言っておきながら、虎蔵は狼狽する。

「女は旦那を殺すつもりだったけど、ただ単に、力が及ばなくて殺せなかっただけじゃないスか？ それこそ、精気が足りなかったんだ」

ぼたぼた、と水滴がバケツに落ちた。限界に近いほど彼の腕は交差している。雑巾が破けやしないだろうか。その彼の横顔をよくよく目を凝らしてみると、頬が赤く腫れていた。まるで打たれたよう

に。

「あいつ、いったいどれだけの人間を狂わせたんスカねえ」

声は震えていた。いぶかしくて眉根を寄せたが、そのころのうちは知りようもない。あえて開かせることもない。虎蔵は、すまんとだけ言った。なぜ自分が謝るのか分からないままにはあったが、すると今度は向こうが慌てて謝ってくる。この応酬のさなかに、鶴屋は帰ってきた。邪魔だといってまとめて追い出された。それから彼が出てくるまで、大黒天の間の襖はなぜか一寸も開けられなかった。

今回の騒動はもとをただせば仙石竜蔵にいきつく。先代の失態は《どろぼう猫》の失態だ。報酬は無しになった。木像も引き受けることになった。虎蔵の手元に届く頃には、胡散臭い札で嚴重に封された木箱になっていた。鶴屋には、「竜蔵に送りつける。自分の女の始末は自分でさせる」と命じられた。

手続きを済ませ配達屋から出ると、雨が降っていた。彼は傘を忘れたので、頭を鞆で覆いながら駆け出した。今年の梅雨は長そうだが、そんな予感がする。

余談だが、送りつけた“女”は宛先不明で戻ってきた。どうやら祖父は今、正しく行方不明らしい。その後の木像は、仙石の屋敷に飾られることなくいつの間にか消えていた。もちろん、封を開けてなどいない。

禄助に問えば、なんとかの一つ覚えのように、「黄泉にいったんです」と繰り返した。

十四、 谷相高校 三

小島渚と尾上松子は、映画部部長の大和田の教室を訪れた。

あまりの騒がしさに、二人は顔をしかめた。昼休みの教室とは、ほとんど花盛りの少女のための園だ。数少ない男子生徒はたいいてい、食堂へ行くか体育館へ行く。(教室に残る少数派の男子は、肩身狭そうにもそもそと背を丸めて食事している。)自分たち一年生の教室よりも、年長のクラスのほうが、のびのびとして自由そうだ。三年生の教室というものは、落ち着きがあるものだと思いついていたのだが、この様子を見る限り、そんなこともなさそうだ。

乙女たちはおしゃべりに夢中で、後輩の訪問に注目する場合はなかった。おかげで、渚と松子は視線を気にすることなく目当ての人物を探し当てた。目当ての人物 大和田は、教室の真ん中あたりの席にいた。彼女はグループにも属さず、一人で座っている。パンを食みつつ、映画雑誌(教科書ではなさそうだし、ファッション誌でもなさそうだ。)を広げて読んでいる。ときどき、思い出したように牛乳を流し込む。松子は小さく「粗野ね」とつぶやくと、顔をしかめた。渚は、そうは感じなかったが、大和田への小さな不満から松子に同意した。

二人は、グループの間をぬい、そろそろと教室を進みいく。

「大和田先輩。どうぞ」松子は仏頂面で、素のままの水兵服を突きつけた。

第二宿直室の匂いが、ほこりの匂いがかすかに漂う。制服はしっかり受け取りつつも、「なんか用？」の表情で大和田はパンを食み続ける。

「お忘れですか」松子は、いらいらした声で言った。「先輩がご所望の、谷相高校の昔の制服ですよ。持ってきたのは一着だけですが、宿直室のなかにはまだ数着ありました」

大和田は、牛乳パックにじかに口をつけて飲んだ。白くなった口

元を伸ばしたシャツの袖で拭きながら、かすかに笑みをうかべた。
「ああ。そういえば昨日、あなたたちに頼んだような。助かるわ。
どうもありがとう」

渚は文句を言いたげに口を開くが、松子に肘でつつかれる。黙って、と親友の横顔が訴える。

「ごめんね。わたし、いろんな人に頼みごとをしていてね。誰に何を頼んだか忘れちゃうくらい。でも、こういう些細なことって、監督の仕事じゃないわ。手足がやることよね」

「些細、ですか」カチンときて、つい、つつかかるような口ぶりになった。

他人の時間を奪っておいて、失礼なことだ。創造することは何にも勝る重大なことだと信じきって、あらゆる社会的な責任が免除されると思っている手合いかもしれない。二人は警戒を強めた。

「そうよ」

大和田は、旧制服をうつとりと眺めながら言う。渚は松子を振り向き、顔面の筋肉を総動員して最高のうんざり顔をつくってみせた。それは、ことのほかひどかったらしい、彼女はふきだしてしまった。
「おかしい？」

大和田の目つきが急に鋭く探るようになる。当然、松子の顔にはもう笑みは残っていなかった。「いいえ」と首を振るだけで精一杯だった。たかが田舎の高校のなかでのこととはいえ、実際に場数を踏んだからこそ、大和田は、怖いものナシという態度がとれるのだろう。たとえ曲がついていても、背骨はある。それに比べたら、自分など軟体動物だった。

渚は、そそくさと「さよなら」を告げて歩き出した。この上級生とは、いざこざを起こさないほうがいい。それはわかっていて。一人で昼飯をとっている（しかも、まったく平気そうな顔で。）女子高生が、曲者でないはずがない。普通でないから、女子の輪からあぶれるのだ。普通でないから、まったく構わないのだ。

「ねえ」大和田が声を張り上げた。「助かりついでに、もう一つお

願いがあるんだけど」

「いつそのこと、教室の騒がしさにかこつけて、聞こえないふりをしようかと思つた。でも、もう遅い。足を止めてしまった。」

「あなたたちの部室を、貸してちょうだい。第二宿直室を」聞いていようがいまいが、という調子で彼女は大声を出し続ける。具合の悪いことに、教室の声は、三人のやり取りのためにポリウムを落とした。つまり、ほかの先輩たちからも、注目されている。「第二宿直室のシーンは、第二宿直室で撮りたいの。ほんの数日のことよ。終わればすぐに撤収するわ」

「構いませんが、」渚は即答した。松子がさつと自分を見る気配がした。「あの部屋、ほんとうに何もなかったと思いますか。なんだから気味が悪いですよ」

「あつてもなくても、関係ないの」

第二宿直室に幽霊が出る話を撮るくせに、そんなことはまったく信じていないようだった。いや、信じていないからこそ撮れるのだろう。

「でも、昨日、」

と、言いかけて戸惑つた。昨日、なにがあつたというのだ？ なものもなかった。ほんとうに、ただ、気味が悪かつただけではないのか。その一方で、大河内禄助の妙な言葉が頭の隅をつつく。あれは、何かの警告だつたのではないか。

「ひよつとして、貸し渋っているの？」大和田は、渚の沈黙を、悪い意味で受け取つた。疑り深い表情で見上げてくる。「はつきりさせておかないといけないわね。わたし、あなたたちの部が成立する前から、第二宿直室での撮影許可を三船先生に申請していたの。でも、先生はお忘れだつたみたいで、お返事はいただいてない。今は新設の《洋裁愛好会》が管理しているから、会長である小島さんに申し出ているだけだね。ねえ、どうかしら」

「まさか！ 断るだなんて」大和田の言葉の最後をさえぎって、渚が叫んだ。焦つて、ぶんぶん手を振っている格好悪い自分の隣で、

松子はいつたいどんな表情をしているか。見たくもない。「どうぞ、なんでも・いつでも、ご自由に使っていただいてかまいません。むしろ、私たちが許可すること自体、なんだかおかしいっていうか、生意気っていうか……」

「そんなことないわ。手続きは大事なことよ」「にこりと、すっきりした顔つきで彼女は微笑んだ。「じゃ、交渉成立ね」

学校非公認の部活動のボスが、何まともそうなことを言っているのだ、とは思っても口にはしなかった。渚は頷いた。

自分たちの教室に戻る途中、松子は一言もしゃべらない。つかつかと早歩きで自分の前を進む。どうやら、怒っている。その理由は、大和田に部室を明け渡したことだとは想像がつく。だとしても、断るべきだとは思えなかった。あの部屋を「すぐに、どうしても」必要としている大和田に比べて、自分たちはどうだろうか。大和田の熱意を折ってまで、自分たちが貫くべきことがあるのか。まだ、ないだろう。なぜ松子は、それをわかってくれないのだろう。「じゃあ、どうすればよかったの」と、意味のない問いかけをしたくなった。でも、それではあまりにも子供じみている。

「ねえ、松子ってば。もう少しゆっくり歩こうよ」

彼女は足を止めて振り返った。案の定、きれいなはずの顔は、不満でゆがんでいた。彼女が言いたいことをまとめるまで、渚はたっぷり黙っていた。

「……大和田先輩は強引だし、三年生の教室は怖い。最後のほうは、みんなが私たちの話を聞いてたし、見てたわ。だからって、ペコペコすることないじゃない。おかげで、一方的な約束になったわ」

叱りつけられているような気分になった。しょぼくれて適当に返事をした。

「ばかね」どうせばかですよ、と渚がふてくされるのを無視しながら、松子は続けた。「お聞きしますけどね、会長さま。いったい何日の間、貸すことになるのかしら？ その間、私たちの活動はどう

なるのかしら？ 具体的な条件をご存知？」

「『数日』。私たちの本格始動が、少し遅くなるくらいだよ、きつと大丈夫」自信なさ気に言った。「詳しいことは、申請書を書いてもらえばいいよ。……これから」

「それじゃ遅いわ」

「そんなことないよ」

「いいえ！」確信を持った響きだったので、つい黙ってしまった。

「断るべきだった、とは言わない。むしろ、貸すべきだったわ。でも、安請け合いはすべきじゃなかった。あの人は、口約束でも権利を主張するわよ。もし、わたしたちが不利益をこうむったら、あなたの人と戦える？ 戦うための武器はある？」

権利、不利益、戦い、武器。松子の言葉は抽象的で、それぞれが具体的に何を想定しているのかわからない。公民科の教科書のようにだ。

「松子、難しくてよくわからないよ。たださ、『なんでも・いつでもご自由に』なんて言ったのは軽率だった。ごめん」

「そのとおりよ」

間髪いれずにそう言うので、渚はさすがにむっとした。そこまで責める必要があるとは思えなかった。

「松子は、深刻すぎるんじゃないかな。大和田先輩の言ったとおり、これは些細なことだよ」

歩き始めた松子は、いったん立ち止まり、それから振り返った。また怒られるのかと思いきや、切なそうにしている。勢いがそがれたし、罪悪感がじわりとわきあがってくる。

とりつくろうように、渚は笑った。

「ねえ、なんとかなるよ。それに、まだ何も問題はおきてない」

「そのとおりよ」また、その言葉だ。でも、前のほどの力がない。

「あなた、私の言ってること、ほんとのほんとにわかってないと思う」

「お願い。わかるように言ってくれないと。私はバカだもん」

「そういうことじゃないっつたら！」松子の声は、もう、震えていた。それでも、ピシヤリとしていた。「わかってほしくて言ってるんじゃないの。わからなくて当然よ、だって、あなたと私の気持ちが違うんだから。違うのね、って確認しただけ。でもね、私、ほんとうに楽しみだったのよ」

何が？ と聞きそびれた。松子が駆け足で去ってしまったからだ。しばらくその場に立ち尽くしていた。頭を殴られたように、彼女の気持ちに気がついた。同時に、申し訳なさと胸が締め付けられる。松子は、渚の頼りなさをなげいただけではない。軽率さに呆れたことは、全てではない。これからこうむるかもしれない不利益は、仮定の話だ。難しく抽象的な言葉は飾りだし、意味もどうでもよかつたに違いない。だから、わかってもらうための言葉を言わなかつたのだ。

教室に戻ると、松子は早退していた。あなたは深刻すぎるよ、と笑い飛ばすことなんてできない。今の出来事は、ひどく深刻だった。根本的に、渚は松子に軽蔑されたのだ。

なさけなくて、泣きそうだった。どうやって回復すればいいのだろうか。

翌日、松子は始業ベルぎりぎりの時間になっても現れなかった。彼女に謝りたくて、早く仲直りしたくてやきもきしていたのに。重苦しい気持ちと一緒に、一限目の「物理」の教科書に顔をうずめた。「電流」など、どうでもいい気分だった。こんな気分の日に限って空はひどい晴れで、むしむしと暑かった。ほとんどの生徒がシャツ姿だ。

そこでふと、大河内禄助もシャツ姿だろうか、と気になった。身

を起こして、中庭を挟んだ反対側の教室をつかがう。彼の教室は暗かった。この時間は特別教室の授業なのかもしれない。彼のクラスの間割を暗記するほどぼれ込んであるわけではない。

間延びした（ように聞こえる）始業ベルが鳴り響いた。白衣の物理の教師が教室に入ってきた。情性的に、規律、礼をしてふたたび席に着く。教師はすぐには授業を始めない。聞く必要もないような導入の話をして、生徒の意識を物理に近づけようとする。だから、電流なんて知らないっつーの。渚は同じことを思って、また、禄助の教室を見た。

二人、教室には二つの白い影がある。

先に見たときには、誰もいなかったはずだ。一瞬の隙に、なかに滑り込んだらしい。なんと、その一方は、申し合わせたように大河内禄助ときた。あの明るい髪は彼しかいないからだ。もう一方は、女生徒。そうとわかる特徴は、長い髪だけだ。女は、戸のあたりでこちらに背を向けるように立ち、禄助と向き合っている。渚は、よく見えるようにと身を乗り出した。誰もなくなった暗い教室で、あの二人はいったい何をしているのか。いや、何をしようとしているのか。もう授業ははじまっているというのに。なにより、彼が人と並んでいるところなどはじめて見た。盗み見ていたいという正直で野卑な心と、私には関係ないと冷静ぶる心が拮抗した。

心が揺れている間に、窓にカーテンが引かれた。自分の教室のほうだ。はっとして渚は身を引いた。中途半端な幕切れだ。

その直後だ。松子が教室に滑り込んだ。遅刻はしたけど、欠席じゃない。ぱつと心が華やぐ。いま見たことを松子に報告して、一緒にはしゃぎたかった。しかし、だ。松子の張り詰めた横顔を見ていたら、この切り口から話しかけるのはためらわれた。この話題が楽しいのは、擬似恋愛だからなのだ。渚が禄助に恋をしているように興味を持って話すこと、そういう軽さでしかない。恋の真似事であって真剣ではない。すくなくとも、松子はそういうふうを受け取って、そういうふうに笑ってくれるし、一緒に楽しんでくれている。

対して、彼女を傷つけたことは、とても重くて、とても重大なことだった。だから、いまは話せない。「大河内祿助の話題なんて、松子の気分をちょっと楽しくするための嗜好品程度だ」、そう片付けてしまえば、いちばん都合がよかった。

カーテンを閉めていった物理の教師は、教科書で顔をあおいだ。「めずらしく晴れたと思ったら、いやに暑いな。日差しもきつい。もう夏がくるな」

もう、夏が来てしまう。そして夏も、あっという間に過ぎてしまっただろう。適当に過ごしていく日々で、何も残らないかもしれない。どこかに碇を下ろさないと、流れていってしまうかもしれない。

なんとかかなると思っていった渚のお気楽さは、今日はあまり役に立たなかった。松子は、あきらかに渚をさけていた。休み時間のたびに、彼女は教室を出て行く。洗面所へ行ったのかと思うと、そうでもない。授業開始前ぎりぎりになって、彼女は戻ってくる。自分と顔をつき合わせないように、どこかに隠れているのかもしれないと思うと、切なくなった。そこまでしてさけられている自分が、ではなくて、一人ぼっちになって、どこかで時間をつぶしているであろう松子の姿が、だ。話し合う時間をくれる気がないに違いない。

喧嘩は初めてではないけど、久しぶりだ。どう收拾をつけようかと考えていた。決定的な仲直りのきっかけがないまま、ずるずると時間が過ぎていく。放課後を待つしかなさそうだった。

だが、待ちわびた放課後は、どうやら使えない。大和田が教室に現れたのだ。使い勝手がいい後輩として、すっかりマークされてしまった。彼女は、戸の手前で手招きをする。重たい足を引きずってそこまでいくと、渚をよけてすつと誰かが教室を出て行く。黒くて長い髪の後姿ですぐにわかった。松子だった。大和田は少し驚いた顔で彼女の背中を見守っている。

「あら、尾上さんじゃない。挨拶もなかったわよ。できれば一緒に来て欲しかったのだけだ」

その言葉に、渚の心は落ち込んだ。喧嘩した、と話す必要もなかった。なにしろ、この人のせいなのだ。早く開放されたくて、何か用かと事務的に聞いた。すると、第二宿直室の掃除をしるという。なんでも、「人に貸すものは、きれいにしてから渡すべき」だからだとか。ベリーショートのを髪を撫で付けながら、大和田はにっこり笑う。こちらは、彼女とのやりとりには最高にうんざりしているというのに。

「撮影が終われば、あなたたちが使うでしょう？ 自分も使うんだから、自分で掃除するのはあたりまえよね」

「私もそう思います。でも、今日はちよつと、」

松子のあとを追いたくて、そわそわしながら言った。

「だめよ。今から使うんだから」

は？ と間拔けな声を出すと、彼女は白々しく驚いた。松子の言うとおりだ、「きちんと話を聞かなかった私が悪うございました」、と思った。

「バイトなわけないわよね、だってまだ15歳よね。とにかく、今日の放課後は、こちらを優先してちょうだい」

「……どうやら私は、いつの間にか、“あなたの”アシスタントに志願したらしいですね？」

ちいさく噛み付いたのだが、彼女には傷一つつけることはできなかった。

「ほんとうに“映画部の”アシスタントになればいいじゃない。ちよつど、衣装係が増えればいいのに、って思っていたところなの」

「それなら、家政科の子をスカウトすればもつと素敵でしょうね。」

きつと、掃除も得意ですよ」

「あなたが思いつくことを、わたしがしなかったと思う？」

そうこられては、渚も、それこそ大和田のようなにっこりの笑みを浮かべるしかなかった。

「あなた、頑固ねえ。部室使えないあいだくらい、人助けしても罰はあたらないわよ」

頑固。まさか。その反対だからこそ、松子に愛想つかされた。

「何日間使う予定なのか、教えていただかないと」

大和田は、予備を含めて五日間だと答えた。思っていたよりも短い期間だったので、内心、ほっとした。もしひどく長ければ、翻つて断るつもりでいた。部室を使いたいからではなくて、大和田が嫌だからという理由で。

「じゃ、早速掃除をしましょう。鍵を渡してちょうだい」

「すみませんが、お断りします。わたしたちにも、活動があるので渚は、しゃんと顔をあげた。

「今は部室を使えないじゃない」

「部室がなくても、できます。いえ、やります。では、お話はこれで。失礼します」

第二宿直室の鍵を彼女の手に押し付けた。それを手放したとたん、心が軽くなつて背筋が伸びる心地がした。大和田にすっかりノーが言えたし、松子の機嫌を直せる情報も手に入れた。五日間。たったの五日間なのだ。なんとかなつたじゃないか、渚は小さくつぶやいてスキップした。松子に会いに行く。今することは、それしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011n/>

白菊横丁

2011年10月13日02時49分発行